

# 君だけの『ヒーロー』

縦ロール兵装

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

まるでコミックのようにヒーローが日常に存在する世界。そんな世界に二度目の生を受けた主人公は、己の原点に背を押されヒーローへの道を歩む。

きっと、それは間違っている願いで。

それでも、その行いを誰が否定できるのだろうか。

これは、誰かにとっての『ヒーロー』の物語。

主人公をTSさせておいてラッキースケベさせないなんて意味がわからないので、精神的BLは入れさせていただきます。

# 目次

遠藤初来：オリジン（改稿済み）	1	遠藤初来の日常―ナンパ編―	121
物語の始まり（改稿済み）	8	心配させないで	132
個性『個性創造』（改稿済み）	32	幼稚園児から小学生へ	142
家族会議（改稿済み）	55	血の繋がりを感じる……	159
中学生日記 一年生編 ①（改稿済み）	75	実技試験総合1位 v s ヒーロー科試験総合1位	174
中学生日記 一年生編 ②（改稿済み）	94	緑谷出久：オリジン	204
中学生日記 一年生編 ③（改稿済み）	103	遠藤初来の日常―修羅場編―	226
闇に蠢く	111	好きなんだろお？ ジャンプ漫画特有の無茶理論修行回がさあ！	243
		スタートダッシュ	263



# 遠藤初来：オリジン（改稿済み）

しわくちやの布団、シンクに置かれた洗われていない食器、埃のついた閉められっぱなしのカーテン。

必要最低限の生活用品しか残っていない生活感の消えた薄暗い部屋で、1人の男——渡世善継わたせよしつぐが泣いていた。

手には『僕のヒーローアカデミア』というジャンプコミックの単行本がある。

彼は、その1話目の『緑谷出久：オリジン』を見て号泣したのだ。

「いづくう……よかつ、よかつたなあ……っ！」

僕のヒーローアカデミア。

個性という名の超能力を世界総人口の約8割が持つ、超人社会と化した世界の物語。

私利私欲に個性サイヤランを使う敵から、個性を駆使して人々を守るヒーローが存在する社会で。

個性を持たない、無個性の少年緑谷出久みどりやいずくがヒーローを目指す物語。

個性を持たないがゆえに誰からも認められなかった少年緑谷出久が、憧れていたNO

「ヒーローのオールマイトに認められ「君はヒーローになれる」と言つて貰えた、緑谷出久の原点となる話。

ようやく落ち着きを取り戻したのか、善継は涙の止まった目を擦り、鼻水を啜る。余程泣いたのだろう、鼻をかんだティッシュペーパーが小さなゴミ箱から溢れそうになつていた。

視界に入ったそれを見て、思わず笑う。

「いくらなんでも泣きすぎでしょ……」

彼自身、泣き虫だと言われる事はあつたし、その自覚もあつた。

映画であろうが漫画であろうが小説であろうが、感動したらすぐに泣くその姿に、友人から揶揄されることも数えきれないほどあつた。

それでも、これほど泣いたのは彼の記憶になかつた。

閉じた瞼の裏に浮かぶのは、最後のシーン。

緑谷出久と、オールマイトが対峙する場面。

少年の想いが報われた瞬間。

『君はヒーローになれる』

力を持たない少年がそれでも誰かの為に走り出した。その勇気を憧れの人に認められた。

彼はその姿をカッコいいと思った。彼のその姿に自分もそうなりたいと思った。漫画の中の登場人物でありながら、緑谷出久は渡世善継の憧れになった。

電気の消されたその部屋を、ノートパソコンの無機質な明かりが満ちていた。

1人の少女――遠藤<sup>えんどう</sup>初来<sup>はつぎ</sup>が泣いていた。

涙に歪む視界に映るのは、机の上のノートパソコンの画面。

そこには、昔起きた大災害、その直後の1人のヒーローのデビュー動画が流されていた。

No.1ヒーロー、オールマイト。

人々を笑顔で救い出す最高のヒーロー。

誰にも負けない最強のヒーロー。

その姿を人々の心に焼き付けるナチュラルボーンヒーロー。

零れる涙を拭うこともせず、まるで縋り付くかのようにただひたすらにその雄姿を見つめ続ける。

「ボクは……ヒーローに、なれない」

絞り出した言葉は血の色を錯覚させる程に震え、また一筋涙が頬を伝う。

どれほどの苦悩の中でその答えを出したのか。

誰にもそれを悟らせずに今日まで至った少女の心は、今日粉々に打ち砕かれた。ずっと、生まれた時からずっと己に問いかけて、行きつくのは自身の否定。

だというのに、今日出会ったばかりの同じ年の少女は、初来にまるでヒーローを見るかのようなまなざしを向けてきたから。

まるで幼子が癩癩をおすかのように、初来は再び己に突き付ける。

「ボクは、ヒーローになれない」

それが、生まれた時から己に問い掛けつづけた、遠藤初来の答えだった。

無意識に伸ばされた指先が画面をなぞる。

その先で笑顔を見せるオールマイトに、初来は届かない言葉を投げかける。

「ボクはヒーローになれないけど……そんなボクでも、貴方を支えられますか……？」  
もう薄っすらとしか思い出せない前世の記憶、その中にオールマイトが重症を負っているという情報があつた。

傷を隠し、誰かを救ける為に拳を振るい、誰かの心を救う為に「私が来た」と笑う。

そんな姿に心を打たれたから。

この人なら、嘘をついてようやく一人を救えた自分なんかよりよっぽど皆を救えると思つたから。



だから、遠藤初来はオールマイトを支える未来を望んだ。

この時から、遠藤初来の夢は『オールマイトのサイドキック』となったのだ。

瞬きの一瞬に流れた、ボクの原点オリジンを振り払うように一歩前に出る。

まるで終末を嘆くかのように、泣き出しそうな曇天が地平線の向こうまでをも覆いつくしていた。

風が吹く。

土埃の混じるそれは、瓦礫の山を幾つも越えてボクの足元を駆け抜けた。

瓦礫。

瓦礫。

瓦礫。

出来の悪い石畳のように一面に散らばる瓦礫は、かつて人々が日々を過ごしていた場所の残骸だった。

もう既に視界に人が生活できるようなところなどなく、人々の悲鳴と泣き声だけが生存者がいることを知らせている。

唐突に、地面が凍り付く。

念のため、軽く跳躍して回避してからもう一步を踏み出す。

みんなも戦っている。知っていた筈の事実にも、心が震える。一人じゃないと胸が熱くなる。

ふと、視線を感じた。

瓦礫の山が敷き詰められた大地から顔を出すように存在する小高い山。

その頂点に築かれた瓦礫の山の上で、一人の男が立っている。

短く切りそろえられた髪、整っていないながらもどこにでも居そうな風貌、黒のスーツに覆われた巨軀。

なんの変哲もない男だというのに、ボクに根付くオリジンが全力で叫んでいる。

こいつは敵だ、と。

相容れない、倒すべき巨悪だ、と

足を踏み出す。

この地獄を作り出した男と、ボクは今から互いを否定しあうのだ。

距離が縮まる。

互いの攻撃が当たる距離で、ボクらは立ち止まる。

何を言えればいいのか、少しだけ悩んで、すぐの答えが出た。

今までずっと支えられていたから、その期待に応える為に。

目の前に立つ巨悪に、精一杯の啖呵を切る。

「来い、オール・フォー・ワン A F O ! ビョロ ボクが相手だ！」

## 物語の始まり（改稿済み）

夢を見ている、これはまだボクが渡世善継だった時。

そしておそらく、ボクが遠藤初来になったときのこと。

「ふう……やつと涙が止まった」

『緑谷出久・オリジン』の衝撃で止まらなくなった涙がようやく止まり、僕は大きく息を吸って、吐いた。

逸る心と反対に、ゆっくりと開きっぱなしになっているページを捲る。

次のサブタイトルに目を通そうとしたその瞬間、唐突にめまいが襲ってきた。

「ぐっ、なん……っ！」

言い切る事も出来ずに、床に倒れ伏す。

何かと繋がった。そうとしか表現できないような奇妙な感覚が全身を包む。

そして、それだけでは終わらなかつた。

（引つ張られてる……？）

何か、不可思議な力で魂だけどこかに引き抜かれている感覚。

物理的な力なら対処のしようもあつただろうけど、今まで体験したことのない感覚に

その場で対応できるわけもなく。

魂が肉体から引きはがされたような。

ブチツ、という不吉な音を魂で聞いた瞬間、僕の意識は落ちた。

深海から命からがら浮かび上がり、水面から顔を出したかのような意識の覚醒に、思わず呆然としてしまう。

目の前に広がるのは天井。見たことのない天井だ。……いや、見覚えはある。とかいっつも見慣れた天井だ。

(……頭が、変になりそうだ)

世界が揺れている。いや、揺れているのは僕自身だ。

身体を起こそうと横に転がり、それ以上動けない。

まるで思考と肉体が分離したかのような凄まじい違和感が意識をかき乱す。

「どうなって……なん、で、声が」

気を落ち着けるために開いた口から零れたのは、明らかに僕のものではない……幼子の声。

床についた腕が僕の腕じゃない。口から零れるのは僕の声じゃない。

(夢なら、醒めてくれ……)

「ぐっ……う」

抑えきれずに嘔吐する。

吐瀉物の匂いが広がってゆく。

異変に気付いたのか、誰かが走り寄ってくる気配がした。

「初来……？ 初来っ、あんた吐いて……っ」

背中を撫でられる。優しい手。ボクの好きな人の手。

（……好きな人？ 何だそれ、知らない）

見上げると、見知らぬ女性が目に涙を浮かべてこちらを見ている。

——ボクのお母さんだ。

（ああ……そうだ）

お母さんを見た瞬間に、僕の記憶にボクの記憶が急激に流れ込んできた。

ボクは力を抜き、意識を手放す。

大好きなお母さんが傍にいてくれたから、それまで感じていた恐怖はきれいさっぱり

なくなっていた。

目を覚ます。

久しぶりに見た、ボクがこの世界に（多分）生まれ変わった時の夢。

最初は遠藤初來の記憶に戸惑うボクだったけど、別に不都合もないので気にしないことにした。

転生か、憑依か。友人である文書に無駄に押し付けられた漫画やライトノベルの知識によると、ボクに起きた現象はそのどちらかだ。

それ以上はわからないし、仮に分かったとしても何ができるわけでもなく。

ボクは、男としての意識を持ちながら女として生活を送っていた。

「ん……髪、整えるの邪魔くさいな」

立ち上がり、ぼさぼさの髪を撫でつけながらパジャマを脱ぐ。

鏡の前に立つと、薄青のショーツのみ着けているボクの姿が映る。

中学生になり、すでに身長165センチを越えたボク。その成長力は胸にも及んでおり、ブラを付けていないDカップが惜しみなく晒されている。ボクは就寝中ノーブラ派だ。

くるくると明るい茶色の髪を指に巻き付けてみる。

肩まで伸びた髪は毎日の手入れが非常に面倒で、加えて寝起きは爆発頭。

鏡の向こうに立つボクは、心底面倒くさそうな表情でこちらを見ていた。

（あれから、2年か……）

2年前の秋、ボクと文書が友人になった日。

その日から、ボクは髪を伸ばすようになった。

(コンプレックスというか、なんというか)

あの日本人形みたいな容姿と、女優でもそう見られない程の整った容姿。そして感情豊かに変わる表情。

前世含めても並ぶ者のいない可愛さに、男なのに女という不安定な立場にあつたボクは、憧れを抱いたのだ。

女の子らしい仕草とか、オシヤレとか、男にはわからない女の子同士の微妙なあれこれとか。

死ぬほど面倒くさいそれらをなんとか身に着けてここまで来た。

「はぁ……はやく用意しないと」

呟くと同時に手を振って風を巻き起こし、その風で髪を撫でつける。

ついでに、適当にブラを風で手繰り寄せる。

今日のは……買った覚えのない紫色のブラ。

そのカップ部分は縦に裂けていて、胸の先が隠れないようになってる。

「……………」

ね、寝不足かなあ……？



目を擦り、手の中にある危険物をよく見る。

前から見てもエロ下着。裏返して後ろから見てもオープンブラ。

何度見ても変わらない手の中にあるセクシーランジェリーに、ようやく状況が飲み込めたボクは、大きく息を吸って。

このブツを人の部屋に忍ばせた犯人の名を叫ぶ。

「文書あああつあの、大バカっ!!!」

でんぶんふみか  
伝聞文書。

ボクの友人で、長い艶やかな黒髪と感情豊かな表情が魅力の少女だ。

一家揃って美形かつ超優秀で、父親と文書以外は例外なく医師免許を持っているという規格外の家柄。

その中でもあらゆる意味で抜きんでている文書だが、血筋の悪い部分すらも抜きんでているのだ。

伝聞家一族は全員性癖を拗らせている。

その中でも文書は唯一の同性愛者で。

かつ、ボクを狙っているっぼいのだ。

「おはようございます、初来」

「おはよう、文書」

朝の通学路、学生の騒めきの中。

文書と朝の挨拶を交わしたボクは、返す刀で文書の頭を鷲掴みにする。

突然のボクの行動と襲い来る痛みを目を白黒させている文書に、ボクは優しい口調を意識しながら問いかける。

「あの、大事なところを隠せてないエロ下着はなんのつもりかなあ？」

「……ど、どうですか？ 初来に似合うと思って買ったんですが！」

「似合う似合わない以前に友人にエロ下着送らないで欲しいんだけど!!」

頬を染めながら、期待に目を輝かせてセクハラしてくる文書の頭を揺さぶりながら怒鳴りつける。

まずボクに似合うかどうか考えながらエロ下着を物色してる時点でダメ過ぎる。

それを実際に買ってボクにプレゼントしたってのが、もうね。

伝聞家の血が濃すぎる。

信じられるか？ この子ついこの間まで小学生だったんだぜ……？

無理だろうと諦めつつ、少しでもまともな元小学生にする為に文書の頭を掴む手に力を込めながら諭す。

「例え同性でも、友人にセクハラしちやダメなんだよ?」  
「嫌です」

笑顔で言い切られた。これももう矯正無理ですな……。

諦めて手を離すと、すぐさまその腕を文書に抱えられた。

まだ少し寒さの残る陽光がたなびく黒髪に触れては散る。

肩に乗せられた文書の頭を視界の端に映しながら、ボク達は今日から通うことになる錦百合中学へ歩みを進めるのだった。

……今のやり取りを同じ制服の子達に見られていたから、きつと噂になるんだろうなあ。

始業式が終わり、部活動見学に向かう生徒たちを横目に、ボクと文書は帰路につく。

正確に言えば、向かう先は文書の家なので帰路についているのは文書だけだ。

ふと、前々から思っていたことを口にする。

「生まれてからずっとカウンセリング受けてるけど、これももう実質遊びに行く口実だよね」

「今更ですね。でもお母さんも初来と会った後はつやつやしてるので、これからも来てくださいね」

「ボクから何か吸収してるのかな?」

ボクは、生まれつき身体が弱かった。

ボクが前世の記憶を取り戻すまでは高熱で寝込むなんてざらで、酷い時には意識を失って入院、なんてこともあった位だ。

だからこそ、安定した後も定期的に（現在は個性学者だけど）医者撮香先生に診て貰っているのだ。

とはいえ、4歳の時に前世の記憶を取り戻して以降は風邪を引いたことがないので、実際はもう診察する必要はなかったりする。

つまりカウンセリングはただのお茶会で、もっと言えば大人のお医者さんごっこをしようとする先生に鉄拳制裁するだけの会だ。

伝聞家の闇は深い。

ボクがこの後のカウンセリングに憂鬱になっていると、文書が意味深な笑みを浮かべ

てこちらを見上げてきた。

「なんなら、文書の家に住みますか？ 毎回カウンセリングに来るのも不便じゃないですか」

文書の冗談に思わず笑う。

「残念ながら妹がいるからね。まだ目が離せないんだよ。それに洋館は、住居としては肌に合わない感じかなあ」

「奇遇ですね、文書も洋館より和風の家の方が好きなんですよ。……初来の家とか、凄くいいですよね」

「へえ……いやでも、同じ敷地に洋館と日本家屋が並んでるのって違和感あるからやめといったほうがいいよ？」

見慣れた豪邸が近づいてきているのを見ながらそう言うと、文書は何故か唾然とした表情でこちらを見つめてきた。

しばらくボクを見つめていた文書は、ため息を一つ零してから自分の家に視線を向けた。

「……そういえば、ですけど。今日のお母さんはちよつと変だったので、気を付けた方がいいですよ」

「……今日の撮香先生『は』？」

ボクの問いかけに、ゆっくりと視線を彷徨わせる文書。

「……今日のお母さんも、かなり変でした」

「その変な人とボクはお話するんだけど？」

「はい」

「はいじゃないが」

一通り茶番を終えてから、目の前に迫った鉄柵門に手を伸ばし、押し開く。

「……？」

……今日の先生、本当に変っぽいな。

伝聞家の敷地に入ると、まず正面に大きな西洋風の本館が小さく見える。

敷き詰められた芝生の向こう側に建つその館に、初めて見た時は衝撃を受けたものだ。

今では移動距離の長さに辟易するしかないが。

遠くに見える館の向こうに、ちよこんと頭を出している山がある。

その山の麓の部分に建てられた別館が、文書達が生活している場所だ。

もつと言え、その他にまた新しく建てられた研究棟（文書所有）があるけれども、そ

れは今は置いておこう。

撮香先生は医者でありながら個性研究者としても働いていて、本館は研究所として研究員が働いている。

そして今日は平日なので、当然撮香先生は本館で働いている。

形骸化しているとはいえ、一応ボクが撮香先生の許を訪れるのは経過観察の為だ。

なので、いくら身内といえど文書についてきとは言えないのだ。

「それじゃあ、文書は先に着替えて待つてますね」

つまり、ボクは一人で変態と密室に籠らなければいけないのだ。

……こんな言い方をしているけれども、撮香先生は普通に好きだよ？

命の恩人？ だし。

「襲われたら助けに来てね」

「……」

「悩むな、即答して！ 本当に助けに来てよ?!」

そんなこんなで文書と別れたボクは本館に入り、先生の仕事部屋の前までたどり着いた。

……本当ならこのタイミングで、いつも『観て』いる撮香先生から声が掛けられるんだけども。

不気味なまでに沈黙を保つ目の前の扉に、ボクは痺れを切らしてノックする。

「先生、初来です。……入りますよ?」

受付で撮香先生がここにいることは確認しているので、ゆつくりと扉を押し開けて一歩踏み出す。

部屋に入ってまず初めに目についたのが、全裸で股間の部分だけタオルが掛けられている状態の種馬しゅまさんだ。

文書のお父さんと、伝聞家の中では一般(的な変)人だ。

その身体は、アニメ的表現をするなら枯れ木と見紛うかのようにぼろっぼろで、どれだけ激しい情事を繰り広げたのかと考えると頭痛が痛くなってくる。

その安らかな寝顔に辟易しながら視線を移すと、こちらに背を向けターンチェアに座っている撮香先生がいた。

「撮香先生……?」

「よく来たわね、初来ちゃん」

ボクの呼びかけにようやく撮香先生は言葉を発した。

まるで鈴の音のように、身体に沁みるような涼やかな声と共に、椅子が回転して撮香先生がこちらを向いた。

文書によく似た、優しい目元。ふわりと舞う長い艶やかな黒髪に、10代でも通用



しそうなきめ細かな肌。

文書と姉妹だと言われたら信じてしまいそうな容姿でありながら、全てを受け入れてくれると錯覚しそうなほどの包容力を持つ慈愛の笑み。

文書が年齢を重ねればこうなるのだろうと思える、まさに完成された美しさを撮香先生は持っていた――

「……………」

――の！ 筈でしたがア！

振り返った撮香先生は何故か鼻血を垂れ流しにしている、白衣の前部分が真っ赤に染まっていた。

余りにも強烈なグロ映像に、ボクは思わず思考停止してしまう。

「せんせい……………」

自分の声が震えているのを自覚する。

初めて味わう殺人事件の第一発見者の心情を無理矢理押さえつけて、ニコニコと笑っている撮香先生に問い掛ける。

「頭大丈夫ですか？」

「鼻血の心配はしてくれないのかしら……………」

どちらかというと頭の方が心配です、という言葉を飲み込んで手早く撮香先生の鼻に

ティッシュをねじ込む。

そのままの勢いで白衣を剥ぎ取り、アンダーシャツにまで血が染みているのを見て驚愕しながら、それも脱がせる。

「ああくん」

「はっ倒しますよっ..」

仕方がないので替えの白衣をロッカーから取ってきて着せる。

文書と違って女性らしい丸みを帯びた肢体が目映る。が、先ほどの弩級のインパクトのせいで心が麻痺していて何も感じなかった。

もうそろそろ面倒くさくなってきたボクは先生をソファアに投げつけ、さささつとお茶を用意する。

「雑に扱われるのもしゆき」

「お母さんに言いつけます」

「ごめんなさい」

そんなやり取りをしたことでようやく茶番は終わり、いつも通りの問診が始まる。

と言っても、聞かれることと言えば基本的に個性を使った時の感覚の違い程度。自覚のある範囲での話しかしない以上、この時間は主治医としての体裁を整える為のものではないのだろう。

さんざん繰り返したやり取りを終えて、お茶を飲んで一息つく。すると、唇を指でなぞっていた撮香先生がこちらに視線を向けて微笑んだ。

「初来ちゃんも、大きくなつたわね」

「そうですね、もうすぐ霧裂姉きりやせさんに追い付きます」

「身長の話じゃなくて」

苦笑すると、撮香先生はティーカップに口をつける。

「本当に、大変だったのよ？」 形成ちゃんかたなしも風見さんかぜみも、ずっと初来ちゃんの心配をしてたわ」

そう、らしい。

薄っすらとだが、両親と共に病院に通った記憶も確かにある。

記憶の中のボクは病院に行くのは嫌だと泣いているか、泣く気力すらもないまま緊急搬送されるかのどちらかだった。

（転生の弊害かな……？）

文書に貸してもらったラノベ知識ではあるが、魂が身体に馴染んでないのかなんとか。

まあ実際のところがどうなのかは知りようがないんだけど。

「そんな初来ちゃんが、もう中学生になったなんて……私も、歳を取る筈だわ」

「取ってないです。少なくとも見た目は」

見た目が背伸びびした高校生か大学生辺りで止まってる人が言う違和感が凄い。

頬を押さえてて微笑んでるその姿に、他人の精気でも吸ってるんじゃないかと思ってしまう。

(……まさかね)

視線が自然と種馬さんのもとへ向いてしまう。

搾り取られて枯れたその姿を見てから視線を撮香先生へと戻す。

「……どうかしたの？」

「……まさかね」

先生の『個性』は情報系なので、今浮かんだ撮香先生サキユバス説はありえない。

その筈だ。

そんな風に思索していると、少しだけ恥ずかしそうに頬を赤らめながら、撮香先生は口を開いた。

「……ねえ、初来ちゃん。もう文書ちゃんとはヤツちやったの？」

「なんて事聞いてくるんですか?!」

その、握りこぶしで人差し指と中指の間から親指を出す卑猥なジェスチャーをやめるお!

ボクにも文書にも、親指に該当するモノはついてません！

ボクの表情を見て現状を悟ったらしく、先生はやれやれと言わんばかりに首を振った。

「その様子だとまだみたいね」

「まだもなにも……文書にそういった感情は持つてませんよ」

本人には言っていないけれどね。

「なら、男の子が いい の？」

その質問も変なんだけどね。

今まで先生とそういった話をしてこなかったので少し新鮮な気持ちになったボクは、少しだけ姿勢を正して答える。

「男も女も関係ないです、ボクは恋愛に興味がないので」

というか、まだ中学生になったばかりだ。

そういつたアレコレがまだなくても不思議でもなんでもないだろう。

そんな考えで自分を納得させていると、急に先生はやらしい笑みを浮かべた。

「でも、エッチな事には興味があるんでしょう？」

その言葉に思考が止まる。

意味が分からず硬直するボクの傍に忍び寄ってきた先生は、そつと耳元に口を寄せた。

ボクと先生の身長は同じなので、顔を寄せられた時自然と先生がボクに身体を預ける形になる。

その女性らしい柔らかさに意識を奪われた瞬間、先生の零した言葉が耳を撥る。

「エッチな下着をつけて鏡の前で顔を真っ赤にするんだから、私も凄く興奮しちゃった」

「ーはっ?!」

耳に届いた言葉に、声を裏返らせて聞き返す。

まさか、ちよつとまでまさか、今朝の、見られてー

「最後までではしなかったみたいだけど……手伝ってあげましょうか？」

「つつつぴやあああああああああつ！」

「みっー」

今まで出したこともないような超高周波の悲鳴をまき散らしてソファアールから転げ落ちたボクは、耳を押さえて「耳があーっ！」と叫んでいる先生を指さす。

「ふっ、文書に言いつけてやるからつつっ！」

「ま、待って初来ちゃん、本当に今耳が聞こえないー」

先生の言い訳も聞かずに部屋を飛び出すと、ボクは一目散に文書の部屋へと逃げ出すのだった。

「今日は早かったですね……なんでそんなに息が乱れてるんですか？」

「べ、別になにもなかったよ……？」

「？」

文書に告げ口すると自動的にセクハラの内容も語らなくてはいけないという、至極当然のことに気付いたボクは文書の問いかけに曖昧に答えた。

白い漆喰の壁に最低限しかない木色の家具、柔らかな感触を足裏に返す赤茶色の単色絨毯。天井から吊るされたシャンデリアが色数の少ないシンプルな部屋で異彩を放っていた。

そんな部屋の奥、キングサイズのベッドに腰掛けてポテチをつまむ文書に近づく。

「いただきっ」

ポテチを一枚さつと抜き取り食べる。

噛むと同時に口の中に広がる塩味。指についた塩を舐め取りながら文書の横に腰掛けると、こちらを見ていた文書と目が合った。

「閃いた」

「通報した」

「逃走した」

「射殺した」



「警告なしに?!」

そんな掛け合いが終わると同時に、文書はポテチを一枚つまみ、ボクの口元へと持ってきた。

「……あむ」

遠慮なしに食べると、偶然……おそらく偶然、文書の指にボクの唇が触れた。

ボくに餌をやり終えた文書は、ボクの唇に触れた指をじっと見つめて動かなくなつた。

……おい。

「……文書さん?」

「……なんですか」

こつち見ろし。

静止画像と化した文書はしばらくそのままだったが、どうにか理性が勝つたらしくハシカチで手を拭つてからこちらを見た。

「さて……今日はいつもみたいに適当に遊ぶ為に呼んだ訳ではないんです」

「その割には無駄な時間を過ごしたんだけど」

「初来と過ごした時間に無駄なんてありませんよ」

はあ。

曖昧に頷いて、続きを待つ。

少しだけ残念そうな顔をした文書は、咳払いを一つ。

真面目な表情になるのを見てボクも姿勢を正す。

「今日初来に来てもらったのは他でもない……初来の『個性』について、しっかりと話し合わないといけないと思ったからですよ」

その言葉に、ボクは思わず渋面になる。

その反応をする事は予想していたのか、文書は少しだけ身を乗り出してきた。

「初来が嫌がるのはわかってましたよ……それでも、これはきちんとしておかないといけないのです」

「ボクの『個性』はこれだよ」

さっと手を振り、空気の流れを創り出して操る。

部屋の中を巡る風が文書の髪を揺らしても、文書は静かに首を振るだけだった。

「役所に提出した『個性』という意味では正しいですが、私が言いたい事は違うってきちんとわかっていますよね？」

「うぐう……」

文書の言葉にうめき声をあげ、ボクは顔を背ける。

「『個性』は……特に私や初来の持つ『個性』は人の身に余る力なんです。それは私が誰よりもわかっています。だからこそ、今だけでも向き合わないといけないんです」

言いたい事はわかっている。それでもボクは文書の方を見ることができなくて。

そして、ボクの隣に腰掛けていた文書が立ち上がり。

ボクの前に跪いて、その両手でボクの頬を包んだ。

「私が傍にいます。だから一緒に向き合いましょう。初来の本当の個性

————『個性創造』と」

## 個性『個性創造』(改稿済み)

百年以上前、中国で突如異能の力を持った人間が生まれた。

以降、次々と異能を持って生まれる人間が増えてゆき、現在はなんと世界総人口の8割の人間が異能の力を持つようになった。

異能の力は人間が持つ当たり前の力になり、やがて『個性』と呼ばれるようになる。

その在り方は千差万別で、全く同じ個性を持つ人間はいないとも言われている。

ボクの持つ個性は『個性創造』、個性を創る『個性』だ。

字面を見るとまさに最強の『個性』。

強すぎて漫画などではまず主人公に採用されないような力。

漫画やラノベの二次創作の主人公ならワンチャンありえるが、強過ぎて展開が単調になる程の力。

まあ、当然他の『個性』と同じくデメリットがあるんですけどね。しかも強烈なのが。

最初の頃はボクも思い違いしていたのだけれど、『個性』というのは超常の力ではなくれつきとした人間の機能の一部。身体能力の一部なのだ。

だからこそ腕を動かし続ければ疲れるように、『個性』を使用し続ければ何かしらの不

具合が身体に現れる。

例えば猛烈に鼻がむずがゆくなるデメリットだったり、無性にお腹が減るデメリットだったり。

デメリットとはイコール『個性』行使の代償なので、基本的に『個性』行使によって失った、または蓄積したものがそれに当たる。

そして、ボクの『個性創造』のデメリットとは――

「初来、このまま現実逃避し続けるのならキスしますよ？」

耳に届いた文書の声に、ボクは素早く現実回帰して迫りくる文書の顔を驚掴みにする。

「警告からの実行が早すぎやしないかなあ?!」

「んむむむむむむむっ!」

「こら、馬鹿やめなさい……っ!」

顔を驚掴みにされてなおこちらに迫りくる文書に、ボクはたまたまらずベッドの中央に後

退する。

細い小さい身体のどこに秘められているのか、文書は超が付くほどの馬鹿力だ。

ボクも割と力が強い方ではあるが、それでも手加減している(であろう)文書を両手で押しのける事ができない。

(くっ、仕方ない……『身体強化』っ！)

全身に巡らされた個性因子によって、筋力を引き上げる。

そうすることでようやく、文書を片手で押しのけられるようになった。

「ぐっ……初来、身体強化を使いましたね……っ」

「こんな事で隠している方を使わせないで欲しいんだけどねっ！」

言いながら、文書の身体をいなして横に転がす。

ようやく諦めてくれたのか、文書はジト目になりながら起き上がりベッドの上に広がった自身の髪を纏める。

「ともかく……文書たちは中学生になりました。これから身体ももつと成長していつて、『個性』の規模も否応なしに大きくなってしまいます」

「だから今のうちに、っていうのはわかっているんだけど」

ボクの個性の反動は、吐き気と頭痛だ。

風を操ったり身体能力を強化するだけなら頭痛で済むのだけど、『個性』を創ると途端

に吐き気が襲ってくるのだ。

ある程度までなら吐き気も耐えられなくはないのだけれども……

「大丈夫です、先っぽだけですから」

「大丈夫じゃないよね、それは」

文書の軽口にツッコミながら、先ほどの文書の姿を思い返す。

真っ直ぐにこちらを見つめる姿は、あの時の文書からは想像もできないもので。

自分の弱さを乗り越えた彼女が、ボクの事を信頼しきった眼差しを向けているのだ。

(その眼は、反則だよ)

文書の強さに惹かれているからこそ、文書の期待を裏切りたくないと思ってしまう。

ボクは真っ直ぐに文書を見つめ返す。

互いの視線が交わる。

「わかったよ……うん、やるよ」

「そうですか」

ボクの言葉を聞いた文書の目が、細められる。

眩しい物を見るように微笑む文書のチョロ口さに、期待に応えられた嬉しさと何故かはわからないが胸の痛みを感じつつ、ボクはやれやれと首を振る。

「吐くだらうから、エチケツト袋だけは用意しておいてよ？」

「大丈夫です、手で受け止めますので」

「大丈夫じゃないよね、それも」

そんな軽口を叩きながら、ボクは最初から気になっていたことを口にする。

「それで、具体的に何をするつもりなの？」

自慢ではないけれど、ボクの『個性創造』は強度はともかくとして、出来る事の範囲は人類史の中で間違ひなくトップだ。

範囲を決めて『個性』を調べるのであればその範囲内の事しかわからず、全てを調べるなら十年単位で研究所に籠らなければいけないだろう。

そんなものをどう調べるのかと、文書に尋ねる。

「心配無用なのですよ、当然方法は考えてあります」

自慢気にその長い髪を揺らして文書は笑うと、おもむろに身体の前で掌を広げる。

「【アポート】」

言葉が世界を変える。

口から言霊が零れた瞬間に文書の指先が一瞬だけ淡く青く光る。

そして次の瞬間には、文書の手に一冊の本が握られていた。

口にした言葉が現実になる『個性』

それが、文書の持つ『個性』。



口にした言葉の数だけ指先に光が灯り、大体文書の半径10メートル以内で現実が改変される。

発動範囲が少し狭いが、その範囲内ならば文書は言葉だけで世界を操る事が出来るのだ。

「先人の知恵を、借りるのですよ」

そう言って不敵に笑う文書の手握られている本のタイトルは

――NARUTO、だった。

……どうやら、今日は忍者ごっこをして遊ぶようだ。

何故か用意されているボク用の運動着（サイズぴつたり）を着て、研究棟に移動する。

正面から見た研究棟は普通の体育館のような外装で、大きさも大体同じだ。

地上部分は二階までであり、一階に主な測定機材がある。

二階は中央の大部分が吹き抜けになっていて、壁沿いにある機械制御室の横には昇降機が設置されている。

正直これは無駄設計だろう、ロマンはわかるけれども。

対して地下は少し深い場所に一階だけあり、そこでは威力測定用機材が置かれている。

衝撃に対して同じ威力の衝撃を返すモノリスとかいう謎技術を初めて見た時は、思わず「こういう世界観だったっけ……？」と呟いてしまった。

この研究棟は完全に文書の物で、当初は文書の『個性』でできる事を調べるために建てられたのだ。

……まあ、これだけ大掛かりな建物を文書の為に建てたというのはちよつとヤベーな  
と思わなくもないけれども……まあ、事情が事情か。

「さて、それでは始めましょうか」

測定機材の起動を終えて帰ってきた文書の言葉にうなづく。

事前の説明によると、今回調べるのはボクの『個性創造』がどの範囲まで『個性』を作れるのかという点について。

要するに『個性』でできることの幅をとりあえず把握したいというのが今回の趣旨だ。

「それじゃあ行くよ……『個性創造』、『火遁豪火球』っ！」

別に言葉に出す必要はないが、気合を入れるために『個性』名を叫ぶ。

皆さんご存じの、NARUTOの火遁豪火球の術を『個性』として創り出す。

全身の個性因子が起動し、身体がイメージに沿うように創り変えられる。

自身の変容を拒むかのようにこみ上げる吐き気を抑えて、息を吹いて火球を吐き出す！

出ない！

「まあ、そうなるとは思っていました」

近づいてきた文書は、そんな事を言いながらポケットから取り出した機械をボクに見せてくる。

そこにはボクの姿を映したサーモグラフィがあった。

「さっきのを再生しますね」

そう言うなり再生ボタンを押す文書。

映像の中のボクは『個性創造』を発動させてから、息を吹く動作をする。

直後にボクの口元の色が一気に明るくなる。

「炎になるまでの熱量がなかっただけで、個性はしっかりと創られていますね」

口元の温度は大体50度前後。世界一暑い場所であるルート砂漠の夏場の平均気温並みだ。

ボクの『個性創造』の一番の問題点は、創った『個性』の強度が低すぎる事だ。

せつかく吐き気を抑えて創り出したのに、殆どの『個性』が役に立つほどの力を発揮してくれないのだ。

ダメ押しで、創った『個性』は基本的に1分と持たずに消えてしまう。

創った『個性』は弱く、鍛えようにもすぐ消える。

いくらなんでも、これで『個性創造』に期待しろという方が無理があるだろう。

そんな事を考えている間に身体が元に戻るのを感じる。

同時に吐き気も幾分か収まってきた。

「そうですね、個性『気炎』と言ったところでしょいか」

「たった今消えたけどね……次は何を創るの？」

「次はですね……初来にはチャクラを創って貰いましょうか」

肩に掛かった長い髪を指で流しながら話す文書。ちよつとぐつと来てしまったのを

誤魔化すようにボクは口を開く。

「ちよつと待つてよ、『個性創造』は無い物は創れないよ」

「ん……初来、チャクラはありますか？」

「えっ……？」

左手に持ったスマホに視線を落としたまま答えた文書。その言葉に思わず思考が止まってしまう。

そんなボクに、文書は手に持ったスマホを差し出してきた。

その画面には某インターネット百科事典の1ページが映されている。

チャクラという項目で、内容にぎつと目を通すとチャクラが実際に存在するといった事が書かれていた。

そして驚くべきことに、なんとチャクラは『個性』の根幹であるらしいのだ。

じゃあ創れるわ。『個性』由来のものであるなら、イメージできない物を除いてボクに創れない『個性』は無い。

文書に目線で合図を送り、『個性創造』を発動させる。

「『個性創造』、『チャクラ』！」

身体の奥から、微かにだが何かが湧き上がるような感覚。

ともすれば吐き気に意識が向きそうになるのを抑えて、息を大きく吸う。

（『火遁豪火球』！）

チャクラを口元に集め、発火させるイメージを脳内に描いてから、息を吐き出す！

出ない！

「……さつきと同じように、初来の口元の温度は上がっていますね」

無情に響く文書の言葉。それでもボクは先ほどのように気を落としてはいなかった。チャクラが『個性』の根幹であるなら、チャクラを操る感覚を覚える事が出来たならば、『個性創造』を自在に扱えるようになるかもしれない。

きちんとした強度を持った『個性』を自在に操る未来のボクに思いを馳せていると、文書に服を引っ張られた。

「何？」

「すみません初来、嘘をつきました。チャクラは実在しないんですよ」

申し訳なさそうな文書の表情に思考が止まる。

ついでに創造したチャクラの『個性』が消えた。

え、マジでどういう事……？

そんなボクの内心を察したのか、文書はそつと右手を差し出した。その指先には4つの光が灯さされていて。

「げんわく」ですよ、初来」

そんな言葉と同時に指先の光が消えた、文書が『個性』を解除した証拠だ。

ふと、反対の手で差し出された文書のスマホに目をやると、そこに書かれていたチャクラの項目が先ほどから変化していた。

チャクラが『個性』の根幹である等の記述は無くなっていて、ざっくりと言うとまだ

生理学が発達していない時代の身体観だと書かれていた。

「え……………」

「初来が前から言っていた、『個性創造』は存在しないものは創造できない、というルールが本当か確かめたかったんですよ」

……………ああ、なるほど。

『個性』というのは人が生まれる度に種類が増えていくのだから、存在するかしないかという縛りが本当にあるのか、って話か。

「文書はいつの間に『個性』を……………」

「初来が体操着に着替えている間にですよ」

そんな前からか。

確かに、事前に行えることが決まっているのなら仕込みはできるよね。

そこまで理解して、ボクは思わずしゃがみ込む。

「マジかあ……………」

「嘘をつけてごめんなさい、初来」

「いや、それはいいんだけど…………『個性創造』を使わずに『個性創造』を鍛えられるかと期待したのになあ」

ボクの言葉に、文書は不思議そうに首を傾げた。

「別に、一度創造した『個性』は二度と創造できないなんて事はなかったと思うのですが……?」

「いやー、感覚的にわかるんだけど、チャクラはもう創造できないよ」

念のために、『個性創造』を発動させてみる。

胃がひっくり返るような吐き気と共に先ほどの感覚が全身を覆うけれども。

「今チャクラを創ったんだけど……これは、さっき創ったのとは別物だね」

例えるのなら、外側しかないパソコンがわかりやすいかな？

見た目はパソコンでも中身がなければそれはただの箱だ。

今ボクが創ったチャクラだって、感覚的には先ほど創ったチャクラと変わりが無いけれども、チャクラとしての機能が備わっていないから、ただ身体を覆うだけのナニカになっってしまった。

という事を文書に伝えたら、一瞬だけ考えこんだ後にわかりやすく顔を引き攣らせた。

「……初来の創造は初来のイメージを核に『個性』を創っているから、その核となるイメージの根拠を失ったら」

『個性』として不完全になる、ってことだね」

まあ、簡単に言ううと。



嘘と知らずにチャクラを創っていた時はその嘘のイメージを核にした『個性』としてチャクラが存在できていたけれども、一旦それを嘘だと認識してしまえば『個性』の核にはならなくなってしまうという訳だ。

そして更に悪いことに、今の検証結果からボクは「自分の認識を騙せばどんな『個性』でも創れてしまう」と認識してしまった。

そう認識してしまったことで、逆に『個性』を創るときのイメージに疑いを持つようになってしまった。

はつきり言おうか。

この数分で『個性創造』は恐ろしい弱体化を遂げてしまったのだ。

……流石にこれは、文書に伝える訳にはいかない。

気付くかもしれないけれども、言わなければ確証は持てない筈だ。

「まあ別にチャクラなんてなくても大丈夫だよ、なんなら『個性創造』もなくて大丈夫なくらいだし」

「いえ、流石にそれはどうかと思いますが……とりあえず、次の検証に移りますか？」

小首を傾げこちらを見る文書に、少しだけ待ったをかける。

「ねえ文書、あと何回創造するかだけでも教えといってくれない？　ちよつとやばいかも」

正直なところ、今の2回の創造で結構きつい。

胃がせり上がってきて、気を抜くと吐いてしまいそうだ。

「……そんなに、反動がきついんですか？」

近寄ってきた文書の手が、ボクの頬に触れる。

頬に感じるボクより高い体温に、少しだけ吐き気が収まる。

「多分あと1回……吐くの覚悟であと2回だと思う」

「そうですか……」

「……もう、大丈夫。次は何を創ればいいの？」

文書の手温かさに少しだけ氣力が回復したボクは、文書に次に創造する『個性』を尋ねる。

少しだけボクを氣遣う様子を見せる文書だったけれど、基本的に自他に厳しい文書は『個性』の実験の続行を決めたのか、一つ頷く。

「次は螺旋丸ですね」

「螺旋丸……？」

思いもしなかったチョイスに首を傾げてしまう。

そのリアクションを想像していたのか、文書は薄く笑ってから口を開いた。

「あとで説明しますので、とにかく創造してみてください。……あ、ちなみに『個性』の内容は考えないようにしてくださいね。」

どゆこと？

ボクが口を開くより早く、文書が続きを口にする。

「今までは創造する時に具体的にイメージをしていましたよね、それをしないで『個性創造』して欲しいんです」

「まあ、わかったよ」

釈然としないまま、とりあえず言われた通りに『個性創造』を発動させる。

開いた手のひらに螺旋が描かれて……あ。

「これ失敗だ。ボク今、風を操ってる」

手を振って風を散らしながらそう伝える。

今の螺旋丸は『個性創造』の際の気分の悪さがなく、完全にいつもの風を操るときの感覚だった。

「これは予想通りですね」

「そうなの？」

予想が当たって少し嬉しそうな様子の文書に少し首を傾げつつ聞き返す。

イメージを極力せずに、ということだったので、ボクの予想ではチャクラもどきを創って回転させると予想していたのだけれど。

「螺旋丸と似たような現象を起こさせる『個性』を既に持っているのに、わざわざ新しく『個

性』を作る必要はないと本能で理解しているのですよ」

分かるような分からないような説明に疑問を覚えなくもないが、自信満々な文書の表情を見ているとそんな事はどうでもよくなった。

「次は何を創ればいい?」

先を促すと、文書は顎に手を当てて思案した。

「そうですね……『個性』の反動もありますし、次で最後にしましょうか」

そう呟き、文書はおもむろに手をこちらに伸ばしてきた。

小さく呟かれた風という言葉と指先に灯る光を認識した直後に、文書からボクへとそよ風が流れてきた。

これは別に文書の吐き出した息ではなく、文書の『個性』による現象だ。

「次に創るのは、文書の『個性』か……」

「『ハロー・ワールド』ですよ」

正直、文書にネーミングセンスはないと思っている。

ドヤ顔の文書にツツコミを入れることができなまま、ボクは改めて文書の『個性』の詳細を脳内で整理する。

一つ目。言葉を口にすると、言葉の文字数だけ指先に光が灯る。

二つ目。指先に光が灯ってから現実変化が始まる。

三つ目。口にした言葉から外れた改変は行われぬ。風が吹いても桶屋は儲からぬのだ。

四つ目。範囲は半径10メートル程度と控え目。

五つ目。改変された事象は、物質的であつても文書が『個性』を解除するか10分くらい経過すると消える。

六つ目。改変された事象による影響は消えずに残る。『ハロー・ワールド』で創り出したナイフでつけられた傷は消えたりしないのだ。

以上が文書の『個性』の詳細だ。

正直な話、発動プロセスが意味不明なので創れるなんて欠片も思っていない。

それでも、創れないという結果を出すことが大事なのだと理解しているので、呼吸を整える。

何故か、今までになく緊張した様子の文書が気に掛かった。

「……『個性創造』」

言葉と共に体中の個性因子を活性化させるが、まるでトラックを持ち上げようとした時のようにピクリとも反応しやしない。

試しにそのまま「重力」と呟いてみたが、当たり前のように不発だった。

「やっぱり、文書の『個性』は創れないですか……」

ほっとしたような表情でそう呟いた文書は、ボクの視線に気付いて慌てて詰め寄ってきた。

「ま、待つてください初来。今のは別にマウントを取ろうとしたとかそういう訳じゃ

「いやー、まさか文書にマウント取られるとは思ってなかったなあ……」

そう呟いてから、ボクは揉み手でペコペコ頭を下げながら卑屈に笑う。

「流石強個性の文書さん、『個性』を創るしか能がないのにそれすら満足に出来なかったボクとは大違いー」

「初来い！」

「ーだあ?!」

言い切るより早く飛びついてきた文書を受け止める。

衝撃にふらつくボクに両手両足でしがみついた文書は、そつと耳元で囁いた。

「信じてくれるまで、初来の耳を舐り続けます」

「信じます、信じましたあ！」

ボクは文書を信じた。けれども文書はそんなボクを信じられなかったようだ。

顔を近づけてくる文書を必死に手で押しつけようとする。くっ、力が強い……っ！

「大丈夫ですよ、性感帯が一つ増えるだけです」

「大丈夫じゃないよぶっ飛ばすよ?!」

必死の抵抗を続けながら、ボクは安堵する。

どうやら文書はボクの『個性』が弱体化したことに気付いていないようだ。

さつきまでのボクだったなら、『個性』として在るのならコピーできるでしょ、みたいな理由で創ってしまえていただろう。

なんとか文書を振りほどき一息。

「でも、やっぱり悔しいなあ」

ボクはそんな言葉を口にした。

やっぱり『個性創造』なんて自称（名付けたのは文書だけど）しておいて『個性』が創れなかったというのは、思うところがなくもなかったりする。

「いえ、そもそも一人一つしかない『個性』をポコポコ創れる時点でおかしいんですよ」  
「まあ、そうなんだけどね？」

呆れたように言う文書に同意する。

けれど悔しいものは悔しいので。

ボクは何の気なしに口を開いた。

「文書みたいに言葉で世界は変えるなんて無理だよ

——言葉で人を動かすくらいならできるけど」

その言葉を口にした瞬間、身体が変容する。

自身の身体が変わる強烈な違和感と嫌悪感が脳を揺らし、湧き上がる猛烈な吐き気に崩れ落ちるようになしやがみ込む。

「は、初来?!」

「ふ、【袋】っ!」

「はいっ! 【ふくろ】! ——えっ?」

差し出されたビニール袋をひったくるようにして受け取り、吐瀉物をぶちまける。暫くして、吐き気が収まったのを見計らって文書が話しかけてきた。

「はい、これで口を濯いでください。……初来、何の『個性』を創ったんですか?」

「——ん。別に、創ろうとはしてないんだけどね……」

文書が差し出してくれた水で口を濯ぎ、そう答える。



今の『個性創造』は、自分の意思で発動させてない。

勝手に発動したせいとか、普段よりも強い『個性』の反動に耐える事すらできなかった。「か、勝手に？ 自分の意思で、『個性』を創った訳じゃないんですか……？」

文書も信じられないのだろう、動揺に瞳が揺れている。

一呼吸、二呼吸。

動揺を無理やり押さえつけた文書は、真剣な顔でボクを真つすぐに見つめる。

「……さつき、文書は初来の言葉に従って、何も考えずに『ハロー・ワールド』を発動させました」

文書の話によると、『ハロー・ワールド』は言葉とイメージの二つで世界を変える『個性』だそうだ。

それなのにイメージをすつ飛ばして言葉だけで発動したということは。

「初来の『個性』の影響でしょう。そして直前に初来が口にした言葉。言葉で人を動かすことはできる、でしたね」

そこまで言われたら、流石のボクでも察しがつく。

ボクの目を真つすぐに見つめ、文書は言った。

「自分のイメージを相手に伝え、相手を動かす。初来が創つたのは言葉の持つ力を……いいえ、言葉そのものを操る『個性』なんじゃないでしょうか」

『個性創造』の事が少しだけわかり、もつとわからなくなった。  
おまけにどう考えても危険な『個性』を得て、ボクはただ途方に暮れる事しかできな  
かった。

## 家族会議（改稿済み）

夕焼けに染まる水族館から、沢山の人たちが出てくる。

その流れに逆らうように、ボクは入り口を目指す。

時刻は既に5時過ぎ。お母さんと約束していた待ち合わせの時刻はとつくに過ぎている。

あの後、すっかり体調不良になったボクは文書の家で暫く休ませてもらっていたのだ。

（まだ中にいるのかな……？）

勿論遅れる事は伝えている。

遅くなってもいいと返事はきたが、やはり気が急いでしまう。

……見つけた。

見慣れた長い茶髪と小さな後ろ姿に、ボクは足を止める。

待ち合わせ場所ではお母さんが誰かと話し込んでいた。

相手は……水族館の館長さん、だと思う。

館長（仮）さんが何かをお母さんに手渡し、お母さんはそれを受け取って会釈した。

そこで話は終わったようで、ふと振り返ったお母さんと目があつた。

駆け寄り、館長（仮）さんに頭を下げる。

「ええつと、形成さんの娘さんですね。私はこの水族館の館長の海辺です」

「遠藤初来です」

（仮）が取れた館長さんに自己紹介を返し、失礼にならない程度に観察する。

柔和な笑みを浮かべ、丁寧な喋り方をする優しそうな人だ。

口に張り付いているレギュレーターさえなければもつと好印象ではあつたが。

自己紹介の時もシユコシユコーと鳴つてうるさかつたし。

「お疲れさまでした、また明日」

「お先に失礼します」

挨拶を終えて歩き出したお母さんの後を追いかける。

追い付くと、お母さんは思い出したようにこちらを振り返つた。

「体調が悪くなつたつて言つてたけど、大丈夫なの？」

その表情は真剣で、ボクは失敗したたと内心で呟く。

ボクは子供の頃病弱だった。だから他の人だったらなんでもないような風邪や体調

不良でもお母さんに心配を掛けてしまう。

だからこそ、体調不良を隠せなくなるまで『個性』の検証をやるべきではなかつた。

今後気を付けると心に刻んで、大丈夫だよと返した。

「ところでさ、さっきの館長さんと何話してたの？」

話題を変えるついでに、気になっていたことを聞く。

正直な話、ボクは館長さんにデートを申し込まれていたのではないかと思っている。

お母さんは美人だし、勝気な性格も刺さる人には刺さるだろう。

身長が150cmないのも……ロリコンには刺さるんだろうね。

今すぐ再婚っていうのではないだろうけれども、お母さんがそれを意識していてもおかしくはない。

だから、もしお母さんが望むのならその背中を押してあげるために、ボクはこの質問をしたのだ。

これでもし言い淀んだりしたら、お母さんは館長さんを意識している可能性がある。ボクはお母さんの顔を見た。

……あつ、どうやら違うみたいだ。

鋭くなった目つき、への字を描く口、中央に寄った眉。完全に機嫌が悪い時の顔だ。

「お、おかあさま？ あの人の事嫌いでしたか……う？」

「……違うわよ、これよこれ」

心底嫌そうな顔で鞆からチラシを取り出したお母さん。

それを受け取り。一目見ただけでボクは不機嫌な理由を察した。

チラシに描かれていたのは鯪シヤチヒーローのギャングオルカだ。

書かれている内容を見ると、どうやら水族館でショーをするらしい。

そして話の流れ的に、お母さんもそれに関わる感じか。

お母さんは水族館の職員で、『個性』を使った劇をやっている。

水で物を形作り操作する個性『青の人形劇』で、水族館の興行関連のチーフを任せられているのだ。

お母さんが操作している水の中を魚が泳いでいる光景は、まるで自分が竜宮城に来たかと錯覚させると評判も良く、それ目当てに地方から人が来るといふ話もよく聞く。

お母さんが作り出した水造空間をギャングオルカが泳ぎ回る。それは楽しそうだし、館長さんもそう考えたのだろう。

問題はお母さんのヒーロー嫌いだ。

いや、お父さんがヒーローだったからヒーローである人にまで嫌悪感を抱いているわけではないのだろうけれど、やっぱり関わりたくはないのだと思う。

こればかりは誰も口出しできないような話題ではないので、ボクは話題を逸らすべく周囲に目を向ける。

「……あつ」

ふとクレープ屋さんに目を向けたと同時にボクのお腹が鳴ってしまった。

お母さんは少しだけ笑って、背伸びしてボクの頭を撫でる。

下から覗き込んでくるお母さんの顔が気恥ずかしくて見れずに、ボクは顔を背けた。

「入学祝いで、今日の晩御飯は初来の好きなものにしてあげるわ」

「じゃあ豚の丸焼きで！」

「いいけど、全部食べ切りなさいよ？」

「シチューでお願いします」

そんな軽口を交わしながら、ボクらは家路につくのだった。

「ただいま……つと」

「おかえり！」

玄関に入った直後に背中に軽い衝撃が。

ボクの身体を抱きしめるように回された細い腕と、ふわりと宙を撫でる薄蒼の髪が視界の端に見えた。

「水騎（みずき）、いきなり抱き着いたら危ないでしょ」

「えへへ、ごめんなさい」

お母さんに怒られて笑っているのはボクの妹の水騎だ。

歳は三歳下で、引つ付きたがりなのでよくボクに抱き着いてくる。

ふと気になって上を見てみると、ちょうど玄関のドアの真上に水色のクラゲが浮いていた。

水騎の個性『母なる青』<sup>マザーブルー</sup>で生み出した水獣だ。多分だけど、クラゲに掴まってボクらが帰ってくるのを待ち構えていたのだろう。

その証拠に、リビングのほうからため息が聞こえてきた。

奥から姿を現したのは就職活動のスーツを着崩した、ボクの姉の霧裂姉さん。

普段は鋭い目つきも、度重なる社会の荒波に揉まれて気だるげな色を浮かべている。

「二人ともおかえり。水騎、気は済んだ？」

そのジト目で見られていることに気付いた水騎は口を尖らせる。

「むう、霧裂姉ちゃんノリ悪い」

「いいからさっさと来なさい」

腕を組み、目つきを更に鋭くした霧裂姉さんを見て、ようやく水騎はボクから離れた。

リビングへと向かう途中、霧裂姉さんにあっかんべーをしていった水騎に、ボクらは揃って苦笑するのだった。

軽く耳に掛かる茶髪を掻き上げ、ため息を吐いた後に気を取り直した様子で霧裂姉さ



んは口を開いた。

「改めて、2人ともおかえりなさい」

「ただいま」

夕食が終わり、それぞれが好きに過ごしている。

廊下からリビングを覗き込むと、ソファーに寝転がってテレビを見ている霧裂姉さんがいた。

（好機……！）

ボクは今日、新たに『個性』を創り出した。

言葉によって人を動かす、洗脳とも言える凶悪な『個性』。

文書の反応で粗方どういった『個性』なのか予想はつくのだが、やはり一度しつかり検証しておくべきだと思う。

そつと足音を忍ばせて、背後から姉さんに近づく。

今から行うのは『個性』の検証、つまりボクはやましい考えの下で『個性』を行使する訳ではないのだ。

姉さんの傍までたどり着いたボクは、ゆっくりと身体をソファーに寄せながら、新た

に得た『個性』を発動させる。

（『個性』『言霊』発動）

言霊。

言葉には現実を変える力があるという思想であり、だからこそ言葉を発する時は慎重になれという戒めでもある。

容易に他人を傷付けられる力だからこそ、使うのを躊躇えという思いからボクは新たに得た『個性』にそう名付けた。

何かに繋がった独特な感覚に『個性』の発動を確信したボクは、ゆつくりと口を開く。

「姉さん、ちよつとお願いがあるんだけど」

空気ではない何かを震わせるような感覚。

ボクの声に反応した霧裂姉さんは、ゆつくりと顔をこちらに向けた。

「……何よ」

滅茶苦茶嫌そうな顔してるう……。

口をへの字にした姉さんは、心なしかボクから遠ざかるように身動きした。

「ボク、急にプリンが食べたくなってきちゃった」

言っておくが、これは別に姉さんにたかろうとしている訳ではない。

姉さんはボクを甘やかしてくれないので、こういったお願いを聞いてくれたりはしな

い。

そんな姉さんを動かせるのなら、個性『言霊』の力は本物だということだ。  
もちろんきちんとお金は渡す。

さあ姉さん、急に妹の言うことを聞きたくなれっ！

【姉さん、ちょっと買ってきてよ】

「嫌よ、自分で買ってきなさい」

……あれっ?!

びつくりして硬直しているボクに興味を失った姉さんは、再びテレビの方へと視線を向けた。

「私は就活で疲れてるの」

「……本当に?」

念のために聞いてみるが、姉さんは振り返りすらしなかった。  
「本当よ。というか逆になんで行って貰えると思っただのよ……」

心底呆れたように、ため息と共にそう言われる始末。

これは……一体どういふことなのだろうか？

『個性』はしつかり発動していた。

言葉もしつかり届いていた。

なのに文書の時と違つて姉さんは言うことを聞いてくれない。

暫くの間途方に暮れていると、姉さんはもう一度だけため息を吐いた。

「明日、帰りに買つてきてあげるからそれで我慢なさい」

じゃあ自分で買つてくるよ……。

個性『言霊』がうまく作用しなかつた悔しさに齒噛みし、原因を考える。

『個性』に対する耐性は……姉さんは確かに我が強い人ではあるけれども、買つてきて欲しいというお願いに対して我を貫くのかという疑問はある。

『個性』の強度に関しては、文書に対してはしつかり作用していたので考えづらい。

訳がわからなくなったボクは、とりあえずソファアを乗り越えて姉さんに馬乗りになる。

「ーはっ?!」

驚き、目を見開いた姉さんと視線がぶつかる。



ボクの言葉に、水騎はパツと顔を輝かせた。

とてとてとこちらに駆け寄ってくる水騎、その頬が湯上りでほのかに赤くなっているのを見て取れたかわいい。

「じゃあ、俺もお菓子頼んでいい？」

「何食べたいの?! ボク買ってくるよ！」

急に妹にお菓子を買ってあげたくなつたボクは、すぐさまお小遣いの残額を頭に浮かべる。

……いける！

「いいの？ 俺、ポテチ欲しい！」

「わかった、全種類買ってくるね！」

すぐさま部屋に戻ってサイフを引っ掴み、ボクはコンビニへと駆けだした。

今日は水騎とポテパ（ポテチパーティー）だ、ヒヤッハー！

家を出るとき、凄く微妙な顔をした姉さんを見かけたけど、どうしたんだろうか。

その夜。

水騎とのポテパを終えたボクは、お母さんに呼ばれて席に着く。

対面に座っている姉さんが、ゆっくりと目を開いた。

「初来、あんた水騎に甘すぎよ」

「そうね、ちよつと目に余るわ」

姉さんの言葉にお母さんが同意する。

それは聞き捨てならないな……

「水騎を甘やかすのはボクのライフワークなんだから口出ししないで欲しいかな」

「そんなライフワークがあつてたまるか」

ため息と共にそう吐き出した姉さんは、ピツとボクを指さす。

「あんまり甘やかしすぎると水騎の性格が歪むわよ、それでもいいの?」

クール美人な姉さんに問い詰められて、唐突に以前やった裁判ゲームが脳裏に浮かんできたので、ボクは唐突に立ち上がり成歩堂龍一ばりの「異議あり!」を繰り返す。

「水騎はいい子なので性格が歪んだりしないことは明白です!」

「話にならないわね」

姉さんは基本ノリが悪いが、時々急にノリが良くなることがある。

今日はどうやら当たりのようで、急にノリがよくなった姉さんは、立ち上がって眼鏡を掛けていないのに眼鏡をクイツとした。

「被告の言っている事は根拠に掛けます」

「宇宙の真理を今更詳細に話すことに意味が見出せないだけです」

言い切り、見つめ合うこと数秒。

ボクらは同時にお母さんに顔を向ける。

「サイバンチョ、判決を！」

「……あんたら仲いいわね」

お母さんがノってくれなかったので、冷静になったボクらは席に着いた。

「で、もし本当に水騎が我儘を言うようになったらどうするのよ」

「程度にもよるけど怒るよ」

「姉さんの言葉にそう返す。」

ボクに対して我儘を言うのは大歓迎だけど、他人に我儘を言うのはダメだ。

それはきちんと水騎に伝えてる。

家族であるボクに我儘を言うのはいいけど、家族じゃない人たちに我儘を言っ  
てはいけないよ、ってね。

……というか、だ。そういう話ならボクも姉さんに物申したい。



「水騎を甘やかし過ぎとか言うけれど、姉さんは逆に水騎を甘やかさな過ぎるんだよ」別に厳しい訳ではないけれどもね。

ボクの言葉に姉さんは呆れたようにため息と共に「そこで自分を含めないのがあんたらしいけど」と零した。

「私だつて水騎は可愛いと思つてるわよ」

……水騎『は』？

引つかかったボクとは対照的に、姉さんは淀みなく話し続ける。

「でも、お母さんだつて結構甘いし、あんただつて隙あらば甘やかさそうとしてる状況で私まで加わつたら收拾がつかないでしょう」

「そうやってクールぶってるから未だに拙細さんと付き合えてないんでしょ」

おっと、どうやらクリティカルヒットしたようで、姉さんは頬を引き攣らせた。

そんな姉さんの顔を見てお母さんも頬を引き攣らせた。

「霧裂、あんた達まだ付き合つてなかったの……？　というか、大学4年生にもなつて処

女——」

「——おっ、大きなお世話よっ！」

顔を真っ赤にして叫ぶ姉さん。

キツとこちらを睨みつけてきたのであっかんべーを返してあげると、姉さんはピキつた。

「私より、その同性同士でくつつきそうなのをどうにかしたほうがいいんじゃないの?!」

ボクを指さしながら放った姉さんの言葉に、お母さんの顔がとんでもない速度でこちらを向いた。

おっと、この流れは不味いぞ？

ボクが一瞬怯んだ隙に、キレ散らかした姉さんは更に言葉を重ねる。

「あいつから聞いてるわよ。文書ちゃんに四六時中くつつかれてるんでしょ？」

「いや、確かに文書は距離感近いけど、それはー」

「クールぶってる私と違って？ 初来は甘やかすタイプだし？ 押し切られそうでお姉ちゃん心配だなー？」

人差し指を唇に当てながら、すつとぼけた顔でそう言う姉さん。

あかん、自分の放った言葉が全部自分に返ってきてる。

思わず姉さんを睨みつけると、姉さんはあつかんべーをしてきた。ボクはピキった。

「初来、説明しなさい」

「姉さんが勝手に言ってるだけだからー」

本気の顔で迫ってくる母さんを両手で抑えて無実を叫ぶ。

くつ、身長150センチないくせに結構力が強い……っ！

押し切られそうになるのを頑張って押し返すと、ひとまず諦めたのかお母さんは自分の席へと戻っていった。

悔しそうな目でボクを見て、ため息1つ。お母さんは念を押すように「本当に何もないのよね？」と問いかけてきた。

「霧裂の言う通り、あんた全体的に甘すぎるのよ。二重の意味で」

お母さんの言う二重の意味を考えると、姉さんが机に片肘をついて話しかけてきた。

「というか、あんた男子に告白されたりしないの？」

……一瞬だけ、言葉に詰まってしまふ。

告白されたことは、実はそこそこある。

勿論前世の性別を引きずっているボクが告白を受ける事はないのだけれども。

机を叩く音に意識を戻されると、お母さんがこちらを見ていた。

「吐け」

短いなながら、お母さんの感情が全て詰まった言葉である。

いつの間にか家族会議から恋バナ大会になったこの場で、ボクはどうしようかと悩んでいた。

いや、告白された人とかシチュエーションを話すこと自体に否やはないのだけれども。

正直、告白してきた人は殆ど皆ヒーローの話しかしてない。

どういった経緯で告白されたのかという話になると、やはりどうしてもヒーローに触れてしまう。

お母さんはヒーロー嫌いだから、ボクがまだヒーローが好きな事を知られるのは不味いのだ。

……仕方ない。

ボクは胸を張って、自信満々に告げる。

「隣の棗くんは告白されたよー」

隣の家の棗くん（6歳）は何度か面倒を見たことがあって、その時に「大きくなった

らお姉ちゃんと結婚する！」と言ってくれたのだ。

かわいいね。

ボクの自信満々な発言に、お母さんと姉さんは揃って顔を見合わせた。

「嘘ね」

その直後の言葉がこれだよ。

呆れたような二人の視線に言い返そうと口を開くが、それより先に姉さんの言葉が飛んできた。

「あんた、嘘とかつくときにわざとらしくなるから、それ直したほうがいいわよ」

おっと、マジか。

お母さんも頷いて同意している辺り、本当の話らしい。

言葉を失っていると、言い逃れは許さないと言わんばかりに2人が近寄ってきて、気付けばがっちりと肩を掴まれていた。

「本当の事を言いなさい」

「今吐けばさっきの発言は不問にしてあげるわ。……は、初体験済ませたりしてない

わよね？」

……結局、その後ボクは告白された人数を無理矢理言わされた。

告白してきたのは殆ど喋ったことない人ばかりだと（がんばって）嘘をつくど、姉

さんに「中身がこれだからね」と言われた。

ボクは、絶対いつか仕返ししてやろうと心に決めたのだった。

# 中学生日記 一年生編 ①（改稿済み）

夕暮れが差し込む教室を覗き込むと、柔らかな色とは裏腹に静寂だけがあった。

窓際の文書の席へと近寄ると、机の横には鞆が掛けられたままになっている。

「まあ、文書が勝手に帰るとは思ってたけど……」

放課後、先生に頼まれた仕事が終わったので教室へ戻ってみると、待っているはずの文書はそこにいなかった。

ふと外に視線を向けると、グラウンドで部活に勤しむ生徒達の姿が見えた。

（女子中だから当たり前だけど、本当に女の子しかないな）

制服が可愛いと評判の学校だけあって、部活のユニフォームも可愛さを意識した意匠となつているのは純粹に面白いと思つた。

ふと見下ろしてみると、薄紫を基調とした学生服が目に入り、ボクは微妙な顔をしてしまう。

性別が女に変わってから主観で8年近くが過ぎているので、スカートや可愛い服を着ることはもう慣れた。

それでも、女子中の可愛い制服を着ている自分を見ていると、未だ根強く残るオトコ

ゴコロが主張を始めてしまうのは仕方のないことだろう。

ふと開けられた窓から漂ってくる柔風やわかぜが運ぶ喧騒が、ボクの髪を揺らして誰もいない教室に消えてゆく。

まるで幽世に迷い込んだかのような錯覚を振り切るようにかぶり振った。

(トイレかな? まあ、待ってたらすぐに帰ってくるでしょ)

そんなことを考えながら、自分の席へ座る。

文書が帰ってきたらすぐに出られるようにと鞆を机に乗せて整理をしようとしたその瞬間。

——凜と、鈴の音が響いた。

突然の事に息を呑む。

鈴の音が聞こえた事に、ではない。

鈴の音が、明らかにボクの身体から出た事に驚いたのだ。

立ち上がって制服を調べてみても、当然鈴など身に着けていない。

少しの動揺に思考が止まり、どうするべきかと悩んでいると、遠くから鈴の音が近づいてきていることに気付く。



「さっきの鈴の音は『個性』か」

当然行き着く答え。

それはつまり、ボクに『個性』を使用した相手が近づいてきている訳で。

唇を舐め、ボクは風を生み出して待機状態にする。

そうして、教室に飛び込んできた姿に、ボクは目を丸くするのだった。

「えっと、確か祓魔さん、だっけ……？」

目の前で荒い息を吐いている少女の名前は祓魔鈴音ふつますずねさん。

セミショート黒髪に鈴の髪飾りを付けている、見る者の警戒心を融かすような柔らかない笑みが印象的な少女。

グループの中心人物ではないものの、空気を読むことに長けていて、さりげなく話題転換を行いグループの空気が悪くなるのを防いでいたりするというのが、入学から一月での彼女の印象だ。

何を話しているのかわからず立ち尽くすボクの前で、ようやく話せるようになったのが、まだ息が整わぬままに祓魔さんが口を開いた。

「あ、あの、伝聞さんが連れていかれて……っ！」

「文書が……?」

落ち着かせながら話を聞くと、どうやら文書を良く思わない複数の生徒が文書を連れて行ったのを見かけたようだ。

……ボクが帰ってくるのを待っていた文書が、他の人との用事を優先させるかなあ? どうもピンとこないボクの腕を、祓魔さんは必死の形相で引っ張る。

「伝聞さんを連れて行ったあの人たち、伝聞さんが『無個性』だって言ってた……! 早くしないと、伝聞さんがっ!」

「『無個性』か……」

文書は、2年前まで『個性』を使う事ができなかつた。

そして、それが原因でいじめを受けていたようだ。

それを今更になってほじくり返そうとする人たちに怒りを覚えるが、話の内容自体は朗報だ。

「ねえ祓魔さん、そいつらは文書の前で文書が『無個性』だって言ったの?」

「えっ……そ、そうだけど、今はそんな事より」

祓魔さんの答えに内心安堵する。

文書の個性『ハロー・ワールド』は、とんでもない『強個性』だ。

格上だと理解した上で、10人以上で囲んで犠牲覚悟でようやく届くかどうか。

文書の前でその生徒たちが『無個性』だと挑発したのなら、恐らく文書はそいつらを黙らせる為に行つたのだろう。

多分人気のないところで挑発し返して、先に相手に『個性』を使わせた上で反撃する気なのだと思う。

考えをまとめ終えると、固唾を呑んでこちらを見ている祓魔さんに問い掛ける。

「最後に一つだけ聞くんね。先生にはこのこと伝えた？」

「えっ……」

ボクの言葉に一呆けた声を出した祓魔さんは、次の瞬間には顔を青ざめさせた。

「あ、え、なんで私……そうだ、普通に考えたら真つ先に先生に伝えないといけないのに……っ」

「いや、今回に限っては先生に言わないのが正解だよ」

落ち着かせる為に少しかだけ笑いかけてから、祓魔さんの手を引いて教室を出る。

ボクの言葉の意味がわからないのか目を白黒させている彼女に、端的に伝える。

「文書がやりすぎないように、止めに行こう」

――凜と、澄んだ音が響き渡った。

祓魔さんの柏手は、何故か鈴の音となって夕焼けの廊下に消えてゆく。瞑目していた祓魔さんは、ゆっくりと顔を上げると、口を開いた。

「多分、旧校舎の裏の焼却炉前だと思う」

「……わかった、行こう」

恐らく、祓魔さんの『個性』は鈴の音を発する事と何かを探し当てる『個性』だ。

さつきボク自身から鈴の音が響いたことから……思い描いた人や物から鈴の音を発生させて、その鈴の音を感じること、居場所を探し当てる、といったところか。

そんな考察をしていると、いつの間にか目的の場所へとたどり着いた。

物陰から微かに聞こえる話し声、祓魔さんと一緒に乗り込もうと一歩を踏み出し。

「ですから、わたくしは何度も言っているではありませんか。少しでも他人に興味を持つて欲しい、と」

祓魔さんの手を掴んで止める。

「え、遠藤さん……?」

「ごめん、ちよつとだけ様子見る」

あちらから見えない場所で、いつでも間に入れるように風の流れを制御した状態で耳を澄ませる。

さつと風を一吹きさせて探った結果、向こう側では壁際に立つ文書と、逃げられないように囲む4人の生徒が居た。

「知りませんよ、そつちの事情なんて。なんで文書がわざわざ貴女の思い通りに動かないといけないんですか」

「そんな意味で言った訳ではございませんわ。ただ、話しかけてきた相手にまるで虫けらを見るような目を向けるのをおやめなさいと言っているのです」

……これは、文書が悪くないか？

そう思ったのは祓魔さんも同じようで、困ったように眉尻を下げてこちらを見つめてきた。

……ボクと一緒にいる時にそんな露骨な態度は取っていないかったように思うけど、うまく隠していたのか、ボクが文書をよく見ていなかったのか。

「ねえ伝聞さん、貴女はわたくしの名前をご存じでして？」

「知りません」

一瞬の静寂。

予想していたのか、声の主は先程までと同じ調子で話し続ける。

「全国模試、伝聞さんが1位でわたくしが2位。少なくともわたくしが最初に試験を受けてから今までずっと、ですわ」

「そうなんです、知りませんでした」

「わたくし、模試の会場で伝聞さんに何度も話しかけた事があるのですよ?」

「……記憶にないですね」

何の感情も込められていない文書の言葉。本気で興味が無いのだろう。

文書の適当な相槌に遂に痺れを切らしたようで、今まで黙っていた他の生徒が口々に文書の悪口を口にする。

「これは、止めるべきなんだろうか……」

「い、一応、複数人で囲んでるんだし、止めないと……」

ボクの独り言に祓魔さんが焦ったように言う。

踏み込むべきか否か。躊躇していると、一際大きな声で「顔がいいからって!」と一人の生徒が叫んだ。

「ちやほやされて、他の人を見下して! さぞかしい気分なんでしょうね!」

「顔がいい……?」

疑問符の付いた文書の呟きに、その生徒は更に言葉を重ねた。

「他の人間を見下してるんでしょ？　自分より劣ってるって、そう思ってるんでしょ?!」

「別にそんな事は思ってます、ただ単に興味が無いだけです」  
少しだけ角から顔を出して、様子を窺う。

返答と共に向けられた、まるで路傍の石にでも向けるような無感情な文書の視線に、激昂していた生徒は思わず後退りする。

次に文書が視線を向けたのは、文書の真正面に立つ生徒だ。

漫画やアニメでよく見る金髪のお嬢様然としていて、心なしか佇まいに気品があるように思えてくる。

恐らく先ほど話していた、全国模試2位だというのがこの子なのだろう。

この子が主体となつてこの呼び出しが行われたのだというのなら……文書はきつと、この子に手を出させようとする。

止めに入るなら、この子が手を出す直前だ。

制御している風の流れを加速させつつ、様子を見る。

「別に自分の事を容姿が優れていると思つてはいませんが」

そこで言葉を区切り、文書が浮かべた表情は——嘲笑。

「別にあなた達の容姿が優れていたとしても」

金髪の子をしつかりと見据えて、言い放った。

「仮にあなたが全国模試1位だったとしても——そんなくだらないことで、貴女に興味を持つたりしませんよ」

「——このつ……『無個性』の癖につ！」

文書の言葉に怒声を上げた金髪の子が、腕を振りかぶる。

振り降ろされた手が文書の頬を張る直前に、制御していた風を金髪の子にぶつけて後退させる。



「はい、そこまで。言いたい事は色々あるだろうけど流石に暴力はダメだよ」

「くっ……貴女は、伝聞さんのご友人の」

「初来っ！」

金髪の子の言葉を遮るように声を上げた文書が抱き着いてきた。

受け止めると、いつも通りの文書がこちらを見上げて笑いかけてくる。

「こんなところまで迎えに来てくれたんですね、ありがとうございます！」

あまりの変わりように啞然とする周囲の事は見えていないのか、文書はボクの腕を抱きしめて、普段と変わらぬ調子で口を開く。

「さあ帰りましょう。昨日食べたソフトクリーム美味しかったので今日も食べたいんですけど……いいですか？」

「……確かに、あれは美味しかったね。ボク、次はチョコレート食べてみるよ」

それに対してボクは、言及する事ができなかった。

ボクは知っているのだ。文書が『個性』が使えず苦しんでいたことを。ボクと文書が友人になってまだ2年だ。

文書が『個性』を使えるようになってまだ2年しか経ってないんだ。

それまでに受けた心の痛みを忘れろなんて、ボクには言えない。

「何故ですの……?」

不意に、金髪の子が言葉を零した。

悲しそうな表情で文書を見つめる彼女の心中は、ボクにはわからない。

先程までの会話を聞く限りでは、最後の『無個性』発言以外は文書の事を悪く思っているようには思えなかつたけれど。

「そちらのご友人には普通に接しているではありませんか、何故他の人に友好的になれないのですか?」

その言葉に、文書の身体に力が入るのがわかつた。

……止めるべきか、否か。

その答えは一瞬で出た。

ボクは彼女に賛同してはいけない。

この事でボクが文書を否定したら、文書はまた独りぼっちになってしまう。

「周囲の人は、伝聞さんの敵ではございませんのよ?!」

「敵ですよ」

文書の発した声に、その場にいた皆が凍り付く。

ボクの腕を抱きしめたまま、顔だけを金髪の子に向けて。

ボクからは見えないけれども、恐らくは憎しみに顔を歪めて。

文書は、言い放った。

「文書と、初来と、家族以外は――全部、敵です」

頭を優しく撫でてあげると、ゆっくりと文書の身体から力が抜けてゆく。

今の文書の状態が良くないのは、ボクが一番わかっている。

最初に手を差し伸べたボク以外を遠ざけて、自分の殻に籠って心の傷から目を逸らし

ているだけの、ただの逃避。

だけでも、ボクは文書が弱いだけの人間じゃないと知っているから。

「初来、帰りましょう」

「……うん、帰ろうか」

文書は踵を返し、この場から離れようとする。ボクは腕を引かれるまま、何も言わずについてゆく。

いつか文書は、心の傷を受け入れて、自分だけで前に進めるようになるから。

それまでボクは、文書と一緒にいる。

心細そうにボクの手を握る文書。

安心させるようにと、その手を握り返す。

独りぼっちの文書の心を守る、その為にボクは居るのだから。

「……待ってっ！」

文書の足が、止まった。

振り返ると、祓魔さんと目が合う。

「あのつ、私……っ」

「……言いたい事が無いなら帰らせてもらいますが」

「待つて、もうちよつとでまとまるから……っ」

衝動的に呼び止めたのだろう、文書にそう返しながらも彼女は何を言えばいいのかと目を泳がせている。

……祓魔さんは、文書の言葉を聞いて、それでもまだ関わろうとしてくれているのだろうか。

何故祓魔さんが文書を気に掛けるのかはわからないけれども。

ボクの勘違いじゃなくて、文書と友達になりたいと思ってくれているのならば。

きつと、今この瞬間が文書にとつての転機だ。

「この人はクラスメイトの祓魔さんだよ。文書が連れていかれたつて教えてくれたんだ」

「そうなんですか……」

ボクの言葉に少しだけ身体の力を抜いた文書は、祓魔さんに小さく頭を下げる。

「心配して頂きありがとうございます。それでは文書たちは帰らせてー」

「友達になりたいの！」

尋常じゃない距離の詰め方だった。

少なくとも直前に「自分と近い人以外は敵だ」と言い切った相手に言う言葉ではない。

案の定、一瞬だけ呆気にとられた文書は、嫌悪感に顔を歪めた。

「お断りします、別に文書は友達なんて欲しくないのです」

「さつき言つてたソフトクリーム、わたしも食べたい！」

「話聞いて貰えませんか? ……いえ、無理そうですね」

文書はすぐさま会話のキャッチボールを諦め、ボクの手を引いて教室に戻ろうとする。

祓魔さんは、当然のようにそれに付いてきた。

「付いてこないで下さい」

「わたし伝聞さんとおなじクラスだよ! あ、遠藤さんも末永くよろしくおねがいします」

ぺこりとボクに向かって頭を下げる祓魔さん。

髪飾りに付いている鈴がちりと鳴る。

ボクは嬉しくなって、つい同じように頭を下げる。

「よろしく願います、祓魔さん」

「初来?! こんな人放っておいてきつさと帰りましょう!」  
先程までの空気なんて知った事かと騒がしいボクらを、残された金髪の子達は呆然とした様子で見送っていた。

「――昨日は申し訳ございませんでした。いくら頭に血が上っていたとはいえ、あの発言はすべきではありませんでしたわ」

翌日、朝のホームルームが始まる直前。

ボクらの教室に入ってきた金髪の子がそう言つて文書に頭を下げた。

クラスの皆が静まり返る中、頭を上げた金髪の子は、しっかりと文書を見据えて口を開く。

「伝聞さん、貴女はわたくしが敵だとおっしゃいましたね」

「……それが、どうかしましたか」

険のある文書の返答に、金髪の子は胸を張つて答える。

「――その通りですわ!」

(ええええええええっ?!)

ボクはびっくりした。文書もびっくりしている。クラスの皆もびっくりして2人を凝視している。

そんなボクらの目の前で、文書に人差し指を突き付けて、高らかに宣言する。

「わたくしは、在学中に全国統一テストで伝聞さんよりいい成績を取ります。そして！」

文書に指を突きつけ、彼女は不敵な笑みを浮かべる。

緩やかなウェーブを描くセミロングの髪先が微かに揺れた。

「もう二度と忘れたなどと言えないように、わたくしの存在を貴女に刻み込んで差し上げます！」

曇りのない、翡翠の瞳に文書を映して、彼女は不敵に笑う。

「わたくしは不夜城癒香——文書の敵ですわ！」



言い終えると、不夜城さんは踵を返して教室から出て行く。

あとに残されたボク達が状況を理解するよりも早く、虹を纏った担任の先生が教室へと到着するのだった。

## 中学生日記 一年生編 ② (改稿済み)

空気の流れを操り、汗ばむ肌を冷やす。

夕風特有の蒸した熱気に、暑さに弱いボクは憂鬱な気分のため息を吐く。

茜に変わりゆく空と新緑に染まる山を眺めながら、ボクは文書との待ち合わせ場所である駅前広場へのんびりと歩を進めていた。

きっかけは、ちよつとした噂話だった。

なんでも、隣町にある鈴鳴神社は良縁を結ぶ事で有名な神社で、そこを訪れたカップル未満の男女が交際を始め、ついには幸せな家庭を築きましたとき、というどこにでもあるような噂話。

普通じゃないのは、それが『個性』によつて成されたという事だ。

良縁祈願を成しえる『個性』に興味を持ったボクは、文書と一緒に神社を見に行くことにしたのだ。

ちなみに今日は鈴鳴神社でお祭りがあつたらしい。日時を決めたのは文書だけど、普通に一緒にお祭りに行きたかつただけの可能性が……？

「それにしても、暑いなあ」

日中のうだるような暑さは無いが、湿度の高い、じつとりと纏わりつくような暑さに思考が浅くなる。

いくら空気の流れを着物の中まで巡らせても、風そのものが生温いので効果は薄い。額を伝う汗をハンカチで拭い、ふと視線を車道へと向ける。

ガードレールを挟んで歩道と並ぶ車道には、何台もの車が空を走る予定もなさそうに列をなしている。

ボクの前世でもありふれた光景。

時代的には100年以上も未来な筈なのに、だ。

人類が『個性』に目覚めた後に、人類の文明は衰退した。

人は異質な存在を排除したがる。

当初は異能と称された『個性』、それを発現させた人は迫害の憂き目に遭った。迫害を受けた人々は集まり団結し、『個性』という力でそれに対抗。

それが更に『個性』保持者に対する風当たりを強くするという負の連鎖を生んだ。

そんな荒廃の時代を終わらせたのが、オールマイトなのだ。

圧倒的な力で敵<sup>ウイラン</sup>を倒し、存在そのものを抑止力とすることで日本の敵<sup>ウイラン</sup>による犯罪数を

激減させたのだ。

(それが健全なのかと言われると、違うんだけどね……)

今の状況は、完全にオールマイトに頼り切った上で成り立っている。

別に他のヒーロー達が頑張っていないとか言う訳ではなく、事実としてオールマイトの居ない海外での個性犯罪数はとんでもなく高いのだ。

オールマイトだって人間だ。いつか必ずヒーローを引退する時が来る。

その時に、きつと日本は荒れるだろう。

ボクに一体何ができるのだろうか。

ずっと前から考えている、自分自身への問い。

その答えは、まだ出ない。

「ん……？」

駅前の広場が見えたと同時、ボクは思わず声を漏らしてしまう。

普段はそこまで人が多くない場所の筈なのに、何故か今日は妙に人だかりができてい  
るのだ。

なんというか、人口密度が広場中央の噴水前だけ高くなっているというか。

「……いや、まさか」

ふと浮かんだ考えを口で否定しつつ、ボクは小走りになる。

「どんどん近づいている人だから、その隙間から文書の姿が見えた時には既に、厄介事になっていると気付いた。」

「ちよつ……と、通りまーす」

人だかりはそれほど密集している訳ではないので、軽く声掛けをしてから間を通り抜けて中央にある噴水に腰掛ける文書と、文書に声を掛ける優男の下にたどり着いた。

文書は『個性』を発動させ、薄青のバリアみたいなのを張って読書に勤しんでいる。ちなみに見ているのは医学書だった。色々やべえ。

一方、文書に声を掛けている高校生くらいに見える男の子は普通にイケメンで、これなら文書に声を掛けても無謀なチャレンジとは言えないな、などと一瞬考えてしまう程だった。

「別にひどい事しようとかそういうワケじゃないんだよ？　ふつーに、キミと仲良くなりたいただけなんだって！」

「……」

「あはは、無視はひどいなあ……あれ、これもしかして声とどいてなかったりするのかな？」

完全無視の状態の文書に、男の子はそれでも余裕を崩さず笑っている。滅茶苦茶モテ

るんだろ？なあこの子。

危害を加えるでもない普通のナンパなら、元男的には見守ってあげたい気持ちもあるが、今は文書の友人で、待ち合わせの約束をしている身だ。

バリアに近寄りノックをする。

「お待たせ」

「――初来っ!」

声を掛けた瞬間に文書は凄いい勢いで顔を上げて『個性』を解除する。

その瞬間にバリアと読んでいた本が消失した。それどころか『個性』の使い方？抱き着いてきた文書を抱きとめる。すると、男の子が話しかけてきた。

「あー、ちよつといい?」

「初来、行きましょう」

スルーしているというよりは認識すらしていない風な文書。

仕方なしに視線を向けると苦笑を返された。

「これ、連絡先なんだけど、もしよかったら」

『『しようしつ』』

文書の眩きが、男の子の差し出したメモを消失させる。

目を見開いた男の子に醒めた目を向ける文書、その華奢な身体を抱きしめる腕に力を

込める。

「まあ、別に君に悪感情を抱いてはいないけれども。今がこの子の答えだからね」  
言葉を発しながら、準備を終える。

今から行うのは『個性』の行使ではない。文書の家にある『個性』反応測定機材でも  
感知できなかった、『個性』ではないボクの持つ力。

ボクと文書に向けられている視線や感情を知覚して。

「だから、さようなら」

その全てから、ボクらをズラした。

その瞬間、男の子の視線が宙を彷徨う。

見えてはいないけれども、ボクらの周囲に居る人たちは全員そうだろう。

何故かは知らないけれども、ボクは他人の意識の中から抜け出す力を持っているの  
だ。

意識の空白に呆然とする人たちの間を縫って、人ごみから抜け出す。

「初来……」

「ん」

不安そうな文書の声に、手を握り返す事で返す。

ボクの他者の意識を逸らす力を、文書は何故か嫌がる。

自分にはその力を使わないでくれとはつきりと言われたほどだ。

歩きながらもボクの方へと頻繁に視線を向けてくる文書。

せつかく遊びにいくのにこのままのテンションではどうかと思うので、ボクは口を開いた。

「文書、その浴衣似合ってるね」

「……そ、そうですか？」

頬を染めて視線を漂わせる文書。

青の線で波を描く、夏にぴったりの浴衣。

長い髪は後ろで纏められていて、そこにかんざしが挿されている。

文書自身の線の薄さも合わさって文句なしの薄幸美少女（ワールドクラス）だというのに、その美少女が頬を染めて微笑んでいるのだ。

当然ボクもちよっと心拍数が上がっている。

すれ違う人たちも胸を押さえて蹲っている。

「お母さんが、初来のイメージカラーに合わせたって言ってました」

「なるほど」

恥ずかしさを誤魔化すようにそんな事を言う文書に、頷きを返す。

確かにボクのイメージカラーは青だ。



ちなみに言うと、緑もボクのイメージカラーで、ボクの今日の浴衣は白地に3つの濃さの違う緑で線を引いた、風を模した紋様だ。

ボクのイメージカラーに合わせたと言うのなら青と緑の2色を使うはずなので……。きつと撮香さんは、文書の為にウチにあつた浴衣を確認（透視）したんだな！

ボクは好意的に解釈した。

「その……初来も、似合っていますよ。とつても」

「うん、ありがとね」

文書の手を軽く握る。

たったそれだけのことで嬉しそうに笑う文書。

その笑顔に、また少し心拍数が上がって

それが少し気恥ずかしくなったボクは、視線を前へ向けて。

その時にはボクは既に、さつき意識を外しきれなかった人がいた事なんて、忘れてしまっていた。

「あの人、私と同じ……」

小さくなってゆく背中を目で追いながら、私は呟く。

一瞬見失ってしまう程に強い意識外しの力に。

自分より強い力に。

それほどに強い力を持っているのに、隣に誰かが居るといふ事実には強い興味を抱いた。

「私も、あんな風になれるかな……」

誰かと隣り合って、心の底から笑えるのなら、それはどれだけ素敵なお事なのだろうか。

そんな未来を想像して、私は笑って――両手で、思いつき自分の頬を叩いた。

「痛い……」

じんじんと痛む頬に顔を響めながら、音に反応してこちらに向けられた意識を外す。

この笑い方はダメだ、お父さんとお母さんに怒られてしまう。

歯を見せないように、自然な笑みを浮かべる。

視線を向けると、先程見えた背中では雑踏に紛れてもう見えなくなっていた。

それでも、私と同じように頑張っている人が居ることがわかったから。

「私も、頑張らないと」

あの人に背を向けて、私は歩き出した。

## 中学生日記 一年生編 ③（改稿済み）

星々の淡い光が散りばめられた夏の夜の帳を、穏やかな陸風が揺らしている。

祭りに訪れた人々の喧騒の中、ボクは屋台で買ったタコ焼きを片手に、もう片方を文書と手を繋いで歩いていった。

なお、文書が自然に指を絡めてきたので考える暇もなく恋人繋ぎになってしまっていた。

女として生まれ変わって12年、前世の記憶を取り戻して9年。

それだけの年月を過ごしているというのに、いまだにふとした瞬間の女の子同士のボディタッチには慣れない。

……なんで普通に抱き着いたり胸を揉んだりしてくるんだろうか。

苦手、というより元男だという意識があるから反応に困ってしまう。

そんな事を考えながら、なんとなく見上げた夜空。

家から家へと張られたロープに、鈴を模した提灯が規則正しく並べられているのが目に入った。

一息つくために公園へと避難すると、同じ考えの人達が思い思いの食べ物を持ってベ

ンチに腰掛けていた。

大通りと同じように鈴型の提灯がオレンジの明かりを放っており、淡い柔らかい色合いで染められた公園に、ボクは郷愁を覚えてしまう。

空いているベンチに文書と2人で腰掛け、眼前の光景をぼんやりと見ながら口を開く。

「知ってはいたけど、やっぱり変な神社だね」

ボクの言葉に、焼きそばを頬張っていた文書が頷く。

街中参道。

そう呼ばれる鈴鳴神社の参道は、なんと住宅街の大通りの名称なのだ。

鈴鳴神社の本殿は、普通に住宅街の真つただ中にあり、住宅街を含めたこちら一帯が神社の敷地扱いとなっている。

鳥居の向こう側にならぶ住宅街を見て、流石に2人して言葉に詰まったのは今から30分は前の事だった。

超常黎明期に設立された神社である鈴鳴神社。

住宅街も含めて神社扱いされている奇妙な光景は、当時の混乱から身を護る為の団結の結果だそうだ。

なんだろう、自身の土地に結界を張るとかいう『個性』持ちでもいたのかな？　ボク、気になります！

……そうだ、『個性』で思い出したけれども。

「ねえ文書、そういえばなんだけど」

「はい？」

ボクの目を見て首を傾げる文書に、ボクは気になった事を尋ねる。

「この神社の神主さんの『個性』が知りたいって話だったと思うんだけど、なんで祭りの日に来たの？」

神社の資料を探すなら図書館だし、神社の人に聞くにしても祭りの日じゃないほうがいいと思うんだけど。

……ああつ、暗がりでもわかるほど文書がジト目につ?!　待って、誤解だ!

「違う違う、お祭りに遊びに来るのは別に神社に来ればいいんじゃないかって話で！」  
納得してくれたのか、文書さんの目が元に戻る。

一呼吸。

「この神社の公式サイト祭りのページで、下に小さく『個性』使用許可届提出済と書かれていたんですよ」

「……つまり、どうということだっただけよ?」

「このお祭りで『個性』が使用されるということですよ」

文書の話によると、祭りの情報が載せられているページにだけその文言があるらしく。

それはつまり、この祭りの時にのみ神主の『個性』が使われるかもしれないとのこと。「そういえば初来は、この神社の起源を知っていますか？」

文書の問い掛けに、ボクはにつこり笑う。

文書もにつこりと笑い返してきた。

「そもそも、一人の男が『個性』を発現させたのが始まりなんですよ」

文書の話によると、なんでもその『個性』を発現させた男性が鈴を鳴らすと、悪意や害意を持った相手が必ず不幸な目に合ったとのこと。

その『個性』で超常黎明期の混乱からこの地域の人たちを守り抜いたらしい。

それがこの神社の起源、穢れや厄災を払う鈴鳴信仰の始まりとのこと。

わかりやすい現象系の『個性』ばかりだった時代に、神の御業としか思えないような『個性』を持った人が生まれたのなら。

「鈴鳴信仰の信仰対象は鈴ではなく、初代の鈴鳴神社の神主——現人神の『個性』そのものなんですよ。そして鈴鳴神社の神主は血縁の中から、初代の『個性』と似た『個性』の持ち主が選ばれるんです」

「なるほど……」

その人が信仰の対象になるのも、まあ納得できる話ではある。  
文書の説明に頷く。

生き物や遺物を御神体とするのではなく、実際に人が起こした奇跡そのものを信仰するなんて聞いた事がなかった。

他にも色々興味を惹かれる話で、面白かったんだけど、やっぱりボクが一番興味を引かれたのは『個性』の話で。

いくら似た『個性』の持ち主が選ばれるとはいえ、親の『個性』と全く同じ『個性』を持つ子が生まれる確率は殆どないだろう。

つまり、初代の『個性』をボクが詳しく知る事は、恐らくできない。

「その、あらひとさんの『個性』……一体、どんな『個性』だったんだろう」

もしボクが死んだ後で、あの世であらひとさんに会えたらぜひ聞いてみたいな、なんて思いながらそう呟く。

……文書からの反応がなかったので顔を向けると、何故か信じられないものを見るような目でボクを見ていた。

数秒の間見つめ合うボク達2人。

ようやく再起動したらしく、はっとした文書。

「……文書は、そんな初来でも大好きですよ?」

生温い視線が非常に不愉快だったので、ボクは文書の口にたこ焼きをねじ込んだ。

「こんばんは。2人とも仲良しさんだね」

満足そうにたこ焼きを頬張っている文書の口を紙ナフキンで拭いてあげていると、そんな声が聞こえてきた。

視線を向けると、何故か巫女服姿の祓魔さんと、その後ろに隠れて顔だけ出してこちらを見ている不夜城さんが居た。

ちなみに、文書は一瞬で嫌そうな顔になった。

「こんばんは。祓魔さん達も仲良さそうだね」

「良くありませんわ! こっつ、こんな辱めをわたくしに……っ!」

辱められているらしい不夜城さんが、顔を真っ赤にして叫ぶ。

自分より身長の高い祓魔さんの後ろに隠れている不夜城さんは、何故かその金髪を結い上げていて。

「あつ、もしかして浴衣着てるの?」



ふと気付いたことを口にする、どうやらそれは正解だったらしい。

身体を硬直させ、真つ赤な顔でこちらを凝視している不夜城さんが震え出した。

「わっ、笑えばいいではありませんか?! こんな……こんな、ハーフのわたくしには似合わない姿っ!」

不夜城さんがハーフなのは初耳だった。

まあ確かに先祖にヨーロッパの人がいそうとは思ってたんだけど。

……でも、外国の人が浴衣着てるのを見ても、似合わないと思つた事ないんだけどなあ。

どう言えればいいものかと思案していると、ふと意地悪な顔になった祓魔さんが、急に身体を横にずらした。

「おお……」

思わず感嘆の声が漏れてしまった。

姿を現した不夜城さんは黒地に金の線が波状を描く、大人っぽい浴衣を身に纏つていた。

中学生が着るには大人過ぎるかと思つてしまうが、それが逆に不夜城さんの幼さを引き出していて、大人っぽさと子供っぽさを両立させている。

【朗報】浴衣を着た中学生が可愛すぎる【浴衣美人】とかいうスレが立てられてもおか

しくはない程だ。

身体を抱えるようにして縮こまる不夜城さんに声を掛ける。

「いやあ、物凄い浴衣美人だね」

「でしょ？ ちなみに私が浴衣を選んで着付けしました！」

「でかした」

「でかされました！」

得意げに胸を張って笑う祓魔さん。

その拍子に鈴の髪飾りが控え目に鳴った。

……もしかして。

いや、この場所で巫女服を着ているのだから気付いて然るべきだったんだけど。

「祓魔さんは、鈴鳴神社の人なの？」

「そうだよー、鈴鳴の純巫女と呼ばれます」

純巫女とは？

いや、バイトの巫女さんではないという事だろうけども。

春のあの件以降交流が増えた4人で、ベンチに並んで座る。

ちなみに文書は先程からそつぽを向いたまま、ボクの手をにぎにぎしている。

かまって欲しいのかな？ かわいいの化身かよ。

## 闇に蠢く

そつと、まるで恋人に甘えるかのように文書が身を寄せてきた。

シーツが擦れる乾いた音と、微かな吐息だけが静かに響く。

「ん、はつきい……」

弛んだ頬を黒髪が滑り落ち、ボクの胸に触れる。

互いに産まれたままの姿で、触れた素肌は行為の余韻か、未だに熱を孕んでいた。妙に心地好い気だるさに身を委ねるように、ボクはそつと目を閉じる。

「はい、カッター」

空間に響く声。艶やかさと可愛らしさが混ざる、耳搔きボイスに使われそうな声だ。「マジで、何やってるんですか撮香さん……」

頭痛に眉を寄せながら、語尾に音符が付きそうな調子で盗撮を自白した文書のお母さんにツツコミをいれる。

伝聞撮香（とりか）さん。個性『一聞一見』という、認識した場所をリアルタイムで

見ることのできる個性を持つ女性だ。

それを盗撮に使わなければ、それ以前に実の娘すら範囲に納めてしまう広大な性の守備範囲さえなければ、と強く思う。

ボクを婚約者として紹介した文書。そんな娘に対して「初夜は撮らせてね」と言い放った時の凍りついた空気は筆舌に尽くし難かった。

「残念ながら行為に到ってはいませんよ。危うかったです但未遂です」

受けに回ってたらヤられてた。咄嗟に編み出した個性による必殺技『お休みのキス』で眠らせていなければ今頃は両方とも処女喪失してただろう。

「残念ながらそうみたいね」

心底残念そうな声と共に、数回ドアノブを回す音。鍵が掛けられていることに思い至ったのか数秒音が止まる。

再び音が鳴り出した。

今度は軽い、金属同士が擦れ合う音……。おいまてまさか。

「文書ちゃんだったらかわいい、こんなことしても無駄なのに」

「び、ピッキングしやがった……」

普通に真正面から娘の部屋に侵入してきた撮香さん。

文書が成長したらこうなるだろうという正統派黒髪長身美女である（但しボクより低

身長)

普通にボクに覆い被さってこようとしたので拒絶すると、諦めて文書の側から布団の中に潜り込んできた。いやだからボクと文書二人とも裸なんですが。

「ありがとうね、初来ちゃん」

「へ、変態だ……」

愕然としたボクの言葉に苦笑する撮香さん。

そつと文書の頭を撫でる。その眼差しは慈愛に満ちていて、まさしく母親の顔だ。

どうやら真面目な話らしい。

「この子がこんなに笑って、何かに一所懸命になれるのも。初来ちゃん、あなたがこの子を救ってくれたからよ」

だから、ありがとうと。

そう言って笑う撮香さん。

だから、ボクも胸を張って言う。

「文書は、凄く強い子です」

ボクが困った時に。前に進む方法が分からなかった時に。諦めそうになった時に。

文書はいったって、大丈夫だと笑って手を引き、前を向かせてくれるのだ。

「確かに、文書は自分の個性から逃げていました。だけど……ボクじゃない誰かが手を

差し伸べていたとしても」

……いや、違うな。

「文書の傍には文書を想ってくれる人が居て、いつだって独りじゃないって。その事にさえ気付けたのなら、文書はきつと一人でだって自分と向き合えた、と思います。だから」

「自分は大したことはしてない、つて?」

撮香さんの瞳がボクを映す。

問い質しているんじゃないかと、先を促す言葉。

どうしてそんな優しい瞳を向けてくれるのか。そんな言葉を胸にしまい、答えを返す。

「文書と知り合えた事。笑い合えた事。親友と、呼べるようになった事。誇らしく思いますし、ボクの言葉が文書の心に届いて前を向く切っ掛けになれたのなら、それほど嬉しい事はないです」

本音をそのまま撮香さんにぶつける。

恥ずかしいけれど、向かい合っては絶対に言えないけれども。

「ボクが一番文書の強さを知っていて、ボクが一番文書を尊敬しているんです」

これだけは、撮香さんにだって負けない。

言い切ってから顔に熱が集まるのを感じる。ヤバい語りすぎた恥ずかしい。撮香さんはまるで無垢な少女のように笑うし。

「愛されてるけれど、まだまだ先は長そうよ?」

「ーっひゃあ!」

胸を鷲掴みにされて体が跳ね上がる文書。体を捻り、ボクの方へと逃げて来て叫ぶ。

「お母さん! 本当にそういうの止めてって言ってるじゃないですか!」

ボクの胸に後頭部を預けて、耳まで真っ赤にした文書。

ちなみに文書は家族の前では例の語尾は無しだ。かわいい。

「ああもうっ! 『たいしっ』!」

「あら、待ってお母さんも混ぜ」

文字魔法が発動し、青白く光る文書の指が撮香さんを吹き飛ばす。ひとりでに開いたドアの向こうへ撮香さんが飛ばされた瞬間、撮香さんの言葉を遮るように閉まった。

『みっしっ』

再び発動された文字魔法。

部屋が完全に隔離され、入ることも出ることまでできなくなる。

「……まったく、お母さんは」

「愛、ではあるんだよね」

「お断りだそうですよ」

赤くなった頬を押さえ、溜め息一つ。文書が抱きついてくる。

「初来……緑谷出久が、好き……ですか？」

抱きしめる力が強くなる。

恐る恐るといった問い掛けに、正直に答える。

「ヒーローとしてならイエス。異性としてならノー」

「ばつさり、ですね」

「どうか、ボクの事情が事情だし。男も女も関係なく誰に対しても恋愛感情はないよ」  
軽く言ってるけど、これ真面目に問題だ。

前世の性別を取るか、今世の性別を取るか。成り行き任せ、という訳には行かない気がする。

いつかは向き合わないといけないなあ。

「わかりました。仕方ないから初来を手伝ってあげるそうですよ」

「手伝う？」

物思いに更けるボクを現実に戻した文書の言葉。その意味を図りかねていると、今更隠すのかと言わんばかりにジト目でのし掛かれた。おいだからボク達裸だつて……。



「緑谷出久だそうですね。鍛えるらしいですね?」

「あー……」

正直、凄く助かる。ボクと出久くんだけじゃ迷走するのが目に見える。けれど、最初から頼まなかったのはそれなりの理由があった訳で。

「いいの? 出久くんの事、あんまり好いてないでしょ……?」

所謂、恋愛感情をボクに向けている文書。そのボクが、例え恋愛感情がなかったとしても、興味を抱き仲良くしようとする相手に良い感情を持てるはずがない。

「信じて送り出して、後日ビデオレターだけ送られてくる、なんて事だけは避けたいのですので」

「ごめん、言ってる意味がわからないよ」

ビデオレター? いつの時代だ。

しかも語尾消えてるし。

「とにかく、文書はずつと一緒にいるそうですね。それに」

言葉が区切られる。

躊躇いの後、ボクの胸に顔を埋め、小さな声で文書が告げた。

「初来が見初めたヒーローを、見てみたくなっただけ、らしいです」

「……!」

家族とボク以外の人に興味を持たない文書が、出久くんに興味を持ったと……！

これは、まさか出久くんルート入りか？

今まで考えた事もなかったけど、文書だって僕のヒーローアカデミアの登場人物である可能性も無くはないのだ。いや、文書ほどの強個性ならむしろ登場人物じゃない訳がない。

出久くんのお相手ーヒロインは、あの浮かす女の子だと思っていた。けれど文書がヒロインだっておかしくないし、サブヒロインという線もある。

これは、来たか。親友の恋路を応援するイベントが。

「わかったよ文書、一緒に出久くんに会いに行こうー」

「……もし。文書と緑谷出久をくっ付けよう、とか考えているなら、監禁して文書の考え付くありとあらゆる性行為で初来を快楽漬けにして、片時も離れたくなくなるまで依存させますからね……？」

胸に埋めていた顔をこちらに向ける文書。その瞳は暗く淀んでいる。所謂ヤンデレ目だ。

「まさか、そんな事考える訳がないでしょ？」

「……騙されてあげるそうですよ」

仕方ないと臉を伏せてそう呟き、文書はボクの鎖骨に舌を這わせた。

「ちよつ、やめ」

「相変わらず、ちゆつ、鎖骨が弱いそうですね」

やめる舐めるな吸うな唇で挟むな！ このままだと非常によろしくない事になるの  
で、脇腹を擦つて反撃する。

面白いうように体を跳ねさせる文書。面白くなつて暫く続けていると、一際大きく体が  
跳ねた。

ヤバイやり過ぎた……？

「だ、大丈夫……？」

「……ふあ、しゅごひ」

紅潮した頬、潤んだ瞳。これはアウトだ。

お休みのキス（必殺技）で強制的に眠りにつかせて、ボクも布団に潜り込む。  
今日は色々な事があつた。

ボクと文書と出久くと、3人共に雄英に合格できた事。

出久くんの家で、オールマイトグッズに囲まれて幸せだった事。

帰り道で文書に拉致された事。

文書の家で真つ裸に引ん剥かれた事。

ベッドインからインされそうになつた事。

なんとか撃退できた事。

ヤンデレ化の兆候を文書が見せた事。

文書はしつかりと撮香さんの血を引いていると確信できた事。

8割は文書の事で、しかもその内半分はエロだったけれども。

明日はきつと、もう少し自重してくれるよね。ねえ、文書。

「ーくしゅっ」

風を操り文書に服を着せてから、電気を消す。

おやすみ、文書。

## 遠藤初来の日常―ナンパ編―

おっぱいソムリエの文書によると、元々Eカップだったボクの胸は、この度Fカップになったそうだ。

道理でブラがきつい筈だ。というか、どこまで成長する気だボクの体。身長も既に180を越えたぞ。

「心配しないでいらしいですよ、センスゼロの初来に代わって文書がかわいい下着を買ってあげるそうです」

「前みたいに大事な部分を隠してないブラとか持ってきたら、文書の下着を荒縄にするから」

「望むところです」

望んじゃうのかあ……。

被虐願望のある文書を連れて、ボクは下着とあとついでに服とか生活用品を買いにアウトレットに来ていた。

雄英高校からほど近いアウトレット。店舗数も商品の幅も中々らしく、纏まった買い物をするなら恐らく利用することになる。

今回はその下見も兼ねているのだ。

文書はボクのアックションセンスを酷いと認識しているらしく、服や下着を買う必要があるときには必ずついてくる。というか一人で買いに行くなど厳命された。

流石に二人で出かける時に『顎髭』Tシャツ（赤色ベースで柄が延び放題の顎髭で、胸の辺りに顎髭！と書いてある）は不味かったか。

いやウケ狙いだったんだけど、「全裸の方がまだマシです！」と怒鳴られたのは堪えた。

おまけに家に帰った時にお母さんと霧裂（きりさき）姉さんにマジかお前という顔をされたので更にダメージを受けた。

ちやうねん、体を張ってボケただけやねん。

そんな（他者視点で）激ダサセンスなボクの本日の服は白のパーカーに青のベストとジーパン。メンズファッションじゃねーか！

水騎（みずき）の上目遣いと「お姉ちゃんお願い（ハート）」のコンビで押し切られたけど、最近何故かボクに男装をさせようとする妹の将来が不安で仕方がない。

（……………ん？）

視界の端で黄色が近寄ってきたのが見えた。

恐らくはナンパだ。割りとよくあるので慣れた。

「ねーねー、君たち今暇？」

「間に合ってます」

横から掛けられた声に文書が一瞬でキレル。ボクと二人でいるのを邪魔されたくないらしく、知り合いに声を掛けられてもキレルのだ。ちなみに文書は牛乳が嫌いだ。

「だつき、上鳴（かみなり）お前一瞬でお断りされてるじゃねーか！」

「うっせー！ いやでもほんと、ちよつと話を聞くだけでも」

「ホモ以外に興味ありません、ホモになってから出直してください」

「ホモ……」

言葉を失い立ち尽くす、金髪の男の子と下駄を履いた雲みたいな異形型の個性の子。

塩対応すぎると逆ギレされても困るのでフォローに回る。

「おつちけ文書。君たちもごめんね、この子レスなんだ」

「は、はあ……」

困惑しまくりに二人。そりやそうだ、いきなりホモになれと言われて対応できるのはホモだけだ。

「ふ、文書ちゃん……っていうんだ、可愛い名前」

「誰が名前で呼んでいいって言ったですか？」

（怒）

多分、文書はチャラチャラした人が嫌いなのだろう。金髪君……上鳴君だっけ？ 名前を呼んだ瞬間に目付きがヤバくなった。

ちなみにヤバいの語源は、江戸時代に矢場と呼ばれていた射的場があつて、裏で違法な商売をやっていたそうさ。

そこはお役所から目をつけられていて、摘発する時に居合わせると命の危険もあり得るのだ。

だからこそ、江戸時代の人達は矢場を指して矢場い（やばい）と言つて距離を置いたのだ。

えっと、何の話をしてたっけ？

そうそう、文書の目付きが矢場いつて話だ。

（まー、二人で出掛けるの久し振りだからなあ）

ここははつきり断ってしまうか。逆ギレとかしなさそうな子達だし。

「えーっと、上鳴君だっけ？ ごめん僕達今から」

「えー、俺の名前覚えてくれたの？ スゲー嬉しい！」

下着を買いに行くから付き合えない、と言おうとしたが、上鳴君に遮られた。

一瞬言葉を止めたボクに、雲下駄君が言葉を投げ掛けてきた。

「君達運いいよ！ 未来の有名ヒーローの本名知れたんだから」



「おま、角消（つのけし）それ言うなよ！ 自慢してるみたいでハズいじゃん！」  
「未来の有名ヒーロー？」

思わず釣られてしまったボクに、文書が呆れた視線を向けてくるのを感じる。

有名ヒーローというと、個性が強いとか？ まさか雄英のヒーロー科合格とかはないだろうけど。

「こいつ、こんな見た目で雄英ヒーロー科合格なんだよ！」

「嘘つけ」

「ひどくない?！」

ボクと文書の声が重なって、上鳴君が抗議の声をあげる。普通に会話してるけど、これナンパ成功されてるじゃん。

とにかく、確認してみる。

「えー、上鳴君、マジで?」

「マジだって！ 学力は今証明できないけど」

言葉が途切れ、上鳴君の身体の周囲で閃光が瞬く、同時に空気が爆ぜる音も。これは……放電？

「ほら、これが俺の個性『帯電』。電気を操ったりとかは無理だけど、クソ強えよ！」

「おお……」

いや、おおとしか言い様がない。

確かに強個性だけど、ボク……はともかく文書がねえ。

でも確かに、この個性なら試験突破できそう。

ということとは。

「つまり、上鳴君は4月からボク達とクラスメイトになるかもしれない訳だ」

「……へ？」

ポカンとする上鳴君に、ウインクする。

「ボクと文書も雄英ヒーロー科合格だよ」

「文書は違いますよ？」

……えっ？

「どゆこと……？」

ボクに聞いてくる上鳴君だけど、待ってちよつと待って。

「ヒーロー科の試験落ちたの?!」

「……あの、文書は最初から経営科受験ですよ？」

「ヒーローにならないの?!」

「というか、日程違う時点で気付いて下さいよ……」

マジで初耳過ぎる。

きよとんとした顔もかわいいけど、衝撃が強すぎてどうしたらいいのかわからない。

「馬鹿みたいな強個性で頭もいいのに、なんでヒーローにならないんだよ……」

思わずごぼれてしまった言葉。それを聞いて文書は呆れたように溜め息を吐いた。

「ヒーローになる気がない人間にそんな事を言っても仕方ないじゃないですか」

……それもそうか。

普通に納得したので上鳴君に向き直る。

「というわけで、クラスメイトになるかもしれないのはボクだけだね。ボクの名前は遠

藤初来、よろしく」

「あ、えつと、よろしく……納得すんの早くない？」

？ 変な事言うね上鳴君。もう試験終わってるし、今更過ぎだったよ。

とりあえず自己紹介は終わったし……うん、買い物に行こうか。

「それじゃあ上鳴君、4月にまた会おう」

「うんまたね、じゃなくて流れ！ 今完全に親睦を深める流れだったっしょ?!」

必死過ぎワロタ。

まあ言いたい事もわかるが、ボクは今日文書と買い物をするためにアウトレットに来ているのだ。それをほったらかしにしてさつき知り合った人と親睦会とか、流石にどうよ。

「ごめんね、でも先約があるからさ。また今度」

「あー、わかった！ 期待して待つてる！ LiNn（リン）だけ交換しよーよ」  
「おっけ」

サクツと連絡先を交換して、二人と別れる。普通にナンパ成功されてんじゃん！ 連絡先交換済みだし！ まあ、同じ学校だしいいか。

「ええ……これ、本当に着るの……？」

試着室で、文書が持ってきたブラを手に固まるボク。

紫のレースの、決めるぜ！ みたいな下着なんですが。

「もーいいかい？ 覗いていいそうですか？」

「待つて待つて待つて！ 今着けるからちよつと待つて！」

慌てて、手早くブラを着ける。

いいよと告げると、シャツとカーテンが引かれ……文書がその場に膝をついた。なん  
で?!

「ま口い……」

思わずといった様子で文書が溢した言葉はまるで意味が分からなかった。麻呂……  
?

「これ程丸くてエロいならば、祀らなければ罰が当たらしいです」  
「文書……」

バカなことを言う文書から胸を腕で隠し、身体を横に向ける。が、文書の視線は動か  
なかつた。

「ああ、尻神様がお尻をお振りになられたそうです。ありがたや」

「文書っ！」

このつ、ボクがお尻大きい事気にしてるの知ってる癖に……っ！

カーテンを乱暴に閉め、ぱぱっと服を着て試着室を出る。

「文書あ………！」

「みっつ」

にへらと笑う文書の頬つぺたを両手で摘まむ。あつ柔らかい。

「よくも人が気にしてる事を言ってくれたね！」

「ち、千切れふ……」

全力で摘まんだら比喻ではなく千切れてしまうので、勿論力加減はしてある。

ある程度頬つぺたの柔らかさを堪能した後手を離し、会計を済ませる。

少し赤くなつた頬を両手でムニムニしている文書が若干涙目になりながらも、口を開

いた。

「次は何を買いうらしいですか？ 鍋とか嵩張るものは後にしたいのですが」

「んー、そうだな……」

服や雑貨、色々買うものはあるけれども。

「ーまず、荒縄かな？」

「結構買ったね」

文書の家の前、夕日に照らされた複数の買い物袋を見下ろす。

準備が終わるまでは、今日買った物は文書に預かってもらう。服と下着は除いて。

「……初来」

「ん？」

文書の声に顔を向けると、文書はどこか不安な表情でこちらを見ていた。

「文書も、ついていきましようか？」

「大丈夫だよ」

ボクも不安だ。けれど、これはボクが越えるべき壁だ。

だから、文書の頭をそつと撫でる。

「久々の親子喧嘩、腕が鳴るつてもんだよ」

夕日が沈んでゆく。空に星が見え始めた。

ボクが雄英に通うために必要な、最後の試練が始まる。

## 心配させないで

「初来。あんたこれ、どういうこと？」

家に帰り、ただいまと言ったボクに投げ掛けられた言葉だ。

リビングでボクを待っていたのはお母さん、霧裂姉さんと水騎。テーブルの上に置かれてるのは雄英の合格通知だ。

「どういうこともなにも、無事合格したただけだよ」

「あんた、E判定だったじゃないのっ！」

不覚にも笑いそうになった。

そうだよ、10ヶ月前にE判定食らってた人間が受かるなんて普通思わないわ。だからこそ記念受験として雄英入試を受けさせて貰えたんだから。

「まさか、わざと点数低くしてE判定にしたの?!」

「そうだったらどれだけよかったか。完全に努力の賜物だよ」

言葉に詰まるお母さん。代わりに口を開いたのは霧裂姉さん。

「初来」

霧裂姉さんの静かな声には、同情と同時に我が儘を言う妹に対する怒りが込められて



いた。

「わざわざ言葉にしないとイケない？ わからない訳ないわよね、私達が反対する理由」

「わかってるよ」

「わかってない！」

響くお母さんの叫び声。

ボクを睨み付けるその目から、涙が零れる。

「お父さん、ヒーローになんてなったから殺されたのよ?!」

ボクがまだ小学生3年生の時に、お父さんは殺された。

ボクとお母さんの目の前で、殺された。

覚えてるさ、忘れる訳がない。

死ぬ直前の恐怖に吞まれたあの瞳も、それでもボク達に逃げろと言った声も、反撃の為に振り上げた拳も、足元に広がる血の海も。

血に染まった、犯人の様相も。

でも、それでもいっだつてあの姿が脳裏に浮かぶんだ。

「救いたい人が居るんだ。誰よりも強くて、優しく、皆の希望になったからこそ誰にも弱った姿を見せられない人が」

なんでだろうね、見て見ぬ振りしたって誰も責めないのに。

オールマイトだつて、知らないふりして欲しいと思つてるだろうに。

「支えたい人が居るんだ。今はまだ誰よりも弱くて、それなのに敵わないって思えてしまふ、誰よりもヒーローらしい人が」

出久君にボクがしてあげられる事なんてあるのかと思つてしまふ。オールマイトが師匠で、麗日さんのような支えてくれる人がもう既にいるのに。

それでも、ボクが力になりたいんだよ。

「なりたいんだよ、ボクが。憧れた人達の力に」

「他の誰かなんてっ！ あたしは、あんたさえ無事でいてくれたら、それだけで……っ！」

「はい、そこまで」

まるで旬の蜜柑のような甘い声が響き渡る。この耳搔きボイスのような声は……

「撮香っ！ あんたまた盗聴をつ！ ……いや、今はそこはどうでもいいわ。後で相手したげるから盗聴を切りなさい。家族の話だから」

「えー、やだ」

撮香さんは一体何故話し合いに首を突っ込んだのだろうか？

「というか、年齢考えてよ幼児か！ だだっ子か！」

「だってえ、初来ちゃんがヒーローになれるかどうかの瀬戸際なのよー？」

「だからっ！ あんたには関係ないっつってんのよ！」

「あるわよ。だって初来ちゃんは私達家族の『ヒーロー』だから」

断言する撮香さんに、ボクを含めた全員が息を呑む。

「ヒーローって……」

普段の撮香さんとの違いに動揺したのか、お母さんは二の句も告げずにいた。

「形取（かたどり）ちゃん、初来ちゃんがしてくれた事を全部話すわ。だから形取ちゃんも初来ちゃんの気持ちと向き合ってね」

撮香さんの言葉に、思わずといった様子でお母さんが頷く。

でも撮香さん、ボクが文書にやったことってただ一緒に遊んで、抱き締めながら慰めただけだよ？

しかも実は、未だに何で文書が無個性を自称してたのかわかってないし。

「子供達の前で話すようなことじゃないわ、形取ちゃんのお部屋に行きましょう」

「……ええ、わかったわ。あんた達は部屋に戻ってなさい」

疲れた顔でそう言ったお母さん。恐らく、学生時代から似たような感じだったのだろう。撮香さん言い出したら聞かなさそうだからなあ、お母さん振り回されてたんだろなあ。

「初来ちゃん、あとは撮香さんに任せておきなさい。全部ゼーんぶ解決しちゃうわよー」  
普段の感じに戻った撮香さんがボクに語りかけてきた。

「ありがとうございます撮香さん。でも、なんでここまでしてくるんですか？」

「さつきも言ったけど、初来ちゃんが私達の『ヒーロー』だからよ。……まあ、未来の義理の娘の為っていうのもあるわ」

今宵一番の甘ったるい声がリビングに響き、空気が死ぬ。

リビングから出て行った筈のお母さんが、半分だけ身体を覗かせ、ボクをジト目で睨む。

「初来、言っておくけどね、文書ちゃんとの結婚はヒーローになること以上に反対だからね？」

ボクと文書の結婚、初耳なんですが……

「……まあ、初来の気持ちもわからなくはないわ」

「霧姉ちゃん?!」

お母さんが出て行ったりリビングで、霧裂姉さんが呟いた言葉に水騎が反応する。

「霧姉ちゃんは、初姉ちゃんが死んでもいいって言うのか?!」

「そういう話じゃないわよ」

綺麗なブロンドの髪を掻き上げ、霧裂姉さんはボクを見つめる。

「できるのにやれない、っていうのはしんどいわよね」

「霧裂姉さん……」

霧裂姉さんの言葉に、ボクは答えることができない。

この家で、最も応用範囲が広いのは間違いなくボクだ。

けれども、殺傷能力に限って言えば、最強なのは間違いなく霧裂姉さんなのだ。

個性『霧散』

範囲内にある任意の水分を霧に変え、一定以上の濃度になった霧の水分子から衝撃波

を発生させる個性。

凡そバケツ一杯分の水で廃車を跡形もなく爆散させる、高威力な強個性。

霧裂姉さんは訓練を重ね、威力を対人レベルにまで落とせるようになった。そうしてヒーローを目指し……お母さんに反対されて、ヒーローを諦めた。

「力を持つと、どうしても出来ることやれることが増えるの。あの……馬鹿部長とか、一体何度霧散させてやろうと思ったことか……っ！」

「OL……ええ……」

あの優しくいつも冷静な霧裂姉さんが毒を吐く姿に、思わず言葉が震える。社会の闇を見た気分だ。

「ん、んんっ……とにかく、初来は私達なんかとは比べ物にならないくらいの強個性なんだから、やっぱりそれを振るう場所を求めちゃうよね、って話よ」

「……そうなの？ 初姉ちゃん」

涙目の水騎。ボクは正直に言う事にした。

「いや別に？」

「私の語りを無意味にするなっ。というか、今更嘘なんて吐くな」

いや、別に個性を自由に使いたいなんて思っていない……あ、いや。割りと自由に使ってるわ。それ全部規制されたらストレスマッハだわ。

「あのね、普通の人間は平和の象徴を救いたいなんて言わないし、考えることもしないのよ?。」

「なんで知ってんの?!」

文書にしか言っていないのに!

内心で叫ぶと、霧裂姉さんは呆れたのか溜め息を吐いた。

「そりゃわかるわよ、さつきお母さんにも言ってたし。それにオールマイト以外のヒーローに見向きもしないんだから、すぐにピンと来たわ」

「初姉ちゃん、オールマイトのヒーローになりたいの? 無理だろ」

「水騎?!」

思ったこと正直に言い過ぎい!

抱きついて頭をぐりぐりと擦り付けてくる水騎を抱き締め、撫でる。

水騎の髪、これマジで材質何なの? 透き通った青の髪が微妙に光を放っている。

腰まで伸びたクリアブルーは、手を通すと微かに冷たい。童宮城に居そうな感じだ。「オールマイトのヒーロー諦めて、初姉ちゃんはずっと俺の姉ちゃんやってろよ」

「! 水騎はずっとボクの妹だよ!」

可愛い事を言う水騎を愛でる。

シスコン過ぎ、と霧裂姉さんが眩くが、知ったことではない。

ボクの妹が可愛い過ぎるのが問題だ！ いや問題じゃない、真理だ！

お母さんが、リビングに戻ってきた。

目元は微かに赤い。きつと泣いたのだろう。

「初来、あたしはまだ納得してない」

「……うん」

撮香さんには悪いけど、それは予想できていた。

この短時間でお母さんの意見を変えるなんて、やっぱり無理だ。

入学手続きの期限まであと少しだけど、なんとかお母さんに自分の思いをぶつけていくつもりだ。

「……だから、ちゃんと証明して。あんたが死なないって事を」

「えっ、と？」

意味がわからず聞き返すと、お母さんはやれやれと首を振った。

「これなら死なないわ、ってあたしに思わせるくらい強くなりなさいってことよ。家族に心配されるヒーローなんてありえないから」

それって。



「いつてきな、雄英」

「えっ、いいの?!」

なんで?!

撮香さん何したんですかマジで!

ありがとうございます!!

ガッツポーズをするボクを、お母さんはきつきとは真逆の、優しい目で見つめる。

「うう、負けねーし。文書ちゃんにはぜってー負けねーし」

「水騎、あんたそれ行き過ぎてるからね?」

水騎と霧裂姉さんがリビングに入ってくる。やっぱり聞いてたのか。

二人に抱きつくと微妙な顔をされたが、それでも最後は笑っておめでとうと言ってくれた。

そんなボク達の姿に、お母さんは薄く笑って。

「文書ちゃんとの結婚も、もう反対できないわね」

リビングの時間が止まった

えっ……?!

## 幼稚園児から小学生へ

「これが……」

「うん、文書の家だよ。大きいでしょ」

「想像の10倍くらい大きいんですけど……」

目の前の大豪邸に言葉を失う出久くん。

今日は2人で文書の家に来ている。

というのも文書の家は皆研究職で成功を収めており、個性を研究する為の設備や個性を使用する為の別館があるのだ。

「撮香さんお邪魔します」

「どうぞー、緑谷君？ もいらつしやーい」

「……こんにちは！ ……今、何もないところから声が……？」

「何度か来れば慣れるよ」

出久くんを促し、門を潜る。

目の前の巨大な館を横目に奥にある、少し小さめな大きな館を目指す。

「あれ、奥なの？」

「うん、個性を測定する装置があるのは別館だけだからね」

「別館……」

「個性使用の為の、体育館みたいな感じだよ」

「たいいくかん……」

「いっぱいいっぱいな出久くんを引き連れ、文書の待つ別館へ。」

別館は二階建てで、一階が単純測定。二階が精密測定。そして地下には威力測定用の対衝撃用隔壁展開装置がある。対衝撃用隔壁展開装置って言葉ここでしか聞いたことないわ。

ドアを開けると、国外の本をバラバラと捲っていた文書と目が合う。

「こんにちは、文書」

「こんにちはです初来、それと……」

「あ、あのっ！ 初めまして、緑谷出久ですっ」

ボクに向けていた笑顔を引きつ込め、文書はじつと出久くんの顔を見つめ。

「……チツ、顔は覚えたらしいですよ」

「舌打ち?! 感じ悪っ!」

びつくりするくらい鋭い目付きで出久くんを睨み付ける文書。

「文書!」

「4億」

ボクの言葉を遮るように、指を4本立てる文書。

4億つてなんぞ。何を言えればいいのかわからず黙るボクらの前で、文書が言葉を放つ。

「ここにある設備の総額だそうです」

「……はっ?!」

初耳い!

えっ、ボク今までそんなの使わせて貰ってたのか?!

あまりの金額に小刻みに震える出久くんがボクを見る。ボクは慌てて首を振る。

知らんかったんや!

いや、確かにそういった特殊機械って高いんだろうけど、個人でそんなん保有してるのか?!

「覚えておきなさい緑谷出久。何処の馬の骨とも知らぬ貴方がここを使えるのは、他ならない初来が文書に頼み込んだからだということを」

そして、と言葉を切り、ボクの手を引く文書。

『あいき』

「ちよっ……」

自分の意思に反して自分から動いてしまう独特の感覚に反応する間もなく、ボクと文書の唇が重なる。

触れあうのは一瞬だけ。顔を離れた文書は唇をペロリと舐め、薄く笑う。

「初来は文書のものです」

「ひっ、人前でなににするだーっ！」

文書の頬っぺたを両手で挟んでぐにぐにする。

ある程度文書の頬っぺたを堪能した後で恐る恐る出久くんの様子を伺うと、やはり出久くんは呆然としていて。

暫くしてボクが見ているのに気付いたのか、小さくわかりましたと呟いて下を向いてしまった。

所変わって、運動能力測定所。まあ見た目は体育館だ。

「さっさとやってみようですよ。とりあえず緑は何ができるのかさっさと吐くですよ」

「み、ど、り、や、だつて！」

「髪型と髪色以外覚える気はないですよ」

敵意しかない文書。

……いや、仲良くしてっっていうのはボクのエゴか。最初からわかっていた事だ。

「ごめん出久くん、文書の言う通り答えて」

「う、うん……えつとね」

出久くんは正直に話した。

個性を使えるようになったのが実技試験の真っ最中だということ。

今日までイメージトレーニングメインで、個性は全く使っていないことを。

目を閉じて聞いていた文書が、聞き終えると同時に目を見開く。

「帰れ」

「待つて待つて待つて、話を聞いて文書！」

「聞いた上で判断しました。個性を満足に使えず、使えば骨折、それ故に訓練ができな

い」

文書の拳が握られる。

「ここは幼稚園ですかっ！」

叫び、一息いれてから文書は頭を搔く。

「期待してなかったのに期待を下回られるとは、心底驚かされたそうですよ緑」

「申し訳ありません」

小さくなっている出久くん。まあ、全面的に文書が正しい。

それでも、ボクらは出久くんをトップヒーローにしなくちゃならないんだ。

「文書、お願い」

「……ん、わかったそうですよ」

1つ頷いて、文書は出久くんに近付く。

「あの?」

「『ふういん』」

出久くんのお腹に添えられた文書の右手が青白く光り、出久くんの身体に移ったそれが線になって全身を駆ける。

「な、なにこれ?!」

「貴方の個性を封印しました。今は個性を全く使えない状態だそうです」

「えっ?! ほ、本当だ、使えない……」

手を握り開く出久くん。驚くよね、そりゃ。

「えつと、ふ、文書さん……?」

「誰が名前で呼んでいいと言ったそうですか?」

自己紹介してなかった気が……

目を閉じ、文書が口を開く。

「個性『文字魔法』、言葉で世界を変える個性だそうですね」

「えっ?! せ、制限とかは……?」

「何故それを貴方に話さなければいけないらしいですか?」

恐らく、出久くんの知る中でも最強の個性がポンと出てきて混乱しているのだろう、目がぐるぐるしました。

「言葉で世界を変えるそれってつまり言葉にできるなら際限なく現象を起こせる訳でいやいや個性は身体機能の1つ流石に無制限な訳がないそういえばさつき指が光ってた気が『ふういん』で指4本なら最高10文字なのかいや足の指を入れると20文字1度に見える文字数とか単語を複数使えるかとか同じ文字を複数の単語に使い回せるかとかそれならほぼ無制限じゃないかいくらなんでもそれはないかそれに文字って言ったって人それぞれ言葉に対する受け取り方は違うそれはやっぱり文書さん準拠だろういや待てよそもそも同じ言葉で違う物を指す事は当たり前にある僕も遠藤さんも同じ『ひと』だけと違う存在だつまり文字魔法の本質はイメージを文字によって制御するつまり大元はイメージ……?」

「長あーい!!!」

ビックリした、ずっとぶつぶつ喋ってるしあんまり聞き取れなかったけど。



近くで聞いていた文書は聞き取れていたのか、目を見開いていた。

その表情に先程までの険はなかった。

「驚きました、緑……いえ、緑谷でしたか。素直に感心しました」

「あ、ご、ごめんなさい！　なんか独り言癖になっちゃってるみたいで！」

「構わないそうですよ……顔も、覚えました。私の名前は伝聞文書だそうです。名前で呼んだら重力で押し潰します」

「あつ、えつと、よろしくお願いします、伝聞さん」

「……文書」

「すげえな出久くんは！　あの文書から敵意を無くさせるなんて！」

ただ残念なのは、文書の目が仲間を見る目ではなく優秀な機械設備を見る目だということだ。

「緑谷、もしヒーローになれなかったら家の研究所に来るらしいです。緑谷には研究者の才能があるそうですよ」

「ごめん、僕は最高のヒーローになるんだ」

出久の表情に、やれやれと言わんばかりに文書が薄く笑う。

「それなら早く個性くらいまともに使えるようになるそうですよ。……とりあえず、緑谷の個性の出力を10パーセントに抑えました。使ってみなさい」

一瞬だけ出久くんの身体が薄く青く光り、収まる。

出久くんが右拳を握り、身体が跳ねた。

「つく、だ、ダメだこれでもきつと骨折する……」

「10パーセントですか?! ……規格外の出力、流石初来の見初めたヒーローだそうです」

呆れたように、感心したように呟き、文書は再び構える。

左手の指が、青白く発光する。

「『かんでい』……………っ!」

「文書?!」

硬直した文書に声を掛ける。今何を使ったんだ? 4文字なのはわかるけど……

「なんでも、ないですよ初来……そうですね、大体4、いや5パーセントの出力なら反動が無視できるのがわかりました。次は初来の出番なので着替えて来てください」

「う、うん……?」

早口で捲し立てる文書に背を押され、ボクは更衣室へと向かった。

グツと、襟首を掴まれ引き寄せられる。

目の前には伝聞さんの整った顔があった。何故か怒りに満ちていたけど。

「な、何?! ごめんなさい、僕何かした……?」

伝聞さんの吐く息がか細く震える。

僕を睨み付ける目が、細められる。

「力を蓄え、譲渡する個性……『ワン・フォー・オール』ですか、大層な名前ですね」

「なんっ?!」

心臓が跳ねる。

バレた、何でバレた?!

……そうか、鑑定! 相手の情報を見る文字魔法か!

それでも、誰が渡したかまでは!

「オールマイト」

「っ!」

聞こえた言葉に思わず身体が跳ねる。しまっ……

「やっぱりですか、納得できました」

ゆつくりと、伝聞さんの手に力が籠る。

ギリギリと聞こえてきそうな程に噛み締められた歯がチラリと見えた。

「緑谷、わかつているのですか？ 緑谷に力を譲渡したということはオールマイトにはもう力が残ってないということですよ」

「ー?!」

そうだ、何で気付かなかった?! 言われてみれば当たり前の事なのに!

……いや、気付きたくなかったのか。僕がオールマイトを……平和の象徴を皆から奪ったということに。

「あの、その……僕は」

「よくも……」

僕の言い訳の言葉を遮るように、伝聞さんの言葉が囁かれる。

「よくも、初来の夢を奪ってくれましたね」

ガンツと、まるで頭を殴られたかのような衝撃が襲う。

僕は、知ってる。

あの日、僕の部屋で僕らは夢を語り合ったから。

僕が平和の象徴を受け継ぐと照れながらも言い、遠藤さんは笑ってくれて。遠藤さんも、恥ずかしそうに言ったんだ。

『ボクは、実はオールマイトのサイドキックになりたいんだ。子供の頃からの夢だった』

「お前がっ！ 泣くなっ!!」

突き飛ばされ、尻餅をつく。

涙で滲む視界に、こちらを睨み付ける伝聞さんが映る。

「お前だけは泣く権利がないんです！ わかったらさっさと走れ！」

伝聞さんが指差すのは、白線テープで作られた、恐らく50メートル走用のトラック。その向こうには、街角にあるような景観を際限した構造物。多分パルクール用の設備だ。

「その情けない顔を初来に見せるな、何かあったと悟らせるな！ それが、初来の夢を奪ったお前の、最低限の義務だっ!!」

「ムラつとしたのでちよつと胸揉んでいいですか」

帰ってくるると同時に、文書がそんな事を言い出した。

「自分のを揉んどいてよ」

「揉むほどないんですよ」

「悲しいなあ……」

悲しみに包まれながら、出久くんの姿を探す。めつちや走ってるよ。

何が出久くんを動かすのか、壁を横に連続三角飛びしている。ああ、個性がしっかりと使えるようになって嬉しいのか。

一心不乱にとび跳ね回る出久くんから目を反らし、個性を発動する。

――個性『個性創造』発動

――個性『意識操作』創造

すかさず風を操り、その風に『意識操作』を挟み込む。

――『個性連結』発動

風が渦巻き意識を反らす。渦の中心に居るボクらを、出久くんはよつぽど意識しないと視認することができない。

反動の吐き気をこらえて文書へ近寄る。

「『遮断結界』発動、これで出久くんはこつちを向かないし、見えても意識できないよ」  
「初来？ 一体何を……」

遮るように、真正面から文書を抱き締める。

「気付いてないの？ 語尾がなくなってるよ」

「あつ……あの、文書は」

頭を撫でて、それ以上は言わなくていいと止める。

「ほら、今なら揉み放題だそうですねよ？」

「……その語尾、どうかと思います」

「自分で言うのかそれを……」

ゆつくりと、ボクの胸に顔を押し付けてきた文書は、そのまま両手を背中に回してき  
た。

「初来が、緑谷に取られるかもと考えてしまつて、ちよつと気分が沈んだただけだそうです  
よ」

「そっか」

そういうことにしといてあげよう。

暫くしたら落ち着いたのか、文書は顔を離して両手をボクの胸に伸ばしてきた。ので

払う。

「TIME UP」

「えっ……」

呆然とする文書。栗みたいな口しやがって。

遮断結界を解除すると、個性『意識操作』がボクの中から失われる。

再び風を操り、出久くんを絡めとり引き寄せる。

着地するなりぐえっと潰れたカエルのような声を出した出久くん。まあまだ他人に

快適な空の旅を約束できる練度ではないからね。

親友を泣かせた罰だ、甘んじて受けて貰おう。

「さて、身体は暖まったかい出久くん」

「あ、うっ、うん！」

見たところ、今の出力ならボクは個性を使わずとも対応できる。

そろそろ対人戦も経験しておかないと。

といつてもボクも対人戦初めてなんだけどね！

「とりあえずボクが相手だ。まあ、今の出久くんならなんとかかなりそうだし、個性抜きで

やってみよう」

「えっ、いや、それは流石に無理が」



「警告してあげるです、緑谷。全力でやらないと一瞬で貴方の負けらしいですよ？」  
文書の言葉に、言葉に詰まる出久くん。

とりあえず、格好つける為にバックステップで距離を取り、口を開く。

「幼稚園児から小学生になれたくらいで他人の心配なんて、優しいね」

こんな事出久くんに言いたくはないけれど、こんなところで足踏みして貰っては困るので煽る。

「最高のヒーローに、手を抜いてなるんだ」

「……！ うわああああああつ！」

出久くんが、拳を振り上げまっすぐに駆けてくる。

そのパンチを掴んで止めた。

「なっ……」

「あ、結構強いね。10パーセントくらいになると押し負けそう」

呟き、手の力を抜く。

前につんのめる出久のお腹に、優しく膝を入れる。

後ろによるけ、呟き込む出久くんの腕を取り、極めて地面に押さえつける。

「ぐっ、げほっ」

「君は最高のヒーローになれると、ボクは本気で思ってるよ。でも今の君はこんな様だ。」

個性を使ってなお個性を使わないボクにいいように遊ばれてる」

顔を上げ、こちらを見る。その目は、驚愕と不安に揺れていた。思っていた以上に険しいこれからを身をもって理解したからこそその表情。

ボクだって不安なんだぜ？ なんてったって対人経験ゼロ。

これでいいのか、こんなやり方で強くなれるのかって思いながら。

それでも一歩ずつ進むんだ。

「一緒に乗り越えようよ、出久くん。覚悟しとけよ、ボクと文書はスパルタなんだ」

## 血の繋がりを感ずる……

「やあ！ 初めまして、だね。僕が校長の根津だよ！」

「は、はあ……初めまして」

椅子の上に立ち挨拶している巨大ネズミ……雄英高校校長の根津校長先生を、お母さんと2人して眺める。

出久くんと文書の家に行った日、家に雄英高校から電話が掛かってきた。内容はボクの入試結果について。

お母さんは何故か知っていたけど、ボクはどうやら特待生になるらしい。その説明に、教師と校長が来るとのこと。

そして本日現れたのはネズミ（校長）

予想しようのない光景に、一種の逃避を兼ねて教師の方に話しかける。

「拡細（かくさい）さん。雄英って……というか、学校の校長って、人間以外でもなれるんですね」

「まあ七不思議だね、でも皆納得してるよ。この人になら雄英を任せられるって」  
校長先生の横で座っている、眼鏡をクイツとしそうな男の人が微笑んだ。

伝聞抜細（でんぶんかくさい）さん。文書のお兄さんでプロヒーロー、雄英高校のサポーター科の教師をしている人だ。

この人が僕らの家庭の事情を鑑みて、お母さんを説得するまでこの訪問を先延ばしにしてくれたのだ。

もしこの人が動いてくれなかったら、普通にお母さんに雄英入学を蹴られていたかもしれない。

「そんな、七不思議に数えられる僕が今日やってきたのは他でもない、遠藤初来さん。君の特待生扱いについてなんだ」

「特待生……」

お母さんの眩きがかすかに聞こえた。

『特待生』、正式名称は特別待遇学生または特別待遇生徒。

成績優秀者に対して学校側が何らかの優遇措置を取る制度。

でも疑問なんだけど、ボクって成績優秀者なの？ 違うよね。主に筆記。

首を傾げていると抜細さんが資料を出してきた。実技試験の総合得点表だった。

それを見ると、実技試験でボクの次に点数が高いのは77点だ。1位だとは思ってたけれど、思ったよりも2位と開きがあるな。

「まあ簡単に言うんだ、『実技試験中、その受験生がいることでその受験会場が他受験会

場よりも難易度が上がっていると判断された場合の、その受験会場の受験生に対する救済措置」が特待生制度なんだ」

「難しい。拡細さん簡単に説明お願いします」

「君頑張りすぎ、他の受験生の実力計れないだろ」

なるほど分かった。でも普通全力でやるでしょ？

そんなボクの表情を見た拡細さんは苦笑する。

「君は間違つてないよ。けど他の受験生に対して正確な評価をしなきゃいけないのも事実だ」

「その通り！ どちらも間違つていないなら、どちらも評価すればいいのさー」

「つまり、特待生という別枠を用意して一般入試枠を空けたのか」

「そういうことさ。理解して貰えたみたいだね」

ここまでは理解できた。特待生の成り立ちとボクの置かれている状況の説明だ。

そして次は特待の部分だ。

「簡潔に言おう。君に対する優遇として我が校は『学費の免除』と『学業時間外における、書類申請による学内施設の無償貸し出し及び教員による指導』を提案する」

「……たか」

思わず口が開く。

見れば今まで黙っていたお母さんも口を開けている。

「待つて待つて待つて、ちよつと優遇しすぎじゃないですか?!」

「そ、そうですよ! 試験結果はよかつたかもしれませんが、はつきり言つてこの子変ですよ?!」

誰が変だ。

それでも、ちよつとばかり過剰すぎやしないかと思うのは当然だ。

学費の免除は、まああるかもしれない。普通の学校でもあり得る話だ。

けど2つ目はやばい。要するに書類さえ出せば放課後に学内施設を無償で自由に使える、しかもそこにプロヒーロー(雄英高校は教師全員がプロヒーローなのでそうなる)が指導に来てくれるということだ。

「まあ、落ち着いて……というのでも無理な相談か」

でも、と拈細さんは続ける。

「勿論いい話ばかりではないよ。1つ目の優遇に関しては特に制約はないけれど、2つ目の優遇を受ける場合、君には義務が課せられることになる」

「……まあ、当然ですな」

プロヒーローの時間を貰うんだ、そこは当然何か条件がつけられるに決まつてる。

「遠藤初来さん、君は我が校の校訓を知っているかい?」

「は、はい……さらに向こうへ、Plus Ultra（プルスウルトラ）……ですよ」  
 余りにも有名なその言葉を口にする、校長先生が頷いた。

「そう！ それならばもうわかるね？ 君に対する義務は当然更なる困難。具体的に言おうか。『定期試験の難易度変更』と『体育祭での上位入賞』さ！」

……普通に、納得できる話だった。そりやまあプロのヒーローとつ捕まえて指導受けておきながら他の生徒と同じ試験受けるとかありえないでしょ。

校長先生が身を引き、代わりに拵さんが身を乗り出してきた。

「初来ちゃん、君には2つ目の優遇を受けないという選択肢もある。言っておくけど雄英の教育プログラムは常軌を逸しているよ？ 去年なんて1クラス丸々除籍処分を受けたくらいだ」

「なんですかその魔窟は……」

想定していたよりやばい環境に、思わず頬が引き攣る。

もしボクが2つ目の優遇を受ければ、ただでさえ頭おかしい難易度の学生生活が限界突破する訳だ。

でも。

「受けます」

「ばっ、あんたもうちよつとよく考えて発言しなさい！ 相当やばい学校よ雄英！」

校長先生の前で相当やばい事を言うお母さんに、大丈夫と答える。

何故ならボクは知っているんだ。

春からオールマイトが教師になる事を。

つまり、オールマイトの予定さえ空いていれば指導して貰えるんだよ？ あの平和の

象徴に。

そして、うまくいけば実力を見込まれてサイドキックに抜擢される可能性もある。

「夢の為に、ここは引けないんだ！」

「困難な道を敢えて行く。なかなかのドM具合だね初来ちゃん」

「夢を掴むための敢えて、です。貴方の妹と同じにしないでください」

お母さんと校長先生が話を詰めている間に、ボクはリビングのソファに座って拵細さんと雑談をしていた。

文書曰く『主人公顔』な拵細さんは、眼鏡を外すと何故かボクの頭を撫でてきた。なんと？

「妹と仲良くしてくれてるみたいで嬉しいよ、僕らの『ヒーロー』」

「なんかむず痒いのでそれやめて貰えませんか？」



どう考えても過大評価だ。一緒に遊んで抱きしめて慰めただけでヒーローになれるもんか！

嫌がるボクの顔を見て笑うと、拓細さんは顔を近づけてきた。

「ふへ、なんっ」

「初来ちゃん、個性のことで僕に何か隠してるでしょ」

のけぞるボクの顔を、普段の翠とは違う、緋色の瞳が映す。

やば、個性使われてる！

観察されている感覚に背筋が震えるのを無理やり抑え、笑顔を作る。

「なんのことかな？」

「僕の個性相手に無駄な事をしちやつて。試験の時、急に出力上がったでしょ。2回も」

あかん、完全にバレてる。

引き攣った頬に汗が一筋流れる。

個性『拓視細察』

拓細さんの名前が入ったこの個性は、簡単に言うところ『拡大し観察する』個性。

人間は視界に入った情報を全て認識している訳ではない。要る情報と要らない情報を脳が選別するのだ。

拓細さんの個性は、その脳の取捨選択によって弾かれた『人間が本来手にすることの

ない視覚情報』を受け取り、拡細さんの望む情報を脳に送るのだ。簡潔に言おう。

個性であれなんであれ拡細さんの興味を引いたものは、視覚的に丸裸にされるのだ。嘘なんて以ての外。おそらく今ボクが言い訳を考えているのもバレてるし、もしかしたら黙っているのが文書の指示によるものだということすらも知られているかもしれない。

拡細さんから逃れるには目を潰すか興味を失って貰うしかない。

「いや、ですね。プルスウルトラ的な？」

「まあ、なんとなくわかってたけどね」

「……な、何が」

「君の個性、自称してるのとは違うでしょ？」

「……」

もう、これはどうしようもないわ。

わかってたつて言うくらいだ、もう既に言い逃れなんて出来ないほどに理解されているのだろう。

諦めて味方に引き入れるのが得策だろうなあ。つて考えてるのもバレてるんだろ  
うなあ。

「拈細さん、あのですね……」

「あ、いいよ別に言わなくても」

……えっ？

急に展開が変わって頭が追い付かない。

間抜けな顔をしていたんだろう。ボクの顔を見て拈細さんは苦笑した。

「あんまり迂闊なことはするなよって言いたかっただけさ。僕がわかつたんだ、他の誰かが偶然知ってしまう可能性もある」

「僕が、て」

主人公にしたら物語が成り立たなくなるくらいの推理力を見せた貴方以上の人間が居てたまるか。

でも、拈細さんの言葉を胸に刻む。

そうだ、ボクの個性創造は、決してバレてはいけない個性なんだ。

だから、迂闊な行動を控えて行使の際は細心の注意を払って。

そしてバレたらきちんと記憶操作しよう。

「おっとあつちはもう終わったみたいだね」

ボクの殺気を感じ取ったのか、元の瞳の色に戻った拈細さんは早口でそう言つて立ち上がる。

チツ……まあ、記憶操作なんてできないので冗談ではあつたのだが。

背中を向けた拈細さんから視線を外し、こちらを見ている校長先生とお母さんに視線を向ける。

「あ、言い忘れていたけど。君のヒーローコスチュームは僕が作成担当することになつたからね」

「……は？」

えつ、マジで？

ヒーローコスチュームを着た人間にしか欲情できないこの人に、ボクのコスチュームを作つてもらふの？

『しか』ではないよ。より興奮するつてだけさ」

緋の瞳でボクを見てドヤ顔をする拈細さん。

「チェンジで」

「もう作っちゃったんだよね、滾つた」

「あああ……」

どんな変態服を着せられるのか。  
そんな恐怖に震えながら、ボクは帰る2人を見送ることになった。

――個性『個性創造』発動

――個性『光線操作』創造

自室でベッドに腰掛けながら、個性を創造する。

風を操り、目の前に風の渦を作り出し、そこに今創った光線操作を挟み込む。

――『個性連結』発動

鑑定の個性が告げると同時に、風の渦が色付きその規模を増す。

緑に、赤に、青に、紫に。

次々と色を変え、反動がきつくなってきたところで風の渦を解く。

「やっぱこれ、ちゃんと技能として成り立ってるよね……」

頭痛と吐き気に項垂れながら、思い返すのは実技試験のこと。

出久くんを助けようとした時と、ポイントを取れていない出久くんの為に仮想敵を探知し運搬した時。

どちらも、個性を混ぜ合わせた瞬間に威力と精度が跳ね上がった。

適応個性に創造した個性を混ぜて強化する。恐らく、これが個性創造の本当の使い方だ。

実技試験から今日までいろいろと試してわかったのは、3つ。

1つ目は、創造した個性は、適応個性と混ぜることで『適応個性に性質を付与する形で』しっかりと発現させることができるということ。

2つ目は、適応個性同士は混ぜ合わせることができるとは、適応していない個性同士を混ぜ合わせることはできないということ。

3つ目は、『個性連結』させると、威力、範囲、精度が跳ね上がるということ。因みに反動も跳ね上がる。

「使い勝手は、良くなった。反動に目を瞑ればだけど」

ズキズキと痛む頭と、まるでシュールストレミングを胃の中にぶちこまれたような強烈な吐き気が気分を滅入らせる。

少しの『個性連結』でこれだ、3つ以上混ぜたらどうなるかなんて怖くて試す気にもなれん。

後ろに倒れ込み、目を閉じる。

思い出すのはさっきの拡細さんの言葉。

迂闊な行動は控えろという言葉の意味をよく考えて、個性創造という個性の恐ろしさ

を。そしてどれだけ僕が能天気だったかを理解した。

個性は普通1人1つだ。複合個性などもあるが、複合された状態で1つの個性になっているから同じ話だろう。

対してボクは、制限があるとはいえいくらでも個性を創り出せる。

それは、他の人から見たら、神の所業と捉えられてもおかしくはないだろう。

そして、神として祭り上げられてしまったら。

オールマイトのサイドキックになんて、なれなくなる。

「ボクは、馬鹿か……」

自分の行動がサイドキックになるという夢に影響を及ぼすかもしれないなんて、1度も考えたことがなかった。

そうだ、咄嗟にでも『個性連結』を使ってしまうえば、夢を絶たれることになる可能性は十分にあるんだ。

流石に今までの行動でボクの個性が自称と違うと気付けるのは拡細さんくらいだろう。

それでも、例えば火を起こす個性を『個性連結』させてしまったら、誰だっておかしと気付く。

ボクの主力武器は風だ。使い勝手もいいし威力も高い。大体なんでもやれてしまう。

それを主軸に、鑑定で相手の弱点を暴き、身体操作で体を強化して接近戦を挑む。おそらくこれがボクの戦闘スタイルとして最適。

『個性連結』は、風に混ぜても違和感がない物にしないといけない……」  
身体を起こし、ふと思いつき鑑定を発動させる。

元々視界に表示されていた枠の中に、開きかけの傘のような表示が現れる。

ボクの視界に今映っているのは自分の部屋だ。

当然私物が置いてあるし、生活用品類もそこそこ整頓された状態である。

それら全てに傘表示が出ていた。

器用なことに、近くにあるものに対する傘表示は大きくなり、逆に遠くのものに対する傘表示は小さくなる。

それらが、無駄にボクの空間把握能力を刺激してくる。

「奥行きが邪魔だなあ……」

表示の邪魔さ加減もそうだけど、発動する度に対象の傘表示に意識を向けて鑑定を行うというのも凄まじく面倒だ。

第二の主力個性の、地味に使いづらい、痒いところに手が届かない性質に少し辟易してしまおう。

だから、思わず呟いてしまうのも仕方なかったんだ。



「ああ、もうちよい直感的な操作性能だったらよかったのに」  
そうして、身体が変質する。

――『個性操作』発動

――個性『鑑定』に対し干渉開始

唐突に湧き上がる凄まじい不快感と嫌悪感が思考を乱す。

床に膝をつき口を押えるボクの脳に、情報が叩き込まれる。

――個性干渉終了

――適応個性『鑑定』が適応個性『情報操作』へと変化

(知ら、ない……ボクは、『個性操作』なんて個性創ってない……っ！)

今まで思いつきもしなかった個性が自分の中に存在していた恐怖と、個性の反動で、ボクはただ蹲って震えることしかできなかった。

## 実技試験総合1位 v s ヒーロー科試験総合1位

個性『個性操作』

創った覚えのない個性。

その個性により『鑑定』の個性が『情報操作』へと変化した。

その時のボクの気持ちが変わらない人は想像して欲しい。

男の人なら、もし朝起きると同じベッドでモデルか？ という位キレイな人が裸で眠っていたら。

女の人なら、朝起きると自分好きなイケメンに腕枕されていたとしたら。

まず怖いだろ。誰？ って思うだろう。

そしてやったぜ！ と思うだろう。ボクもそうだ。

まず、そもそも『身体操作』の個性も創った覚えないしね！ それを使っておいて『個性操作』はダメってどういう話だ。

多分寝ぼけて創ったんだろうと納得し、今日は文書&出久くんと遊びに出かけることにする。

一昨日の文書の家で修行した時から出久くんの態度がおかしい。ボクに対して妙に

おどおどしているというか……

文書となにかあったのは知っている。けれど切り替えて貰わないと、ただでさえ出遅れているんだ。

というわけで。

「いーずーくくんっ！ あっそびつましょっ！」

「えっ、な、何……遠藤さんと伝聞さん!? なんで部屋に!？」

「サプライズさー！」

事前に今日は一日家にいることを聞いていたので、文書と2人で緑谷家に遊びに来た。

引子さんだけには連絡を入れておいたので、出久くんにとっては完全にサプライズだ。

引子さんはボクと入れ替わりで出かけるらしく、何故かいい笑顔をされた。その後で文書がいるのを見て心臓が止まりそうな顔をしてたけど何だったんだ一体……

「……本当に、オールマイイトグッズだらけですね」

「ひゃあー！ み、見せられる部屋じゃないから！ ちょっと待ってて！」

おっ、エロ本かな？ 大丈夫文書の部屋で散々見てるから気にしないよ？ ボクそも

そも元男だし。

とは言えないので、文書とリビングで待つ。

暫くしてリビングへやってきた出久くん。無地に『もるもつと』とだけ書かれたTシャツを着ていた、ダサいのはモテないからそのTシャツやめといたほうがいいよ？

「どうしたの、今日はいきなり……」

困った顔でそう切り出す出久くん。

まどろっこしいことは嫌いなので単刀直入に言う。

「出久くん、文書と何かあったでしょ」

固まる二人。ボクは続ける。

「ぶっちゃけ、どちらが正しいとか間違ってるとかボクにはわかりません。どうでもいいです」

「どうでもいい……」

「でも、出久くんは最高のヒーローになるんでしょう？」

「ーっ！」

ん？ なんか変なりアクションだな。まあいいか。

「その為には文書の手助けが絶対に必要です。つまり二人は仲直りしないといけません」

「……それは、ボクが」

「緑谷」

出久くんの言葉を止める文書。

仲良くしろってば。文書も出久くんを認めてるんだろ？

「という訳で、今日は遊びます！ 遊んでたら勝手に仲直りできるでしょ！」

「小学生並み……」

「あはは……でも、うん。そうだね」

出久くんは一度目を閉じると、文書に向き直った。

「僕は、最高のヒーローになるよ。なれるって、言つて貰えたから」

「それが、緑谷の義務ですか？」

「義務だけど、義務だけじゃないよ。信じてくれた人の期待に応えたいんだ」

「……わかりました、文書は緑谷を手伝いますよ。それが初来の為になるらしいですから」

互いに薄く笑いあう二人。なんかいいな、通じ合ってるみたいで。

なんか仲間外れ感を感じる。

「ねえねえ文書」

「なんですか？」

「3行で」

「仲直り

したらしいですよ？

解散」

「そっか！　じゃあ遊びに行こう！」

遊びに行くことになりました。

住宅街の道に行く。目指す先は駅のそばにあるカラオケ。

その途中で、ふと気になったので尋ねる。

「面白いや出久くん、個性の制御はどうなってるの？」

流石に毎日文書の家にお邪魔するのも悪いので、課題が見つかったら文書の家で対策を考える、というやり方にした。

なので昨日は出久くんの成長具合を見ていないのだ。

「やっぱりキツイよこれ」

右腕を上げる出久くん。

見た目は変わっていないけれど、今も個性を発動させているのだろう。

「維持するだけで集中力の大半を持っていかれるよ。こんな状態じゃまともに動けな

い」

「言っておきますけど、制御は文書の個性がやっているそうです。文書の個性なしだともっときついらしいです」

「まあ、今は個性を使うという感覚に慣れるのが先だね」

千里の道も一歩から。明日からは個性を発動させた状態でタコ殴りにする予定なので、今日中に1里くらいは進んで欲しいところである。

と、急に出久くんが立ち止まった。

その視線の先には……金髪の、爆発頭の男の子がいた。

目を見開き出久くとボクらを見て慄いているけど……知り合い？

「かつちゃん……」

「……どーいうことだ」

目つきが鋭く、顔が凶悪になっていく金髪。

「道端の石つコロが、俺よりモテていい筈がねえ」

「はっ?」

何言ってるんだこいつ。

けれど何故か出久くんは身体を縮こまらせ震えている。なんで？

「てめえみてーなクソナードが、俺よりモテるワケがねえ! どんな手を使いやがった

デクてめえー!!」

爆発音と共にこちらへ……出久くんへ飛び掛かってきた金髪。

危ないので出久くんと文書を抱えて、石塀に飛び乗る。

「出会うなり飛び掛かってくるって、君なんなのホモなの?」

「誰がホモだ気色ワリイこと言うなクソ垂れ目!」

クソ垂れ目……

びつくりするくらい口が悪いこの金髪をどうするか一瞬考える。

ぶちのめそうか。いや、でも出久くんの知り合い? みたいだし、とりあえずは穏便に。

石塀から飛び降り、2人を離してから金髪に話しかける。

「とりあえず、自己紹介から始めない? 何か言いたいことがあるみたいだけど、名前くらいは」

「あ、あ、? 誰がクソモブの名前なんで覚えるか死ね!」

……へえ。

頬が引き攣る。

さつきから出久くんをクソナードとかデクとか呼ぶのも含めて、コイツ嫌いだ。

こういうった粗暴なのが1番嫌いな文書も、目に嫌悪感を滲ませている。



「猿がキーキーと煩いですね。不愉快なのでさっさと行きましょう」

「……出久くん、行こう」

面倒は避けて通るに限る。

そう言つて出久くんの手を引く。けれど出久くんはそれを拒んだ。

「ごめん、遠藤さん。ちよつとだけ話をしたいんだ」

そう言つて金髪に向き直る出久くんの目は……いつもと違つた、なんとというか『男の子!』みたいな感じだった。

……ボクにはさっぱりわからないけれど、出久くんにとってはこの金髪は張り合いたいと思える存在らしい。

対峙する2人の間の空気が張り詰める。

互いに握られた拳、言葉を探していた出久くんが一步を踏み出す。

「かつちゃん、僕は最高のヒーローになるよ」

「寝ボケんな。現実逃避して努力もしてなかったためえがヒーローになるだあ? 誰がそんなヒーローを認めるかよ!」

「そうだよ、僕は諦めてた! 諦めて、諦めていないフリをしてただけなんだ!」

出久くんの絶叫が、耳に刺さる。

自分の汚点を吐き出すのはどれほど辛いだろうか。ましてやそれを突き付けたのが、

幼馴染だというのならなおさらだ。

それでも。

出久くんの目は、そんな自分を悔いてはいても恥じてはいなかった。

「それでも認めて貰えたんだ、背中を押して貰えたんだ！ 『君は最高のヒーローになれる』って！ その期待に応えたいんだ！」

「無個性の雑魚が！ ちょっと身体を鍛えたくらいで、たまたま雄英に合格できたくらいで！ 俺と同じ土俵に立てたつもりか!？」

吐き出された言葉は、敵意があつて。それでも何故か悪意はなかった。

2人の関係は、きつと幼馴染という言葉だけでは言い表せないのだろう。

腕を伸ばせば互いの身体に触れる、そんな距離で2人は自分をぶつけ合っていた。

「立つよ！ 最高のヒーローになるために、君を超える！」

「俺を超えられるのは俺だけだ！ 何もできねえてめえが、俺を見下すな!!」

言葉が響き、消えて日中の静寂が戻る。近所迷惑極まりないぶつかり合いが一瞬だけ途切れた。

「はいはい、二人ともちよつとかつこよかつたけど、少し訂正ねー」

その隙に、ちよつと通りますよという感じで2人の間に入る。

氣勢を削がれて力の抜けた金髪くんに話しかける。

「勘違いしてるっばいけど、出久くんは無個性じゃないよ?」

「は? 何言ってるんだ、デクは」

「無個性の人間が、実技試験で大型敵をぶん殴って大破させるなんてできないでしょ?」

ボクがしつかりこの目で見たよ、と言う。

すると金髪くんは凄い動揺した。

……まあ、無個性だと思ってるらいつの間にか個性を発現してた、なんて言われてもすぐには受け入れられないか? いやそれでも、否定的な感じの方が大きいリアクションだな。

「んな、馬鹿なことが……俺は、ガキの頃からコイツを知ってる! コイツが無個性なこともー!」

「いや、幼馴染なら出久くんが無個性じゃなくなったことを喜ぼうよ。証拠ならあるよ、出久くん」

論より証拠、と出久くんに脚力強化して垂直飛びしてもらおう。

ぴよん、と擬音の付きそうなジャンプで5メートルほど飛び上がる出久くん。流石にこれで無個性だとは言い張れないだろう。

出久くんの個性行使に言葉を失う金髪くん。

彷徨させた視線が出久くんを捉え、ぽつりと言葉が零れ落ちた。

「デク。てめえ、俺に嘘ついてたのか」

「ち、ちがつ」

「無個性だつて嘘ついて、裏で俺を笑ってたのか」

「待って、聞いてかつちや」

「俺を！ 見下してたのかデクっ！」

「やめい」

手刀を頭に叩きつけ金髪くんを地面に沈める。ややあつて起き上がってきた金髪くんは、頭を押さえてボクを睨みつける。

「何、しゃがんだこのクソ馬鹿力……」

「いや、君敵意が先走りしすぎて頓珍漢な事言ってるからさ」

「あ、!？」

その一々威嚇するのやめて。

嘆息し、手を振る。

宙に白い線が引かれ、それに追従するように風が巻き起こる。『個性操作』で色々と適応個性を弄ってみた結果、この形に落ち着いた。

いやー面白いね『個性操作』。地味に限定強化したら『個性強化』<sup>ブースト</sup>できるし。そろそろ自分の個性なのに手に負えない感が出てきたよ。

「あのね、出久くんにも個性は発現されてたんだよ。ただ発動条件がわからなかっただけ」

3人がボクの言葉にポカンと口を開ける。あれ、変なこと言っていない、よね？  
「何を、根拠に……」

金髪くんの言葉に答えずに、宙に引かれた白線を手の平に集めて渦を描く。

勢力を増した風は金髪くんの周辺にまで流れを拡大させていた。

「てめえ、それは」

「ボクの個性。風に干渉する為には、まずボク自身が風を起こす必要がある。そうしなければ風を操れないんだよ」

線を消し、散った風が木々を揺らす。

それが収まったと同時に口を開く。

「個性、それも発動型は特に、条件っていうのが設定されているんだって。出久くん、身

体を鍛えたから個性の条件を満たしたんじゃないかな？ 例えば『一定以上の筋肉量を持った時身体を強化することができる』個性とか」

当たり前だ。どうにかして『発動させるから』こそその発動型、発動条件がないなら常時発動型になってしまう。

第一、そういった理屈を抜いても、出久くんの性格からして裏で人を笑うっていうのはないだろう。

「そもそも、無個性の烙印を押されながら、君を裏で笑う為だけに個性を隠すとかどんな長期プランだよ国債か。手取り早く個性鍛えて真正面から見下す方がお手軽でしょ」  
「そらそうだ、と金髪くんは目を見開いた。敵意が大きいところも視野が狭まるのか。とりあえず誤解は解けたようで何よりだ。」

出久くんも金髪くんも、互いに意識しあっているのが、正しい方向に向けばいいなと思う。

「まあ仕方ないよね、金髪くんはヒーローになれなさそうだし。出久くんを怖がるのもわかるよ」

けど、それと出久くんを馬鹿にした事とは話が別だよね？

「え、遠藤さん……？」

「……は？」

急に喧嘩を売られた金髪くんはまず呆然とし、出久くんは意味がわからずただ狼狽えていた。

「さつきから何？ 幼馴染なんだろうけど、それにしたって最低限の礼節つてもんは必要でしょ」

「……なんなんだてめえは、さつきから訳わかんねえことをごちやごちやとー」  
「尊敬する人を貶められたら、誰だって腹が立つって話だよ」

デクは木偶、ナードはまあ普通に見下される存在に対する呼称だし。

出久くんは誰かを救ける為に動ける……いや、動いてしまう人だ。

確かに個性を使えなかったかもしれない。

確かに英雄に入るための適切な努力を1年前まではしていなかったかもしれない。

だけど、人の為を思える人を馬鹿にするようなヤツが、ヒーローになんてなれるもんか。

「……はっ、デクを尊敬するだあ？ 例え個性を使えようが、こいつはただの木偶！ 低

次元同士で傷の舐め合いなんざ反吐が出るわ！」

「かつちゃん！ 遠藤さんは低次元なんかじゃー」

「言ったね？」

感情のない声が聞こえた。なんて感想を抱いてしまうほどに、自分の声には何も込められていなかった。

視界の端で頭を押さえる文書が見えた。

「文書、別館貸して」

「……あのですね初来、初来に手加減なしでやられると家が」

「文書」

「……手加減できるなら、貸します」

「ありがとう」

目線は金髪から離さない。

出久くんはなんとか止めようとボクと金髪の間を行ったり来たりしてる、けど止まる訳がない。どっちも。

『誰かを思う心はヒーローの原点』。オールマイトの言葉だよ」

あの時の言葉は胸に残っている。



今のヒーロー制度が出来る前、ヴィジランテと呼ばれるヒーローの前身とヴィランと呼ばれる犯罪者を分けたのは正義の心の有無。

それは、今でも忘れてはいけないものハズだ。

「ちげえよ、力だ。ヒーローに必要なのは誰にも負けない力だ！」

だから、目の前でそう言い放つ金髪を認める訳にはいかない。

認めてしまったら、ヒーローがヒーローである必要がなくなってしまう。

「なら敵でも問題ないワケだ。力さえあれば、なんて如何にも敵の言いそうな言葉だね」

「……わかった、てめえブツ殺されてえんだな」

「やってみなよ。君に勝って、出久くんが低次元なんかじゃないって証明するよ」

「2人ともやめろって！」

睨み合うボクたち。互いが否定しあっているんだ、どちらかが明確に負けるまでどちらも引かない。

拳を固く握りしめる。

ぶん殴って、出久くんにごめんなさいさせる！

「馬鹿、な……こんなことが、こんなに差が、あるわけねえ！」

金髪くんの震える声が耳に届く。

再び繰り返されるがむしやらの特攻。あまりに稚拙なそれを、ボクは余裕を持って避ける。

拳が空を切り、カウンターの蹴りが突き刺さった。

地面を転がり、受け身を取って立ち上がるその目に浮かぶのは驚愕だった。

「キミの攻撃、単調すぎるよ。もう見切った」

ボクの言葉に、歯を食いしばる金髪くん。

金髪くんに余裕なんてもうない。残機はあと1。つまりあと1回場外へ吹っ飛ばせばボクの勝ちだ。

だというのに、金髪くんに諦める雰囲気はない。

「ねえ、なんで諦めないの？ もう誰の目から見ても勝敗は明らかだよ」

早々に残機が無くなり観戦モードの文書と出久くんが見守る中、金髪くんは口を開く。

「俺はオールマイトをも超える男だからだ」

理屈になってない言葉と共に金髪くんの操作するキャラクターが駆ける。

ダッシュからのA攻撃、繰り出される拳にこちらも横A攻撃を合わせる。

相殺。互いの攻撃がキャンセルされ、動きが止まる。

互いに条件は同じでも、それを意図しているかしていないかの差は大きかった。すぐさまダッシュし距離を詰めるボクのキャラクターに対して金髪くんが選んだのはA攻撃での迎撃。

出が早いそれは迎撃に最適で、だからこそ読みやすい。

回避の無敵時間を利用し、後ろに回り込んでからの後ろ投げ。

追撃の空中横A攻撃でステージ外に蹴り飛ばす。

「俺は！ 負けねえっ！」

復帰の為の空中B。滞空時間と横の移動距離に優れるからこそ、その手は読めた。

先回りして頭上を取り、下A攻撃。

俗に言うメテオ。当たれば確実に相手を落とせるそれを叩き込む！

「ボクの！ 勝ちだっ！」

抵抗する間も与えられず落ちていくキャラクターを見て、敗北を察したのだろう。

金髪くんはゆつくりとコントローラーを下ろし、目を閉じて天井を仰ぎ見るようにして口を開く。

「仲良しか！」

びつくりするぐらい素晴らしいノリツツコミをして、金髪くんは出久くんに詰め寄る。

「おいデクなんなんだこの女あ！ 完全に戦う流れだったろおが！ なんで！ 俺は！ 仲良くゲームやってんだ！」

「あはは、僕もちよつと展開についていけなかったよ」

スマッシュユファイターズ16。略してスマファイ16。

個性が現れる前から人々に愛されるゲームタイトル。

文書の家にお邪魔したボクたちは、プロジェクトを用意して別館でスマファイで遊んでいた。

「なあクソ垂れ目、てめえ俺に勝つて言ったよな！ 勝つてこのクソナードが低次元じゃないって証明するつったよな!」

相変わらずキレまくりな金髪くん。

その視線を真正面から受け止め、ボクは口を開く。

「知ってるかい、人間の怒りのピークって6秒しか持たないんだよ」

「10分くらい持たせろや！」

いやね、ボクも最初は怒ってたんだ。けれど文書の家に来るまで10分も時間がかったんだ。

ぶっちゃけ言うとな怒り続けるのしんどいです。

「大体、戦ってボクが勝って、それで君は出久くんを認める？」

「俺が勝つに決まってるだろ死ね！」

ね？ 無駄でしょ？

まあでも、ボクも模擬戦はやるつもりだ。

でもそれは互いの力量を量り合う為であって、決して怒りに任せて相手を屈服させる為ではない。

そもそも力で解決とか、性に合わない。

「力をぶつけ合うのはいいけど、怒りをぶつけ合うのは違うでしょ。いい感じに力抜けてきたし、そろそろ模擬戦しようか！ あ、怪我には気を付けましょう！」

「自由か！ ……ダメだこいつ、俺の苦手なタイプだ」

がっくりと肩を落とす金髪くん。小声で呟いたのもしつかりと風を拾って聞いているからね？

風を操ってゲーム機やらプロジェクターやらを片付ける。10秒もしないうちに終わり、距離を取って笑いかける。

「さ、やろうか」

「ああ、さっさとこのクソくだらねえ茶番を終わらせて帰って寝る」

「やれるもんなら」

片手を振る。ボクだけにしか見えない線が宙に描かれる。

風は空気の流れ、空気は見えない。つまりボクの攻撃は不可視。

空気の矢が金髪くんに突き刺さる。

「ぐっ……なんだこのクソ威力、舐めプかてめえ！」

「怪我には気を付けるようになって言ったでしょ」

怒声を受け流し、風矢を2射。命中。

追撃に5射を射かける。

「舐めんなクソがつー！」

怒りの声と爆発音が混ざり合い、視界が赤に染まる。

爆発の個性か……

「くっ……適当に爆発させても迎撃成功するんかい」

威力は高い。ボクが射掛けた風矢は一撃で消滅した。勿論威力は抑えてあったけど、

この爆発の威力じや抑えてなくても一緒だっただろう。

だから、やり方を変える。

風矢をボクに撃ち込んだ。

「はっ？」

威力を抑え、貫通力を極限まで高めた風矢がボクの身体を前へ移動させる。目の前には、爆発を推進力にしてこちらへ飛んできた金髪くんの呆けた顔。

そりやそうだ、ノーモーションでの高速移動は、来るとわかつていなければ認識することができない。何故なら人の動きには事前の動作があるという『常識の縛り』があるからだ。

ボクはほら、風の動きがわかるし、ね？

「ほら、実戦ならこれで終わってるよ？」

拳を金髪くんの頬に当てる。

ぺちん、と間抜けな音が耳に届き、そこでようやく事態を把握した金髪くんが仰け反るようにして後退した。

「あ、大丈夫だよ、今のでボクの勝ちだなんて言わないから」

実際、初見殺しの技術で相手の力を量れるかといわれるとNOだ。

でも、君は納得しないだろ？ してやられたのは事実だから。

だから、そこを突く。

「当たり前だよねなんてつたつて模擬戦なんだから。実力を出す前に終わらせる訳ないでしょ」

歯茎を剥き出しにして、一片の悪意すらもない笑顔を金髪くんの網膜に焼き付ける。

喋るたびにカチカチと打ち鳴らされる耳障りな歯の音に、金髪くんの顔から強張りが取れていった。

「で、聞きたいんだけど、ボクって低次元かな？ いやーさっき言われて、ちよつと心配になつてて」

「……ろす」

「ろす？ ……まあいいや。でもちよつと安心かな、今のでボクは低次元じゃないって分かつたし」

完全な無表情になった金髪くんに、目をギョロつかせて一心不乱の笑みをお見舞いする。

「来いよオチ担当の三下。手加減してあげるから全力で掛かつて来い！」

「ブツツツコロスツアアアアツツツ!!!」

凄まじい爆発音と共に爆発オチ担当が宙を舞う。

迎撃の為に風を纏わせ、叫ぶ。



「初来ちゃんの勇気が世界を救うと信じて！ 完！」

「……凄い」

目の前で行われる戦闘に、僕はただ一言呟く事すら憚られるほどに見入ってしまった。

かっちゃん。僕の幼馴染。

僕を虐めてくる嫌な奴で、それでも憧れてしまう程に凄い奴。

そう思ってた。

「これが、かっちゃんの本気……」

でも、そんな僕の憧れすら軽々超えてしまうほどに、今のかっちゃんは凄かった。

爆破による高速移動。宙を翔けることすら可能なその個性は、衝撃で飛ぶという性質上、軌道変化の負担が大きい。

その筈なのに、凄まじい速度で描くその軌道はまるで刀の切り返しのような鋭さで。

どれだけのGが掛かっているのか、想像すらできない。

呆れるほどの身体能力、呆れるほどのタフネス。

そして、そんなかっちゃんでも未だに捉え切れていない遠藤さん。

僕を認めてくれた人。僕の背中を押してくれた人。

僕が憧れた人も、容易に僕の憧れを超えていた。

風を操り宙を舞う、その軌道はかっちゃんに比べて速さは劣る。

だけど、制御能力が秀でていなのか、それとも単純に戦闘センスが高いのか。

唐突に反転して攻撃を仕掛けたり、かと思えばフェイントでかっちゃんの後ろに駆け抜けては風の弾丸を放ったり。

最初の、瞬間移動かと思ふほどの動きもそうだけど、『相手の意図を外して自分の有利を作り出す』のが抜群にうまい。

(こんな人たちを、超えるのか……?)

全然違う。個性を使い慣れているとかいないとか、そうじゃなくて『根本的な部分』から僕と違ってる。

考え方からして僕とは違う場所にあの2人はいる。

「一体何が違うんだ個性でできることが多いとかそういう問題じゃなくて捉え方が違う自分の個性に対する理解と戦闘スタイルの確定でもあれほど多彩な動きはできないだろうそもそも2人とも思考を早くする個性じゃないのだからあの反射速度は明らかにおかしい」

思考が沈む、それでも目は2人の戦闘を追っている。

「相手の行動の予測とそれの対応にプラスして個性の使用なんていくらなんでも人間の脳じゃ不可能なはずだ考える考える実際2人ともできてるんだ絶対に何かあるはずなんだ」

沈む、沈む。

今までずっとノートに纏めてきたヒーロー考察。

個性がない代わりに、観察だけは誰よりもしてきた自負がある。

だから、見つけられるはずだ。気付くだけで次のステージへ進める何かを。

僕は、追い付かないといけないんだ、立ち止まっていられないんだ！

「緑谷、簡単なことらしいですよ」

伝聞さんの声が、耳に届いた。

じつと2人を……いや、遠藤さんを見つめながら、僕に言葉を投げかける。

「緑谷は特殊な事情がありますが、そもそも個性は『生まれ持っているもの』です。緑谷だって今は同じだそうです」

そうだ、2人は個性を生まれた時から持っていて、僕は受け継いだ。考え方に違いがあるのならそれが原因だ。

「個性は当たり前にあるもの……違い……個性を使って……自分の望む結果を……」

ふと、遠藤さんの姿が浮かんだ。

ゲームを風を操って片付ける姿と、今の風を纏って宙を翔ける姿。

「……そうか!」

どうしても、僕の根底には『個性を使う』という考えがあった。

それはきつと僕が個性を持っていなかったからで、あと加えるならオールマイトの雄姿が常に頭にあつたというのも原因の一つだろう。

だけど、個性はあつて当たり前前のものだ。何も考えずに使えて当たり前前のものだ。

殴る為だけに使うんじゃないくて、走る為に、跳ぶ為に、蹴る為に。

結果を得るために、行動に加えるのが個性だ。

そして、オールマイトと同じくらい心に焼き付けられた遠藤さんの姿が、また僕の背を押してくれた。

風で自分の身体を吹き飛ばすんじゃないやなく、風を使い続けて身体を逐次制御するその姿は、まさしく僕が進むべき未来の姿だった。

「相手の動きを予測しながら動いて個性を使う、そんなのは到底無理だ。なら最初から使いつばなしにしておけばいいんだ」

実技試験の時、僕が『ワン・フォー・オール』を使用した時のイメージは、電子レンジでチンして爆発した卵。

小さな頃にやらかしたのが今も頭に残っている事に思わず笑ってしまう。

「掴めましたか？」

「うん、遠藤さんのおかげだ」

何か言いたげな雰囲気の間、伝聞さんを意識から外し、個性『ワン・フォー・オール』に集中する。

電気が全身を巡るイメージに引きずられて、『ワン・フォー・オール』が起動する。

電子レンジで温めるように、全身に万遍なく熱が広がるイメージ。地味だけど、ユニークだとオールマイイトに言って貰えたんだ！

「全身常時身体許容上限……！」

『ワン・フォー・オール フルカウル』

全身に力が漲る。

伝聞さんの補助があるからか、なんとかギリギリ制御できるレベルだ。

軋みを上げる全身に鞭を打ち、顔を上げると、かつちやんと遠藤さんが地面に倒れ伏していた。

目の前の光景がもたらす衝撃にフルカウルが解けた。

「2人ともいい加減にするらしいです。熱くなりすぎて手加減しきれてなかったそうですよ?」

「で、伝聞さん、2人に何を……」

『『かじゅう』で重力を5倍にしました』

「5G……」

簡単に言うのと、ジェットコースターの最高速度で掛かる加重が今2人にかけているのだ。

(もしかして、1番強いのもって伝聞さん……?)

倒れ伏したまま動こうともがいている2人を見て、僕は恐怖で動けずにいた。

呆れたように息を吐いて、伝聞さんは僕へと顔を向けた。

「あの話ですが、今晚でいいですか?」

「……えっ、あ、うん」

視界の端で、2人が起き上がるのが見えても、僕は動けなかった。

現状が変わる節目を前に、身体が強張ってしまう。

今夜、僕は伝聞さんに全てを話さなければいけない。

受け継いだ力も、受け継ぐまでの自分も、僕の原点オウジも。

オールマイトと共に、伝聞さんに全てを伝えて、その上で黙っていて貰うよう説得し

なければいけないんだ。

## 緑谷出久：オリジン

夜風が路地を吹き抜ける。まるで融けるように揺らぐ黒髪が、街灯に照らされては闇に消える。

人気がない道の先を見据え、伝聞文書は自身を落ち着かせるように息を吐いた。

(柄にもなく、緊張していますね)

指定されたのはとある海浜公園。

海流の流れによって元々ゴミの流れ着きやすかった事に加え、心無い人間が不法投棄を繰り返した事で地元の人間すら寄り付かなかったその場所は、誰かがゴミを撤去したことで今では恋人たちの憩いの場となっている。

(……まさか、文書の事を懸想している、なんてことはないですよ……?)

もしそうなら封印に加えて不能を刻みつけましょう、と心に決めて、文書は膝を軽く曲げる。

目的地は海浜公園。方向は地図で確認した限りではこのまままっすぐ。

(多少の誤差は諦めます。お母さん達に怪しまれないように、ちやつちやと行ってさっさと帰ります)



『かそく』

言葉が世界を変える。

以前に見た初来の飛行のイメージのまま、文書の身体は星海に投げ出された。凄まじい勢いで吹き付ける風に、文書の指から3つの光が消える。

『ぼ、う……ふう』

言葉が世界を変える。

風の影響が排除され、荒れた髪を撫で付けながら文書は眼下の景色に目を向ける。未だに消えない街の光と人々の喧騒が遠く、夜空に煌めく星々も遠く。

世界でただ一人取り残されたような孤独感に、文書の頬が緩む。

(世界に1人で取り残されても……『私』は1人じゃないです)

ゆっくりと、高度が下がっていく。

目的地が近づき、目視で人がいないことを確認して文書の指から4つの光が消える。再び吹き荒れる風が文書に届くよりも早く、文書の口から言葉が零れる。

『かくさん』

言葉は世界を変える。

文書の持つ移動エネルギーが衝撃波となり周囲へと噴出し、速度を落とした状態で砂浜へと着地した。

再び指から光が消え、残るのは出久に掛けた封印の4つの光。

それを翳すと、うつすらと、微かに指から伸びる光が文書の目に映る。

その先に、人影が見えた。

歩みを進める文書の目が暗闇に慣れた頃には、既に言葉の届く距離だった。

『かanteeい』

言葉が世界を彩る。

長袖に隠した手に光が灯り、目の前に立つ2人の情報が脳に刻まれる。

緑谷出久。No1ヒーローから個性を受け継ぐ、初来が認めた『ヒーロー』

そしてその横にいる金髪が八木俊典。今はまだ緑谷出久と同じ個性を持つ男。

テレビで見るのとは違う、長身瘦躯にこけた頬という見た目は、誰が見ても健全な身体ではないと理解できてしまう程だ。

「オール、マイト……」

No1ヒーロー、平和の象徴。

彼がいるからこそ日本の敵犯罪率が一桁台に抑えられているという、まさに抑止力そのものな存在。

その、異常な姿に文書の心は激しく揺れる。

「初めまして、伝聞文書くん……だね？」

「初めまして、です。オールマイト、だそうですね？」

対峙する2人は視線を交錯させる。

何から話すべきか、言葉を探す文書にオールマイトが話しかける。

「私の姿に、驚かないんだね。例の鑑定かい？」

「驚いてはいるそうですよ。鑑定は使っているらしいです」

（らしい？ 変な喋り方をする子だなあ）

言葉が途切れ、潮騒が2人の間を満たす。

探りを入れるべきか、それとも本題を切り出すか。

そんな事を考えていたオールマイトに、文書が一步踏み出す。

「要件は、『ワン・フォー・オール』の秘密とオールマイトのその姿の事を他言しない事、であっているらしいですか？」

陸風に髪が揺れる。オールマイトの瞳が文書を映す。

「……ああ。平和の象徴は必要なんだ。人々の心を守るには折れない柱がなければなら  
ないのだよ」

「心を守る、ですか」

小さく零れた言葉が風に流れて消えてゆく。

オールマイトと文書の視線が交わった。

文書の瞳に映るオールマイトには、まるで色がなかった。

(なんとという、冷たい瞳だ……)

ただ情報を得るためだけに向けられた視線に、オールマイトの心が揺れる。

人を人として見ていないような眼差しは、かつて対敵した相容れない存在を思い起させる程だった。

「……条件が、あるらしいですよ」

気がそれていたオールマイトは、文書の言葉に反応を返すことができなかつた。

それに気づかず、文書は続ける。

「まず一つ目は、貴方と緑谷の始まりを話すことだそうですよ」

「僕と、オールマイトの……」

雰囲気呑まれていた出久が、自身の話題が出たことできるよう声上げる。

「そして二つ目は、英雄で、初来の事を気にかけてあげて欲しいそうですよ。初来は貴方のことをとても尊敬しているらしいので」

「初来……そうか、君は遠藤少女の」

「はい、親友なんです。大切な」

初来の事を語る文書の瞳に、柔らかな色が浮かぶ。

それは、普通の人を持つ、親しい人へと向ける当たり前前の感情で。

それを文書が持っていたことが、オールマイトはどうしようもなく喜ばしかった。

「そして最後に、例え全ての人に『ワン・フォー・オール』のことがバレたとしても、初来にだけは知られないようにして欲しいそうですよ」

「……私を、尊敬してくれている遠藤少女の為、か」

徹底した『遠藤初来の為』という行動原理。

多少行き過ぎてている気がしなくもないが、誰かを思うことに間違いがあるはずもないとオールマイトは頷く。

「よしわかった、君の言う条件を呑もう。その代わりに私の事も、『ワン・フォー・オール』の事も黙っていてくれよ」

「わかったらし……いえ、わかりました」

頷き合う二人、その視線が出久へと向けられる。

「さあ緑谷少年、さっそく話を始めてくれ」

「きりきり話すらしいですよ」

「え、あつ、はい」

急に話を振られて一瞬狼狽えた出久は、過去を整理する為に目を閉じ深く息を吐く。

「……僕は、10か月前まで無個性だったんだ」

無個性。その言葉に文書の瞳が揺らぐ。

恐らくはそうだろう、と考えてはいた。個性を鑑定した際『ワン・フォー・オール』以外の個性がなかったからだ。

それでも、自分と同じような境遇を過ごしていたと聞かされると、どうしても心が揺らいでしまう。

「それまで僕は、皆から馬鹿にされてたんだ。無個性の癖にヒーローになりたいだなんて、って」

「……無個性でも、緑谷はヒーローを目指していたんですか」

ゆっくりと、出久は顔を振り文書の言葉を否定する。

「前にかつちゃんと言ってた通り、僕はヒーローになる事を諦めてた。……それでも、なりたいと思う気持ちは捨てられなかったから、自分なりにヒーローを研究して、それをノートに纏めてたんだ」

自分では気づいてなかったけれど、それは諦めているのと同じことだったんだよね、と出久は寂しそうに笑った。

「ある日、僕はヘドロの身体を持つ敵に襲われたんだ。そこをオールマイトに助けて貰って」

ゆつくりと、言葉にするのをためらうかのような一瞬の間。

「僕は、そこでオールマイトにヒーローを諦めるように諭されたんだ」

「えっ……」

思わず視線を向けた文書の先で、オールマイトはそれを否定することもなくただ立っていた。

「どういう、ことですか」

「ヒーローは、個性を使用した犯罪者を個性を使って制圧するのが仕事。だから無個性の人間には務まらない、そう言われたんだ」

それくらいは文書も知っている。

わからないのは、オールマイトの発言と現状へ至る話の流れだ。

疑問の言葉を飲み込み、先を促す為に文書は口を開く。

「それで、緑谷は納得したのですか？」

「納得は、最初からしていたんだ。ただ僕は、目を背けていた現実を見せつけられただけだよ」

そうして、次に出久が口にした言葉は、文書が想像もしていなかった事だった。

「強い敵と戦って、オールマイトは大怪我を負ったんだ。脇腹を抉られた痕を見せられて、自分がヒーローとして活動できる時間は3時間しかないって。自分が笑うのは自分が恐怖から目を逸らす為だって、そう言われたんだ」

「————『かんでい』!」

言葉が世界を暴く。

直前まで外見情報を映していた鑑定の効果が変わり、文書のイメージ通りに、個性ではなく対象の状態を映し出す。

「……そんな」

思わず零れた言葉は震えていた。

胃全摘出。憔悴した身体。命を削ったのヒーロー活動。

どれもが文書の想像を超えていた。

「これが、私の秘密さ。なんとかかましましたましヒーローを続けているが、そう遠くない未来に私はもうヒーローを続けられなくなるんだ」

「そんなに、なつてまで」



「続ける必要があるのか、なんて言ってくれるなよ？　ヒーローっていうのはそういうものなんだ」

一步、後ずさる文書。

例え瘦躯になろうとも変わらぬ『平和の象徴』としての瞳に、気圧されたのだ。

それに気付कि、気合を入れなおして文書は問いかける。

「……それなら、何故貴方は緑谷に個性を譲渡したのですか？　言いたくはないのですが、緑谷は個性がなければ研究者気質なただの無個性の男ですよ？」

「何故なら、緑谷少年がただの無個性の男だったからだよ」

そう告げ、オールマイトは出久に目配せを一つ。出久から話を引き継ぎ、オールマイトが語り出す。

「事の始まりは……ああ、うん。私のミスで、さつき緑谷少年が言っていたヘドロの敵を取り逃がしたんだ」

落とされた視線がオールマイト自身の手を映す。

そこにある後悔を握りつぶすように、拳を握ったオールマイトが顔を上げた。

「そのせいで爆豪少年がヘドロの敵に捕らわれてしまったんだ。私は活動限界を超えてしまい、爆豪少年の抵抗により地獄絵図になった商店街で、手が出せないヒーロー達は誰もが爆豪少年を救けだすヒーローを待っていた」

「緑谷少年以外の誰もが、『ヒーロー』として動けなかったんだ」

目を閉じその時を思い返すオールマイトが、天を仰ぐ。

「信じられるか？ 救いを求める少年に真つ先に手を差し伸べたのが、無個性の少年なんだぜ？ 無個性で小心者の少年が、その場の誰よりも『ヒーロー』だったんだぜ？」

再び戻された視線が文書を貫く。

迷いのない視線は、出久への信頼だった。

「継いで欲しいと思ったんだよ。救いを求める声に応える……応えてしまう少年に、『ワン・フォー・オール』を」

オールマイトの視線が出久に向けられる。

「意外に思うかもしれないが、『ワン・フォー・オール』は義勇を求める声と、それに応える事のできない後悔の心で紡がれてきたんだ」

「後悔の……」

出久も初耳なのだろう、困惑の響きを含む眩きが波間に消える。

「そうさ。誰か救けて、と。救いを求める声に応えられなかった継承者たちが、それでもいつかと、後世に願いを託したのがこの力だ」

「願いを、託す」

「そうさ、だからこそ私は君を選んだんだ」

風が吹く。

波音が途切れ、雲間から覗く月の光が3人を照らした。

「誰よりも『ワン・フォー・オール』に相応しいと思ったから、君を選んだんだ」

言葉は途切れ、ただ時折吹く風とさざ波の音が浜辺を満たす。

ゆつくりと、文書に向き直るオールマイトが、照れくさそうに頭を掻く。

「という訳で私は緑谷少年に『ワン・フォー・オール』を譲渡したんだけど、伝聞くんの聞きたい事は聞けたかな？」

「なんでちよつと照れてるらしいのですか、ヒロインですか。……はい、聞きたいことはきちんと聞けました」

そう言って、文書は出久に向き直り、頭を下げた。

「えっ、な、なに……?」

「申し訳ありませんでした、緑谷。前に貴方が初来の夢を奪ったと言いましたが、訂正します。間違っていました」

頭を下げたまま、文書は続ける。

「緑谷はオールマイトに認められて、正当に個性を受け継いだけだけです。決して初来の夢を奪った訳ではありません」

「あ、頭を上げて！ 気にしてないから！」

「文書は、小学生の頃は無個性だという理由でイジメを受けていました」

唐突な告白。その内容に、出久もオールマイトも言葉を失った。

「文書の個性は反動が強すぎて、その頃は使うことができなかつたんです」

「そんな……」

「文書は、イジメに負けました。文書を虐める世界なんて意味がないと見限っていました」

文書の言葉から想像できる状況など、出久はいくらでも思いつけた。

だからこそ、同じ状況を経験したからこそ出久は慰めの言葉を掛けることができなかつた。

「だから、緑谷が周囲に負けずにヒーローを目指すと云えたことに、敬意を抱きます」  
「敬意なんて、そんな……」

困惑する出久の前で、文書が頬を緩めた。

暗闇に慣れた出久とオールマイトの目に、月明りに照らされた文書が映る。

「今までは初来の為に緑谷を手伝うと言っていましたけど、これからは違います。文書は、自分の意思で、緑谷の力になりたいと思つたから手伝います」

風に靡く黒髪が月明りを散らし、幻想的な光景に2人は息を呑んだ。

「緑谷、貴方を尊敬します。これから、よろしくお願いしますね」

それは、出久が初めて目にした、文書の混じり気のない笑顔だった。

「うーん、青春！」

オールマイトの言葉に、見惚れ呆然としていた出久が身体を震わせる。

対して文書は、再び無表情に戻りその無機質な瞳をオールマイトに向けた。

「言っておきますけど、文書が好きなのは初来ですからね？ もし緑谷が文書に懸想し

ていたりしたら」

言葉を切り、視線を片手に向ける文書。

その指に3つの光が灯る。

「緑谷は不能になって、残念ながら子孫を残すことができなくなるらしいですよ？」

「懸想してないから大丈夫だよ！」

股間を片手で抑え、もう片方の手で全力で否定の意を返す出久。

その姿を見て留飲を下げた文書の姿に、ふと出久の脳裏にある仮説が浮かぶ。

「そうだ伝聞さん、伝聞さんの個性でオールマイトの怪我を治せたりしないかな……？」

「緑谷少年、それは一体どういう……？」

文書に相手の情報を知る個性がある程度しか聞いていなかったオールマイトが驚いた表情で出久に問いかける。

「あ、えっと、伝聞さんの個性は『文字魔法』といって、言葉の通りに世界を変える個性なんです。今は『ワン・フォー・オール』に封印を掛けてもらって、制御できる範囲で個性の訓練をしてるんです」

「なにその強個性!？」

吐血するオールマイトをスルーして、出久は口早に話し出す。

「伝聞さんの個性で『ワン・フォー・オール』に干渉できたということは、他人の身体に

対しての干渉ができる筈。イメージの通りに世界を変えることができるのなら、オールマイトの怪我を治すことが……いや、それだけじゃなくて『ワン・フォー・オール』を作り出して、また平和の象徴として活動ができるようになったりとか!」

「ごめんなさい、無理です」

文書の言葉に、出久が動きを止める。

眦を下げ、自らの手を見下ろす文書。

「文書の個性は他の生き物には通らないんです。緑谷に『ワン・フォー・オール』の封印を掛けることができたのは、裏技を使っただけなんです」

「裏技……それは、オールマイトには使えないの……?」

出久の言葉に文書は頷く。

「それは、何故なのか……聞いてもいいかい?」

オールマイトは問いかける。

閉ざされた己の未来だけならばここまで直接踏み込みはしなかっただろう。

だがオールマイトがー平和の象徴がいなくなれば、人々の心の支えがなくなってしまう。

出久はまだヒーローとして幼く、彼が成長し人々の支えとなれるまで、長い時間が必要だ。

オールマイトに残された時間は、もうあまり無いのだ。

だからこそ『平和の象徴がいなくなり人々の心の支えがなくなった未来』を救えるかもしれない文書に、オールマイトは疑問を投げかけた。

「本当に使えないのか」と。

「……今言った通り、文書の個性は『他の生き物』には使えないのです」

他の生き物、という言葉強調する文書。

2人の顔を見返ししながら、再び口を開く。

「だから、緑谷と文書の共通点や共感できる部分を『繋げ』て、同じ人間だと認識を誤魔化して使っているのです」

「いや……それは、おかしくないか……?」

簡単に言うのと、「口が1つ目が2つあるから緑谷と文書は同一人物ですね、なら『文字魔法』の改ざんが効きます」という理屈だ。

間違いない狂人の思考回路に、思わずオールマイトが呻く。

「待って伝聞さん、『文字魔法』自体を改ざんして、他の生き物にも使えるようにしたりとかは」

「できるかもしれませんが、そして文書が個性を失ってしまう可能性も当然あります」

あまりにも当たり前前の返答に出久は言葉に窮した。



そもそも、よく考えなくても出久の今のセリフは「セルフ人体改造してみない？」である。

オールマイトから握りこぶしで頭を軽く叩かれ、出久は肩を落として黙り込んだ。

「なら、共通点や共感できる部分がないというのは？」

そもそも同じ人間同士で100パーセント共感できないなどということはあり得ないのだ。

好きなもの嫌いなもの。喜怒哀楽に繋がる体験談など、人間である限り絶対に何か一つは共通し共感できることはある。

「……オールマイトは悪くありません。悪いのは文書です……文書が弱いのが悪いんです」

文書の視線が下がり、その瞳が砂浜だけを映す。

ゆっくりと、苦しみに喘ぐように胸元を掴み、血を吐くように文書は言葉を零した。

「文書は虐められていました。物を隠されたり、取られたり、馬鹿にされたり、小突かれたり。今考えると子供同士の軽いじゃれ合いだったものもありました、それでもあの時の文書の苦しみは本物だったんです」

さらさらと風が髪を撫でて、そつと文書の顔を隠す。

「なんで文書がこんなに苦しまなければいけないのか、つて。この個性が悪いんだ、つ

て。こんな個性に生まれたくはなかった。毎日毎日夜に一人で泣いていました。泣きながら、願っていました。誰か文書を救けてって」

「救けてオールマイト、って」

風と波の音だけが、言葉のない浜辺を漂い消える。

「文書だって、ヒーローが個性で敵に立ち向かう存在だって知っています。泣いている子供を救けるような、そんな『ヒーロー』とは違うって理解しています」

不意に、文書の顔が上げられる。

オールマイトを見るその目は、無。

まるで情報を得るためだけに向けられたその視線に、オールマイトはただその断罪の言葉を待つことしかできなかった。

「オールマイト、貴方を尊敬しています。嘘じゃないですよ？ 貴方がいるから日本は平和でいられる。私たちがこうして安らかに暮らしていられるのも貴方のお陰です。貴方の生き方は理解できませんが、それでも人々の為という一念で、命を削りながらヒーローを続ける姿は、格好いいと思います」

「でも、ごめんなさい。文書は、文書を救ってくれなかったヒーローに共感なんてできないんです」

その言葉に、一体誰がなんと返せるといふのだろうか。

無言のまま言葉を返せずにいる2人に、文書は踵を返す。

「もう話は終わりでもいいですね? ……あ、安心してください。緑谷に対してはきちんと個性が働きます、例えば大怪我を負ったとしても、死んでいなければ文書の個性でどうとでもなります」

オールマイトを見もせずになんかそう言い、ついでにと言わんばかりに手を振る。

今まで灯っていた指の光が4つ消え、同時に出久は自分に掛けられていた文書の個性の効果が消えたことに気付く。

振り返り出久へと視線を向ける文書はいつもと変わらぬ様子で、いつもと同じ調子で話しかけた。

「緑谷、貴方には入学までに『限定強化』の前提くらいはできるようになって貰わないといけないんです。補助輪ありじゃないとダメなんです、なんていつまでも言わせませんよ」

そう言って薄く笑い、今度こそ文書は歩きだす。

その指に光が3つ灯り、軽く跳ぶように何気なく身を屈め。

『かそく』

言葉が世界を変える。

空に昇る流星のように、個性の光が尾を引き星空を裂く。

出久も、オールマイトも。

見つかるはずのない言葉を探して、ただ文書の姿を見つめることしかできなかった。

「まるで呪いね」

『文書の傍』で全てを聞いていた撮香は、愛娘の在り方をそう評した。

寝返りをうつと、さらりと流れる黒髪が糸纏わぬ身体を滑り落ちた。

「それにしても初来ちゃんったら、呪いを掛けておいて知らんぷりなんて本当に酷いわ」  
シーツを這わす指先が光を灯し、半透明になった指先が、遠藤家の自室で寝ているはずの初来の頬に触れて通り抜ける。

「なにより酷いのは、呪いを掛けたと欠片も思っていないところ」

個性により映し出された初来の頬の輪郭をなぞり、撮香は妖艶に笑う。

初来の姿が消え、彷徨う指先が照明器具の頼りない明かりで作られた影を伸ばす。

「ねえ文書ちゃん、今のままの文書ちゃんじゃ、初来ちゃんのヒロインにはなれないわ  
よ」

瞳を閉じ、迫る眠気に身を任せながら、撮香は薄く笑う。

「頑張つてね文書ちゃん。お母さんは文書ちゃんの強さを信じているからね」

## 遠藤初来の日常―修羅場編―

「お、文書ちゃんじゃねーか。久しぶりー」

「み、水騎ちゃん……？」

ある日、出久くんが個性の件で役所に用事があるとかで修行がなくなつた。

手持ち無沙汰になつたボクたちは、久しぶりにボクの家で遊ぶことにしたのだ。

呼び鈴の音に玄関まで行くと、先に玄関を開けてくれていたらしく、水騎と文書が鉢合わせしていた。

文書の視線が上下にゆつくりと彷徨う。

自分より高い位置にあるクリアブルーの頭髮。釣り上がった口の端から覗く八重歯。

一気に成長を遂げた胸。中学生だということにも関わらず女性らしい丸みを帯び始めた腰。

ホットパンツからすらりと伸びる白い脚。

Cカップになつた胸。

A Aカップの文書より大きい胸。

「……水騎ちゃん？」

胸見すぎ。笑うわ。

動揺の余り声が震えている文書。対して水騎は一瞬あっけにとられたものの、すぐさまいつもの笑顔に戻った。

「なんだよー、半年会わなかっただけでも俺の事忘れたのかよー」

細められた目から覗く深い蒼の瞳と微かに見える八重歯が、言葉遣いと合わさって人懐っこい印象を与える。

自分の視線より高い場所にある顔を見、それから助けを求めするようにボクの方へ視線を向ける文書。

「だ、だって……半年前までは、文書の方が身長高かったそうですよ……？」

文書の身長は160センチちょい。異形型ではない女子にしてはまあ高い方だけど、残念ながら水騎はその上を行った。

「半年で15センチも伸びたんだぜ？　へへっ、もうこれで俺の方が大人だな？　義姉ちゃんって呼んでもいいんだぜ？」

明らかな挑発は、水騎がボクと文書の結婚に反対の立場を取っているからだ。

ボクと結婚する為にはボク、お母さん（消極的反対派）、水騎と霧裂姉さん（積極的反対派）を説得し、国の法律を変えなければいけない。

明らかに無理なんだけど、諦めないんだらうなあ……

「ーっ！　文書の方が、お姉さんだそうです!!」

「むぐつ!! は、離ひえー」

顔を真つ赤にした文書が、素早い動きで水騎の頬を両手で掴む。反応すらできずに頬を掴まれた水騎はむーむー言いながら振りほどこうとするが、出久くんの5%フルカウルと腕相撲で拮抗できるほどの筋力を持つ文書からは逃れられなかった。

うん、おかしいよね。わかつてるよボクと文書の異常さが。強化系の個性持ちと個性なしで真つ向から殴り合えるとか意味がわからない。

出久くんも呆然としていたし。

……大丈夫かな、自信喪失してないかな？

「もうそこまでにしときなよ……水騎はなんか用事あつたんじやないの」

確か友達と遊びに行くとか？ 残念ながら同性の友達っぽいが。

お姉ちゃん達は恋愛無理そうっぽいし、遠藤家の血筋が存続できるかは水騎に掛かっているぞ！ がんばれ！

思い出した様子の水騎は、時間がないのか個性を発動させた。

波のように揺れる髪を掻き分けて、水でできた魚の群れが玄関を遊び泳ぐ。

個性『生命の海』

海に見立てられた髪の中から水の身体を持つ生物——水獣を生み出す個性。

生物といっても、即興で創った水獣はプログラミングされたロボットみたいな感じら



しいが。

水騎の組み上げた行動原理のままに、遊泳していた魚の水獣達——熱帯魚の群れが文書に向かって泳ぎだす。

思わず手を離れた文書から逃げ出した水騎が笑って文書を指さす。

「行けっ！ パンダ達、文書ちゃんを取り囲め！」

お姉ちゃん、そのネーミングセンスどうかと思うな……

青一色の熱帯魚にパンダって。

「ちよ、びしょ濡れになってしまいうらしいです?！」

「動かなきゃ濡れねーよ！」

言葉の通り、文書を取り囲むように泳ぐパンダ達は文書に触れようとはしない。

置いてあつた鞆を引っ掴んで、髪を跳ね上げながら水騎は靴を履く。

振り返る際に揺れるGジャン。いやー、元気っ子コーデいいな。服のセンスじゃ

ちよっと負けてるわ。

ちなみに今日のボクのコーデイネートはジャージだ。

「じゃあな初姉ちゃん。文書ちゃんもまたな——」

忙しげにドアを開け放ち、水騎が出ていく。

そしてすぐに帰ってきた。

「文書ちゃん、初姉ちゃんとの結婚はぜってー認めねーからなー!」

そう言い放ち、今度こそ水騎は出掛けて行った。

その数秒後に、まるで薄い紅茶の後味のように、水獣のパンダ達が無数の気泡となつて宙に消えていった。

残つたのは、怒りのあまり口を戦慄かせて立ち尽くしている文書だけだった。

「くううっ……す、少しおっぱいが大きくなつたからつていい気になつて……っ!」  
らしいです!」

「語尾が無理矢理過ぎ」

なんでその語尾なんだよ、もうちよつと何かなかつたの? ずっと前から思つてたんだけど。

ちよつとの間地団駄を踏んでいた文書も、敗北を悟つたのかゆつくりと息を吐いて暴れるのをやめた。

「初来、不貞寝するそうなのでおっぱい貸してください」

「帰れ」

飛び掛かってきた文書をアイアンクローで迎撃する。

「『じかんかそく』」

が、今回は文書の方が一枚上手だった。

落下速度すら加速され、迎撃に回した手をすり抜けるようにボクの胸に落下してきた文書が、胸に顔を埋めながら背中に手を回し。

「……育ってるらしいです?」

と、胸の中でもごもごとそう呟いた。

……え?

ー 『鑑定』 発動

「必殺技『バストチェック』……マジだ、育ってやがる」

ところ変わってボクの自室、『鑑定』を使い胸囲を数値化してみると、文書の言う通りたしかに大きくなってた。

ボクの薄青のブラを服の上から着けて栗みたいな口をしている文書が、ボクの言葉に反応して髪を揺らす。

「ちよつと成長ペース早過ぎだそうですよ? 前ブラを買いに行ったのが……1週間前?」

週ごとに胸囲が上がるとか勘弁してください。

勿論カップ数上がるほどではないが、センチ単位で上昇するのはちよつと成長力が

強すぎませんか？ チートか！ ……チート？

「個性『超成長』が原因……？」

ボクの言葉に文書が目を見開く。

「それ、普通にありえそうらしいです……」

元々、いつの間にか金髪さんと渡り合える程の戦闘力を手に入れていたり、（元々高かった）筋力が急上昇気味だったりと怪しげな挙動を見せていた『超成長』だったが、ここにきてやらかしてくれやがった。

しきりに手を握り開き、何かを掴む仕草を見せる文書がボクの胸に視線を……エロい視線を向ける。

「G………H………I………、Gを超えた辺りからちよつと別世界の印象があるらしいですね」「Aすら超えられない文書くんがそれを言うそうです？」

襲い掛かってきた文書を投げ飛ばして風の檻で拘束し、頭を抱える。

いよいよG級か……え、普通に嫌なんですけど。

今ですら持て余し気味なこの胸の大きさ、これ以上大きくなっても対応に困るのだ。

「うぎぎ、胸囲の格差……」

流動する風の格子の間から顔を出した文書が、服の上から自分の胸を掴み——撫でな

がらそう呟いた。

そんな言葉に辟易しながら、ボクは自分の胸を掴む。

質量感が凄く、足元を遮る2つの膨らみがボクの手に合わせて形を変える。

「言つて悲しくならない？ ……ああ、縮まないかなこれ、マジで」

本当に、本当にただ何も考えずにそう呟いて。

だからこそ、ふと思いついた事を何も考えずに実行に移す。

――『身体操作』発動

身体が変質する。

脳裏に浮かぶイメージに塗りつぶされるようにボクの身体が一瞬で上書きされる。

胸を支えていたブラの感覚が消え、同時に肩に掛かる重さが軽減された。

後からついてきた感覚は、ジャージとブラが小さくなったボクの胸に降りてきた感触

だろう。

「……は？」

「おー、できた」

改めて胸を揉む。霧裂姉さんと同じくらいの大きさにまで縮んだ胸の上を、手の動きに合わせてサイズの合わなくなつたジャージとブラの余りが揺れる。

『鑑定』してみると、きつちりDカップ。試しにAから順にJカップまで操作してみた

けど、個人的にDカップくらいがいいのでDにした。

ご満悦な結果に思わずにやりと笑ってしまう。

ふと何も喋らない文書に視線を向けると……何故か怯えた表情をしていた。

「どしたの？」

「初来……今、自分が何やったのかわかってないんですか……？」

「何って……」

個性『身体操作』で身体を変えただけ……うえ、気持ち悪つ。

急に襲い掛かってきた猛烈な吐き気に、風の檻の制御ができず部屋中を風が吹き荒れる。

それに対応することすら惜しみ、ボクは口元を押さえてトイレに駆け込む。

胃の中を全部ぶちまける勢いで戻し、それでも収まらない吐き気。

全身を襲う強烈な違和感が脳を揺らして思考が乱れる。

(これ……『身体操作』の反動……?)

試しに『身体操作』を解除しようとするも、何故か解除ができない。

いや違う、これは……

——『身体操作』発動

今の自分の身体に元の自分の身体を上書きする。

胸が急激に元に戻り、ジャージを押し上げてブラの中に収まる。

すると違和感が消え失せ、吐き気も無くなった。吐いた後だけ。

……なるほど、吐き気は変質した自分への違和感が起こす拒絶反応か。

納得したボクは口を濯ぎ、風の流れに『浄化』の個性を連結させて消臭してからトイレを出る。

部屋に戻ると、先ほどの位置から全く動いていない文書がこちらを見つめていた。

「文書……?」

「初来、一体いつからそんなに……」

「ん? 『身体操作』の個性は前からあつたけど、今みたいな感じで身体を弄つたのは今日が初めてだよ?」

文書の身体が震え、見開かれた目の中のボクが揺れる。

どう言つたらいいのかわからないように……唇を震わせながら、文書がゆっくりと近づいてきた。

「初来、『身体操作』は使っちゃダメです。今みたいなのは、初来の『個性創造』がバレルリスクが大きくなるんです……!」

「んー? いや、前々から胸パッド使つてたとか言い訳できるでしょ……?」

反動があるので日常使いは無理そうだけど、そこは『超成長』さんに期待である。

悲しそうに首を振る文書、さらさらと揺れる髪が肩に掛かり滑り落ちる。本当にさらさらで柔らかい綺麗な髪してるよね、ボクは割と硬めの髪質だから羨まし……いや、『身体操作』でどうにかできないかな？

髪だけなら違和感もないだろうし、一回試してみようか。

「初来、『個性創造』は絶対に知られてはいけません。文書が知っていることすら本来ならいけないですよ」

そんな大げさな、なんて冗談すら言うことが出来ないほど、真剣なその瞳に気圧される。

だけど、ボクはそれに頷くことはできなかった。

だって、もう既にオールマイトに『身体操作』を使う事は決めたから。

前提として他人に『身体操作』が使えなければいけないが、もし他人にも効果が及ぶのであれば、オールマイトの怪我を治せる。筈だ。

救けられるのに救けずにいるなんて、ボクの心が許さない。

しっかりと文書の目を見つめ返すと、一瞬だけ驚いたように目を見開き、すぐに何かを諦めたかのように目を伏せる。

「そうですよね、初来は救けに行きますよね……それに救われた文書が、止めちゃいけないですよね」



項垂れる文書。頭を撫でてあげるけれど、それでも動かない。

んー、何か元気が出るような……いや、それは無理だろうから気を紛らわせるような

……

そうだ、これとかどうだろうか。

ー『個性』情報操作』発動

ー『身体操作』発動

ー『個性連結』発動

「ねえ文書」

「へっ……?!」

ボクの呼びかける声に、顔を上げた文書が硬直する。

何故って？ 文書の目の前にいるボクが男になっていたからさ！

『情報操作』で「もしもボクが男だったらどんな姿をしているか」を計算……計算？

して、その情報を元に『身体操作』で身体を創り変えたのだ。

垂れ目は変わらなかつたけど、女の身体に比べて筋肉質な身体つきになった。残念な

がら全体的に薄い身体つきだが。

襲い掛かる猛烈な吐き気は、『個性連結』したせいで先ほどより強烈だったが、来ると

わかっていたのと先ほど胃の中を空っぽにした事が功を奏し、なんとか耐えきれてい

る。

「どうよ、もしボクが男だったらっていう設定で『身体操作』したんだけど……?」  
思わぬ文書の反応に言葉が尻すぼみになる。

予想ではレスモンスターな文書の事だから「男になるなんてー!」とか言うと思ってただけど、頬を朱に染めて目を潤ませ、呼吸は浅くなっている……あれ?

どう声を掛けていいか迷っているボクの目の前で、ふいと顔をそむけた文書がボクの胸を片手でトンと押した。

「……次に文書の前でその姿になったら、犯して、初来の赤ちゃんを孕みます」

ー 『身体操作』発動

恐怖の余り陰囊と陰茎が縮んで消え、胸が膨らみ元の女の姿に戻る。

酷い反撃を受けた。生まれ変わってから受けた恐怖の中で、堂々の2位となるほどの恐怖体験だった。

ボクが元に戻ったのを確認して、文書はボクの胸に飛び込んできた。

「ふい、実家のような安心感」

「ま、まって……恐怖で身体が動かないんだけど」

胸に顔をすり寄せる文書を引きはがそうとするも力が入らず押し倒される。

お、犯されるー！

などと冗談で口にする、唐突に文書の耳元で空気が炸裂音を鳴らし弾けた。

文書があまりの衝撃にもんどりをうってひっくり返り、耳を押さえてごろごろと転がる。

この個性は……

「文書ちゃん、私の妹に不埒な真似はしないで欲しいんだけど……？」

想像通り、ボクの部屋へ入ってきたのは霧裂姉さんだった。

文書の首根っこを掴み引き離すと、ベッドの上に放り捨ててボクを庇うように立つ姉さん。

肩まで伸びるブロンドの髪が揺れる。

今日は仕事も遊ぶ用事もないらしい霧裂姉さん。外に行く用事もないのでそんなお洒落装備なの……？

切れ長な目が与えるクールな印象をそのままに、知的な大人の女性としての魅力を持たせる濁りのある寒色系のコーディネート。

ちらりと見えた耳につけたピアスが更にお洒落具合を上げている。

(それに比べてボクの子供っぽさとききたら)

「視界の隅に掛けてある極彩色のTシャツからそつと目を逸らす。

朝会った時は隣の自室で趣味に没頭していると言っていたが、どうやらうるさくし過ぎたようだ。反省せねば。

「……いや、うるさくしなければやられてたっぽいのでむしろグツジョブだボク。

「くっ……自由恋愛って知ってるらしいですか?」

「何故か霧裂姉さんと親しくない人間にだけは強気に出る文書が、ゆつくりと立ち上がる。」

「今気付いたけど文書まだボクのブラ装着しっぱなし! ド変態じゃねーかさっきのシリアスシーンも台無しだし!」

「そのブラのサイズあってないわよ? 絆創膏貸してあげましょうか?」  
「間に合ってるそうですよ」

ボクの目が驚愕に見開かれ、思わず文書の胸を凝視する。

嘘だろ……流石に、スポブラとかしてるよね……?」

「変態を見るボクを置いてけぼりにして、霧裂姉さんと文書の言い合いは加速してゆく。」

「毎度毎度、文書と初来の邪魔をして楽しいらしいですか?」

「妹を悪の道に引きずり込もうとする知り合いを止めるのは当たり前でしょう?」

互いに一歩踏み込む。どちらも口の端を歪めるような威嚇の笑みを向け合っていて、とてもじゃないが普段かなり仲がいいとは思えない。

「お兄ちゃんに勝手に勝手に惚れて、勝手に失望して勝手に失恋した挙句衆道に走った人に言われたくないらしいです」

ピキ、と。霧裂姉さんの表情が凍り付く。

「言ったわねクレイジーサイコレズ」

もう一歩ずつ踏み出し、二人は超至近距離で睨み合う。

「言いましたねスレンダー喪女」

その言葉が契機となり、2人は互いに掴み掛かる。本気でやったら一瞬で文書が勝つので、これはじゃれ合いみたいなものだ。

「下に居るから、終わったら呼んでね」

マウントを取って文書の頬を鷲掴みにする霧裂姉さんと、霧裂姉さんの胸を鷲掴みにして足をじたばたさせる文書にそう声を掛けて部屋を出る。

BL同人作家とGL漫画読者の不毛な争いに関わる気などボクにはないのだ。

階段を降りる際にすれ違いうくらげの水獣のなめくじを撫でる。

水騎の個性で生み出した水獣は半永久的に動き続けるので、家の中はアクアリウムみ

たいな状態になっているのだ。

リビングに降りて緑茶の茶葉を探していると、寄ってきた亀の水獣のなまけものが胡乱な目つきでボクを見つめてきた。

「なまけもの、茶葉つて切らしてたっけ？」

ぼわっと、なまけものが口から吐き出した気泡が宙に溶ける。

水騎が最初に生み出したなまけものは、生まれてから12年ずっと家の中にいるので、家のことなら大体なんでも知っている。

そのなまけものが案内してくれないということは、家の中には茶葉はないのだろう。

仕方ないのでスーパーに買いに行こう。

「あ、そうだなまけもの、もしヒートアップしたら2人を」

止めてあげて、と言う前になまけものが甲羅の中に顔と手足を引っ込めた。

うんそうだよね、割って入りたくないよねごめんね？

謝罪の意を込めて甲羅を撫でてから家を出る。

さあ行こう、緑茶がボクを待っている。

好きなんだろう？ ジャンプ漫画特有の無茶理論修行回がさあ！

出久くんは、身体能力に恵まれているとは言い難い。

身長は男の子にしては低いし、筋肉はついてあるけれども身長と体重がないので打撃に威力があるとは言えない。

スタミナもタフネスも、滅茶苦茶鍛えた一般人程度としか言いようがない。

だから、出久くんが戦闘を行う際はとにかく防御に徹して、隙を見つけて一撃で相手を沈めるという方法しか取れない。

フルカウルという個性の使い方を見つけないままでは。

(うぎ……ったい！)

瞬き1つの間隙を縫って迫りくる出久くんの拳を受け流す。

完全に拳動を把握しているその突きは、以前のように受け流し1つで崩せるようなものではなかった。

ボクの反撃の蹴りは、誰もいない場所をただ通り過ぎただけだった。

しつかりと地面を踏みしめた状態だからこそ、出久くんはすぐさま相手の攻撃範囲外へ逃れる事ができる。

しかも、それはただの回避ではなく次へと繋げる為の一手でもある。

恐らくボクの癖を盗んだのだろう。出久くんが移動した先は『ボクが蹴りを繰り出した体勢からだと思え辛い場所』だ。

(来る……！)

辛うじて視界の隅に見えた出久くんの挙動から動きを予測して、出久くんの拳を後ろ手に掴む。

「……いつ?!」

虚を突いた事で気が緩んだのだろう、掴まれ硬直した出久くんを前に放り投げる。

ぐるぐると漫画みたいに縦回転しながら宙を舞う出久くんに後から追い付いて、その首を掴んで地面に叩きつけた。

当然腕の間接をしつかり極め、動きを封じた状態だ。

関節技というのは筋肉の硬直を利用する技なので、いくらフルカウル状態だったとしても動けないのだ。

フルカウルという全身強化術は、その出力以上に出久くんの攻撃力と機動力を上げる



こととなった。

本来、無手での攻撃というのは、体重移動によるエネルギーを拳や脚といった先端部分へと加速させて叩きつけるものだ。

だが、フルカウル状態の出久くんは、上昇したその身体能力で体重以上の力で地面を掴む（しっかりと地面を踏みしめている状態）事ができる。

重い物を押す時に強く踏ん張るという事は逆に強く踏ん張りさえすればその分強い力が出せるということだ。

そしてその上、地面を踏みしめている状態は回避行動への移行がスムーズに行えるという事だ。

見てから回避余裕でした、である。今やられたけど、けっこうムカつく。

そして最後に、これだけの攻撃力強化がありながら『体重が軽いまま』だというのが一番のポイントだ。

体重が軽いという事は、移動の際の保持エネルギーが少ないという事で、それはつまり『方向転換の為に力が少なくて済む』という利点となる。

ただでさえ高攻撃力で高機動力だというのに、そこに体重の軽さが加わった出久くんは

『少ないモーションから重い打撃を繰り出す。パワーファイター』で

『一瞬の内に距離を詰め、一撃を放った直後には手の届かないところに離脱しているアウトファイター』で

『近距離高機動による超回避のインファイトアウトファイター』とかいう意味の分らない存在になってしまっていた。5%の出力でこれである。

勿論、まだボクの方が強い。予測と反射神経だけで割と捌けるし、そもそも全力で出久くんの攻撃を払えばその時点で出久くんの拳は粉碎骨折する。そして、いまだにボクは個性を使っていない。

でも、それでも出久くんが飛躍的な進歩を遂げたことは間違いないことだ。

「いやー、見違えたね。すごいよ」

それから数度模擬戦をしてから、戦闘態勢を解いて出久くんに近寄る。

出久くんも模擬戦が終わったことを悟って、頬を掻きながら近寄ってきた。

「いや、まだまだだよ。僕はまだ、遠藤さんに個性すら使わせられていないんだ」

悔し気に歪められた表情は男の子していて、自分が失ったものを他の人が持っていることに嫉妬を覚えたりもした。けれどそれを押し殺して出久くんに笑いかける。

「赤ちゃんが走り回ってたら怖いでしょ？ いまはよちよち歩きの時期だつて」

そう言うのと、何故か出久くんは硬直し、その頬に一筋の汗が流れた。

「……それ、慰めてる？ 慰めてない気がするんだけど」

慰めてるよ、と反論してから、ドヤ顔で漫画で見た言葉を出久くんに送る。

「Baby steps to Giant stridesだよ」

意味は『小さな一步の積み重ねがやがて大きな躍進へとつながる』

焦る気持ちはわかるけれど、今は小さな一步を確実に歩んでいくべきなのだ。

ボクの言葉に耳を傾けている出久くんに笑いかける。

「だから、今日中に確実に1000歩くらいはしようか」

「一瞬で矛盾してるんですけど?!」

叫ぶ出久くん。

いや、流石にちょっと人より遅れ過ぎだからね。

普通なら躓くところを支えてあげて確実な1歩を踏み出させるのがボクと文書の役目だから、出久くんは安心して全力疾走していいんだよ？

と、ここまで冗談の言い合いを聞いているだけだった文書が近寄ってきた。

黒縁の眼鏡をかけ、何故か丈の合っていない白衣を着て袖を余らせている文書さん。文書は別に身長低い訳ではないので、丈が合っていないのはわざとだ。

なんでこう、文書はボクが男だった時の好みを直撃してくるのか。

長い黒髪が一房白衣に掛かっているとか地味にフェチを直撃してるんだよ！

「いい感じに個性が馴染んできてるらしいですね。これなら『発動認識』ができます」

『発動認識』……?』

「なんで遠藤さんが疑問形なの……?」

おつと出久くんが疑惑の視線を向けてきている。ので言い訳した。

いや、初耳なので……いや、本当に聞いた事ないですよ?

出久くんの呆れた視線が強くなったことに動揺していると、文書が手を打ち鳴らした。

「初来は必要なかったのので教えてなかったただけだそうですよ。とりあえず概要から話すらしいです。『ホログラム』」

文書の言葉が世界を変える。

光の粒子が集まり、出久くと雄英の実技試験で出てきた大型敵の像が浮かび上がる。

「話によると、緑谷はこの50メートル超えの鉄塊を殴り倒したそうですね」

「あ、うん……その代わりに右腕と両足がバッキバキになっちゃったけど」

出久くんの言葉にニヤリと文書が笑った。

まるで出来の悪い生徒がお手本のような間違いをしたのを見るような、そんな笑み。

「そこで疑問が浮かばないのがダメなんですよ」

「結論は?」

ダメなボクが先を急かすと、ジト目を向けられた。

「その性急過ぎるの、どうかと思うそうですよ？ ……えっとですね、ここでは細かな数字は出しませんが」

言葉が区切られ、再び像が形を結ぶ。浮かび上がったのは……側面に4tと書かれてあるトラック。

そのトラックが、猛スピードで大型敵に突っ込んで大破、大型敵はぶっ飛ばされていった。

「まあ仮に今のトラックがスポーツカー並みの速度が出ていたと仮定しましょう」

今度は、出久くとトラックがぶつかり合う。どちらも大破する。おいグロ画像やめろ！

「今のは映像は簡単な物理の話です。物体に力を加えた時、物体から同じ力がこちらにも掛かっている。作用反作用の法則ですね」

はーん、さては文書ボクを馬鹿にしているな？

「いくらなんでもそのくらい知ってるよー」

ボクの言葉に頷く文書。

「そうですね、当たり前前の話らしいです。なのに皆そこから先の想像が出来てないらしいのですよ」

再び像が形を結ぶ。今度は出久くんが2人。

「さて緑谷、『個性因子』とは何か答えられますよね」

「あ、うん……『個性』のあるなしを分ける全ての身体機能の総称だね」

まあ、ここら辺は誰でも知っている事だ、今更過ぎる。

「さて、ここからが本題らしいです」

2人の出久くん像の内、1体が光を帯びる。

「ここに2人の緑谷が居ます。1人は個性のない緑谷。1人は個性『超パワー』を持った

緑谷」

光がトラックを2台創り、それぞれが向き合うように配置される。

再びのグロ画像の予感に顔を顰める。

予感を裏切らずにトラックが出久くん達に突っ込み……光を帯びた出久くんは大破、

無個性の出久くんは――血煙になって消えた。おい。

「……あつー」

声を上げる出久くん、ニヤリと笑う文書。

「そう、『普通』に考えたらわかるそうですが、普通の人間はスポーツカーの速度で突っ込んでくるトラックと衝突して腕がバッキバキになる程度じゃ済みません。即死します」

「そうか、そう当たり前だ！　なのに常識に囚われて全然見えてなかった！」  
またしてもブツブツしだした出久くん。

ちよつと仲間外れにするのやめてよねー。

ボクの表情から思考を読んだのか、文書が続きを説明してくれた。

「さつき、同じ人間の個性のある状態とない状態を隔てる全てが『個性因子』だと言ったらしいですよね？」

「あー、うん」

まだわからないボくに、言い含めるように文書が説明を続ける。

「なら、『大型敵をぶっ飛ばすほどの力』という作用に対する反作用を『腕が壊れる程度に抑えた』のもまた個性の1つと認識するべき、という話です」

「……ん？」

あー、つまり出久くんの個性は『超パワー』と『超パワーから身体を保護する』の2つの性質を持っているってことか。

ボクの言葉に、今の例だけを見ればそうですね、と文書は笑う。

「他にも、身体能力を上げるといっても『瞬発力』『筋持久力』『最大筋力』がありますし、もしかしたら『動体視力』や『反射神経』も同様に上がるのかもしれない。上がらないのかもしれない」

文書の指先の光が消え、像が消え失せる。

ニツと笑い、軽いウイंकをする文書。

「もうわかりましたね? 『発動認識』は自身の個性と向き合う訓練だそうです。自分の個性がどういった物か、それを可能な限りの考察と実験の繰り返しで突き詰める。そこで得た情報が次の『限定強化』に繋がるそうです!」

「ドン!」

文書の跳び蹴りを避ける。

「というか、なんでボクにそれを教えてくれなかったの?」

そう聞くと、起き上がってきた文書は呆れたように口を開く。

「その先にある『限定強化』を普通に使っている初来がそれを言うのですか……それに、そもそも初来にとって『発動認識』は前提でしかないそうですよ」

なるほど、ボクの個性創造は『個性を認識した形で創造する』から、その時点でもう『発動認識』を済ませている訳か。

やっところさ理解したボクに文書が笑い、復帰した出久くんが焦ったように話しかけてきた。

「つ、つまり僕のワン……個性の『耐久力を強化する力』を鍛えれば」

「緑谷の制御可能な最大出力が上昇するそうですね。ちなみに緑谷が言ったのは『限定



強化』訓練です。今はまだそこまで行けません、いずれは訓練としての『限定強化』ではなく技法としての『限定強化』もやるつもりなので心してください」

どうやら方針は固まったようだ。話を聞く限りボクが何か手を貸すような事もないので、手持ち無沙汰になったボクは前々から考えていた修行をすることにする。

手を振り風を起こし、両の掌の中に渦を巻くように収束させる。

そう、NARUTOの螺旋丸だ。

そして、ここからが『限定強化』訓練だ。

両手に持った小型の台風同士を接触させる。

干渉し歪めあった流れ同士が、決められた形に戻ろうとしては再び触れ合い歪む。

「ぐうっ……」

ボクだけに見える、流れを視覚化した白い線が削られあっている。それを修復しつつ加速！

もう既に、単純に風を操った時の反動はなくなっていた、にも関わらずこの訓練では既に反動が出始めている。

抑えきれなくなった風の束が髪とジャージを揺らす。

その風をすぐさま回収し、周囲に這わせていつでも流れを取り出せるようにする。

保持力、制御力の『限定強化』訓練だ。

少し離れた場所でこちらを窺っていた文書が「負けず嫌いだそうですね」とか言っていたけど、聞こえてるんだぞ！

「とりあえず、緑谷のやる事はたつたーつだそうですね」

初来から視線を外した文書の言葉に、出久は頷く。

「うん、まず何より『耐久力』の強化が急務だね」

今のところ、出久は個性『ワン・フォー・オール』の出力を制御することで個性の行使を可能としている。

つまり、出力ー『瞬発力』及び『最大筋力』に関して言えば、鍛える段階ではないのだ。

何より、出力の調整ミスが即座に自身の怪我に繋がる現状は看過できるものではない。

先導する文書の後に続き、出久が地下への階段を降りる。

今までいた体育館然とした訓練部屋から一変した、まるで地下牢へ続くような薄暗い階段。

記憶を辿ると、初めてこの家に来た際に初来が地下に威力測定用の対衝撃用隔壁展開

装置があると零していた。

（一体、僕は何をさせられるのだろうか……）

未知への恐怖と戦っている出久に気付く様子もなく、頼りない明りに黒髪を映しながら、思い出したように文書が口を開く。

「あ、今から緑谷には耐久サンドバッグ殴りをして貰うのですが、例えばエラーが出たとしても構わず殴り続けて欲しいそうです。……まあ、現段階で『終末現象』はないとは思いますが」

「エラーって、それ放置しても大丈夫なロー」

文書の発言にツツコミを入れてようとした出久の言葉が途切れる。

階段が終わり、目の前に現れた隔壁としか言いようのないメカメカしい鉄の壁に目を奪われたからだ。

歯車の噛合わせのように凹凸が縦に伸び、機械壁の両横の壁には、機械壁を貫通しているレールが伸びている。

「ローナニコレ」

「威力測定室の隔離壁だそうですね。これを作らずに威力測定室で初来が全力を出した結果、逆流した衝撃がさっきの訓練施設を吹き飛ばして横穴が空いたそうですね」

「ええ……」

何にどう突っ込めばいいのか迷う出久の目の前で文書が指先に光を灯す。

『かいじょう』

言葉が世界を変える。

鍵穴のなかった扉が開き、その先にある複数の扉までもが次々と道を譲ってゆく。

その光景に目を奪われていた出久が、ふと気づいたように口を開いた。

「あ、レール……そうか、扉をレールで動かせるようにして衝撃を逃すのか」

「ご明察だそうですね。まあ、今の緑谷に必要な装置ではないらしいです。40%くらいになれば必要になるかもしれないそうですね」

「40%、か。今の遠藤さんは、もうそんなところに居るんだね」

そんな出久の独り言に、文書は答えない。

開ききった隔壁の先で照明が瞬き、その更に先に置かれていた球体が浮かび上がった。

壁面から出てきたコンソールの盤面を、文書はまるでアニメのような高速タイピングで操作する。

余りまくった丈が邪魔じゃないのだろうか、出久は現実逃避気味にそんな事を考えていた。

「……はい、できたらいいです。簡単に言うなら、あの球体は移動エネルギーを持つ物体

に対して衝撃波を放つことで威力を相殺する性質があるそうです。今回は設定を変えて、反射する威力を5%分多くしてあるそうです」

まず衝撃波を放つ装置の意味がわからなかった出久だったが、それを口に出すことはせずにただ建設的な質問をすることにした。

「つまり、現状威力と耐久力が同等になっている状態だから、耐久力を上回った分の衝撃が僕の身体に与えられるって事？」

「そうですね、その衝撃を完全に相殺できれば威力の5%分『耐久力を強化する力』が成長したという証拠になるそうですね」

文書の言葉をゆっくりと咀嚼し、出久は首を傾げる。

「少し、上乘せする量が低い気がするけど……」

現状、5%フルカウルの出せる威力はせいぜいコンクリートを砕く程度。その5%の威力となると、もう少し高くしても問題はないんじゃないかと出久は考えた。

だからこそ、次の文書の言葉に凍り付くことになる。

「ですけど、5%でもこの修行が終わった時には50000%分のダメージが身体に与えられるそうです。これ以上の設定はお勧めできないらしいですよ」

「50000%……(まん?)!」

叫ぶ出久の前で、文書が笑う。

黒髪を揺らし、屈託なく笑うその様子があまりに恐ろしく感じられた。

「そうですよ？ 5%掛ける10000回で50000%。終わるまでここから出られませんか？」

「1万……回？」

ようやく、遅まきながらようやく出久は気付く。

先ほど感じた『地下牢へ続くような階段』という印象は間違いではなかったのだと。

そして、初来がスパルタなのは間違いなく文書の指導を受けていたことが原因なのだと。

「ああ、ちなみに、寝たりできないように意識レベルが一定以下になると直前の威力の25%分の衝撃波を周囲にまき散らす設定にしているそうです。人間、極限状態の方が生存本能を刺激されて成長するそうなので。……あ、安心してください、流星に食事とトイレの時だけは出してあげますので」

「Plus Ultra! だそうですよ緑谷」

こうして、出久の地獄の修行が幕を開けた。

「……てめえは」

「お、金髪くんこんばんは」

地獄の修行を終え、気絶した出久くんを送ってゆく途中で金髪くんと鉢合わせした。やっぱりボクの事を苦手に思っているのか、露骨に嫌な顔をされた。

薄暗く、星が見え始めた空の下での邂逅に一瞬だけ回れ右しそうになってしまった。

「……何してそうなってんのか知らねえけど、女に送らせて自分はオヤスミとはいいい身分じゃねえか」

開幕の罵倒もどこか力がなくて、前に煽り倒した時に思った『煽られ慣れてない』という印象が間違つてないと再確認した。

「これはボクが勝手にやつてることだよ？ それに頑張ってる人を馬鹿にする人のほうがいいご身分じゃないかな？」

「あゝあゝ?!」

ほらもうキレた。

あまりに低い煽り耐性に内心で頭を抱える。

人を殺せそうな目つきの金髪くん。あれだけ戦闘センスがあつて、なんで今の出久く

んにそんな敵愾心を抱くのだろうか。

出久くんの為ではなく、金髪くんの為に、あえて踏み込む。

「出久くんは頑張ってるよ。今なら全力の君とやりあつて2分……いや、3分は耐えられるようになってる。すぐに君に追い付いて追い越しちゃうよ?」

「俺がデクなんかには負けるワケがねえ!」

反射的に吠えるその姿は、どこか自分に言い聞かせているような印象で。

「今の出久くんが君と数分戦える、その事は想像できてた?」

「……!」

金髪くんは何も言い返してこなかった。それはそうだ、出久くんを見ずに下だと決めつけた認識だけで、現実の出久くんをどうやって否定できるのだろうか。

そしてその評価を下しているのが直前に両者と戦って力量を知っているボクなのだ。

「丸2日寝る事なく、食事とトイレの時以外ずっとずっと出久くんは自分の個性と向き合つて、ひたすらに修行をしてたよ。3日目からは睡眠が許されたけど、寝てる時も個性を使用させられ続けてた。本気で地獄みたいな修行の5日間だったよ」

虚ろな目をして「オールマイトがいる……他にも、7人……? もしかして、歴代の継承者……?」とかうわ言を呟いていたほどだ。かわいそうに、妄想と現実の区別がつかなくなるほど参つてたのだろう。



「……………」

金髪くんの肩が揺れる。見開かれた目は、そこまでやっていったのかという驚愕の為か。

「ボクは、君が嫌いだ。威圧的な態度も言動も好きになれないよ。……けれど、そういつた先入観なしでも、今の君より出久くんの方が凄いなと思うよ」

「俺が……デクより劣ってるだと……！」

食いしばった歯から震えた息が漏れていた。

憎しみに歪んだ瞳が揺れ、その感情のままに1歩踏み出した金髪くんを。

——個性『言霊』発動

「敵わないと思ってるから貶めてるんじゃないの？」

言葉で刺し貫く。

瞳が揺れ、定まらない視界はきつと自分の劣等感を映しているのだろう。

思った通り、金髪くんも劣等感を感じて、それを見ないようにする為に出久くんを貶めてるんだ。

だったら、ボクが言えることはもう何も無い。それは誰かに言われて納得できるようなものじゃないから。

まるで時が止まったかのように動きを止める金髪くんの横を通り過ぎる。

これから金髪くんがどう考えるかなんてわからないけれど、出久くんのような『ヒーロー』になれればいいな、と思った。

歩みを進める。夜が深くなる。先ほどまで弱々しかった星の瞬きも力強さを増してゆく。

雄英高校の入学式を前に、既に出久くんの前に問題が山積していた。

「けれど、それに負けないように背中を支え、押してあげるんだ。その為にボクが居るんだから」

誰にも聞こえていない宣誓が静かに消える。

流れ星はなかったけれど、ボクは出久くんが『最高のヒーロー』になれる事をそっと願うのだった。

## スタートダッシュ

雄英高校へと続く登り坂。

登校中の生徒達の中で、出久はふと、その顔を上げた。

一筋の風が生徒達の間を駆け抜け、桜の花弁を舞わせる。

立ち止まり、その行方を視線で追った先には、東京の街並みが遥か彼方まで続いていた。

そこは、人々が暮らす場所だ。

人々が何気ない日々を送る場所だ。

出久が、護るべき場所だ。

視線を登り坂へと戻し、出久は再び歩き出す。

風に髪を靡かせ、少しの笑みを浮かべながら。

ヒーローへの道を、進んでゆくのだった。

その姿を、ボクと文書は隣で撮影していた。

「恥ずかしいからやめて欲しいんだけど?!」

急に振り返った出久くんの顔が真っ赤になっていた。短い赤ネクタイが勢いで飛び出たのを直してあげる。

さつきまでノリノリだった癖にいい。

「引子さんに頼まれてるから却下です。親孝行する時だぞ!」

「くっ、撮るなら初来の痴態を撮りたかつたらいいです……」

「人目! 滅茶苦茶笑われてるから! あと伝聞さん本当に何言ってるの?!」

確かにクスクス笑いがそこから聞こえてくるけど、そんな事を気にしてたらアップ用の写真とか全然撮れないし。

文書の頭を風矢で撃ち抜いてから、風で浮かせていたボクのデジカメと引子さんから借り受けたホログラム撮影装置数台を回収してからサムズアップする。

出久くんは膝から崩れ落ちた。お察しの通り、止めるつもりは毛頭ない。

このままで通学の邪魔なので出久くんの腕を取って立ち上がらせる。

力が抜けきっていた出久くんだったが、それでも恥の上塗りには嫌なのか、なんとかといた様子で再び歩き出す。

「出久くん」

「……何?」

ボクに向けられた出久くんのげんなりとした表情。

真新しい、灰色を基調とし襟や袖、肩に濃緑のラインが入れられた学生服を着た出久くんは、やはり初々しくて。

でも、二の腕の膨らみや背丈からすると厚めの胸板が、服越しにでも見て取れる。

隠しようのない、出久くんの努力の証。

見る人が見ればわかる出久くんの魅力に、思わずにやける顔を隠すように笑顔を作りサムズアップ。

「言い忘れてたけど、超カッコいいよー」

「今言うの?!」

出久くんの渾身のツッコミに、クスクス笑いが強くなる。

やったね出久くん、緊張してた新入生も含めてみんな笑顔になったよ!

「いやー、でも本当に同じクラスになれてよかったよ。いやマジで」

校舎に入り文書と別れ、校内案内板で教室の位置を確認してから向かう。

ポケットから取り出した入学案内書に目を通すと、そこには所属クラスが書かれていた。

ボクも出久くんも同じA組だ。

「うん、やっぱり知り合いがいるのといかないのとじゃ全然違うからね」

そう答えながらも、出久くんはこちらを見やしない。

ほーう、そういうこと言うんだ。

思わず口がへの字に曲がる。ボクのジトつとした目つきを視界の端で捉えたのだから、出久くんは顔を背けた。

「心配させた癖に、そーいう態度取るんだ。へー」

「誠に申し訳ございませんでした……」

罪悪感に耐えきれなくなつたのか、立ち止まった出久くんは素直に頭を下げてきた。

あれから修行の毎日を送っていた出久くんだったが、ある日個性の制御をミスって文書の別館の側壁を吹き飛ばし、自分は右半身の大部分を複雑骨折、左半身もヒビが入っていないところはないくらいの大怪我をしてしまったのだ。

文書の文字魔法は万能の改変能力を持つが、『改変は一過性のものである』という性質がある。簡単に言えば、『治療』をしたとしても文字魔法を解除すれば治療したという現実が元に戻ってしまうので、再び怪我をした状態に戻ってしまうのだ。

だから、失神した出久くんを治したのはボクの『身体操作』だ。記念すべき他人に対する『身体操作』1人目は出久くんとなつたのだ。ちなみに『元の状態に戻す』という

使い方だったからか、出久くんは『身体操作』の反動はなかった。

知らせを受けた引子さんは到着すると同時にピンピンしてる出久くんを見て泣き崩れるし、ボクはといえば『身体操作』で治して安心してしまい、以降ずっと泣いていた。

どうやら原因は、耐久力を操作することを覚えてしまった為に『力を加える場所以外の耐久力強化を疎かにしてしまった』というのと、『個性自体の出力制御の未熟さ』が同時に出てしまったことが原因らしい。

急遽『出力制御』の修行として、ランダムで出される1%から5%までの出力指示に誤差0.3%以内で1000回当てないと帰れま1000をすることとなったのだ。

連続1000回じゃないだけ有情なマジキチ訓練を終えた出久くんは、途中から監督に入ってくれた撮香さんになんとか合格を貰い個性の使用を許されたのだ。

監督不足と思慮が浅いと撮香さんに本気で怒られて、今まで見たことがないくらい落ち込んでいた文書を慰めるのが大変だった。

「引子さん泣いてたし、ボクも泣いちゃったし。ついでに文書も泣いてたし」  
ちよつとしつこいけれど、これは伝えておかなきゃいけないことだと思つたのできちんと言葉にする。

「ボクも、お母さん達をこんな気持ちにさせてたんだって気付いて反省した。一緒に頑張ろう！」

「うん。もう絶対に、誰にもあんな顔をさせたりしないよ」

握り拳をこつんと合わせる。

すれ違った生徒の「リア充かよ……」という呟きに出久くんは顔を真っ赤にしてうつむいてしまった。そうだね、普通に他の生徒がいるのに何話してるんだボク達は……

そのまま、ガラスの外の景色を見ながら廊下を歩くこと数分。ボクらは目的地の1年A組の教室へとたどり着いた。

他の教室もそうだったけど、扉が超でかい。異形型個性の生徒にも配慮したバリアフリーなのだろう。

「大きいね。ここまで大きいと開け閉めが大変そう……」

「流石にそこはしっかり設計されてるんじゃないかな……それより、机とかも大きいのかが凄く気になる」

「僕らの普通だと思うよ、流石に」

そんな冗談を言い合いながら扉を開ける、と見覚えのある金髪くんがいた。

「かつちゃん……」

立ち止まり、そう呟く出久くん。金髪くんも視線に気付いたのかこちらに顔を向けた。

「机に足をかけるな！ 雄英の先輩方や机の製作者方に申し訳ないと思わないか?！」



そして、これまた見覚えのある眼鏡くんが、机に足をかけていた金髪くんを注意する。  
「思わねーよ、どけ邪魔だ端役」

「はや……っ。初対面の人間に対してなんて言い草だ！」

こめかみに青筋を立てる眼鏡くん。

眼鏡くんに同意したいところなんだけど、初日にいきなり喧嘩沙汰なんて流石に洒落にならないので止めに入ることにする。

「行つてくるね出久くん」

「えっ、煽りに？」

止めにだよ。

足早に近寄ると、ちよつと意識を逸らした間にヒートアップしたらしい2人は激しく言い合っている。まあ相性悪そうだもんねえ君たち。

「おはよー金髪くん、朝からさっそく元気に爆発してんね。おはよう眼鏡くん、ボクは遠藤初来だよ、よろしく」

金髪くんは舌打ち1つ。眼鏡くんはそんな態度を注意しようと口を開き、それよりもボクと挨拶を交わすことを選んだのかこちらに向き直った。

正面から見るとすぐわかりやすい真面目感。髪はきつちり7：3分けだし、背筋めつつや伸びてるし、腕の動きがロボットダンスみたいにカクカクだし。

最後は違うか……

「ボ……俺は聡明中学出身、飯田天哉だ。君は……説明会場で言葉を交わした、実技試験会場も一緒だった風女子だね」

ほう、聡明中とな。超有名なエリート校出身ならばこの真面目な感じもわからんでもないか。

風女子という斬新な呼ばれ方に言葉を一瞬詰まらせていると、聞き覚えのある声が後ろから聞こえてきた。

「えっ、遠藤さんってあんときの演説の女の子だったの?！」

「お、上鳴くん同じクラスだったか。おはよう」

かつてボクをナンパしてきた電気少年の上鳴くんが手を上げていた。

軽くハイタッチ。言及なかったから気付かれてなかったのかと思っただけど、やっぱりか。

「えー、かみなり君? きみ気付いてなかったの? ウチはすぐ気付いたけど」

次に声を掛けてきたのは……耳たぶが紐状に伸びて、先端がジャックになってる女の子だった。

全体的にスラつとしててサバサバ系の雰囲気を感じ取れる。

ボクの視線に気付いたのか、手を上げてウインクしてきた。

「あ、ウチは耳郎響香、よろしく」

「ボクは遠藤初来、よろしくね」

「お、俺は上鳴電気、よろしく！　　というか説明会場暗かったし俺最前列だったししゃーないじゃん！」

そんな弁明をしつつも、さっそく女の子と会話できたのがうれしいのか、上鳴くんの顔はよく見れなければわからない程度だが緩んでいた。

元男としてわかりみが深い。

と、今まで黙っていた金髪くんが急に机を拳で叩いた。

硬直する皆。

「さっきからヒトン席囲んでぺちやくちやとクソうるせえBGM垂れ流しやがって、自分の席でやれや！」

「そういえば君の名前まだ知らないんだけど」

「ヒトの話は聞け！　あと名前は爆豪だ呼んだらクロス！」

名前を呼んではいけない金髪くんの暴言に、皆の表情が歪む。

流石に、流石に知り合いが初日からヘイト稼いでいるのは見過ごせないので口を開く。

「ごめんね、この金髪くんこういう不良っぽいのがカッコイイと思っちゃう年頃なんだ

よ。優しく見守ってあげて」

「そ、そうだったのか……」

ボクの適当な発言を信じてしまった飯田くんが、硬くなっていた表情を緩めて金髪く  
んを見る。

あー火に油注いじやったか、とボクが後悔するのと、金髪くんが爆発するのは同時  
だった。

勢いよく立ち上がり、椅子が大きな音を立てる。今までこちらに興味がなかったクラ  
スメイトも視線を向けてきたが、金髪くんは構わずに吠えた。

「ちげーよカスが死ねクソ垂れ目！」

「俺は垂れ目じゃないぞ！」

「てめえじゃねえよ死ね！」

不意打ちの天然ボケに思わず吹き出してしまふボくら。

それがまた金髪くんの怒りを煽り立ててしまったようで、金髪くんのこめかみに青筋  
が浮かび上がっている。

なので、更に煽ってみた。

「ボクは垂れ目じゃないよ！」

「てめえは垂れ目だろうが死ね!!」

腹筋の限界を超えた耳郎さんと上鳴くんが同時に崩れ落ち、蹲る。

そこに飯田くんが「大丈夫か?! ほ、保健室に連れていこうか?!」と追撃を掛ける。天然って怖いねマジで。

ふと、視界の隅で出久くんと……実技試験で同じ会場だった、ボクのなかで出久くんのヒロイン候補ナンバー1の無重力少女が会話しているのが見えた。

そして、その後ろに寝袋が転がってきたのも見えた。

ええ……?!

「お友達ごっこがしたいなら他所へ行け。ここはヒーロー科だぞ」

その言葉は、寝袋から顔だけ出している男が放ったものだった。

色々突っ込みどころがあつたけれど、とりあえず怒りに震えている金髮くんの肩に手を回して引き寄せる。

「ボク達友達に見えるんだって! やったね金髮くん友達が増えたよ!」

一際大きく震える金髮くんの身体。

あまりの怒りに一周まわって冷静になったのか、虚無の表情になった金髮くんが口を開いた。

「だったら他所いって勝手に死んでくれ」

こいつあしヴィー!

「グラウンドひつろ……」

あれから、寝袋から脱皮を果たした自称担任の男、相澤先生に連れられてボクらはグラウンドに出てきた。広すぎて向こうが見えないわろた。

体操服に着替えてグラウンドに出る以外の説明はない。ボクらには困惑しかない。先頭を歩いていった先生が振り返る。

髪はボサボサ、目に力は無く無精ひげが伸びつぱなし。白い布をマフラーみたいになぐるぐる巻きにしている。服は黒一色。不審者同然の様相と、寝袋のまま教室まで来たことも相俟って不信任が凄まじい。

相澤先生は、ボクらが揃っていることを確認し終わると、気だるげに口を開いた。

「えー、今から個性把握テストをやります」

ちよつと待てやあ！

ボクの心のツツコミを受け取ったかのように、無重力少女が「ちよつと待ってくださいー！」と一歩前が出る。

「入学式は？ ガイダンスは?!」

「ヒーローになるなら、そんな悠長な行事出る時間ないよ」

一刀両断。固まる無重力少女に哀悼の意をささげる。でもまあ、説明が全くないという点を除けば、納得できなくも……

「それに、いつ使うかわからない施設を時間をかけて説明するのは不合理だ。必要な時に必要なだけ調べれば済む話なんだからな」

「超合理主義……」

思わず呟くと、何故か視線を向けられた。

「雄英は自由な校風が売り文句。そしてそれは『先生側』もまた然り」

相澤先生は歩き出す。事前に出してあった、ソフトボール投げ用のソフトボールが置いてある台に近づく。

「ソフトボール投げ、立ち幅とび、50m走、持久走、握力、反復横とび、上体起こし、長座体前屈。中学の頃からやってるだろ？」 『個性』禁止の体力テスト」

この世界の体力測定は、ボクの前世と全く同じだった。それに疑問を抱いたことは無くもなかった。先生の言いたい事は少しだけわかった。

「国は未だ画一的な記録を取って平均を作り続けている、合理的じゃない。……まあ、文部科学省の怠慢だよ」

厳しい言葉だったが、言ってることは間違っていない。

『個性』を認めておきながらその対策を講じないから、傷つく子が居ることをボクは知っている。

相澤先生が手に持ったソフトボールをボクに投げ渡してきた。

手の中に収まったボールは、中に機械が内蔵されているのかやけにメカメカしかった。が、文書の家の方がメカメカしいのでスルーする。

「遠藤、中学の時ソフトボール投げ何mだった？」

「182m」

「じゃあ個性を使って……182m？」

ソフトボールと同じく台に置かれていた、測定器であろうプレート状の機械を取った相澤先生の動きが止まる。

ボクの言葉に皆がざわつく。が、まあこれは想定内である。何せボクも信じられないのだから。

「個性を使用せずに182m……？」

「個性を使用せずに182mです」

ゆつくりとボクの言葉を咀嚼するように目を閉じ顎に手をやる相澤先生。

やがて結論が出たのか、1つ頷いた。

「じゃあ個性を使ってやってみろ。円から出なきや何してもいい」



「スルー力高い！」

無重力女子のツツコミに背を押されるように、ボクは円の中に入る。

個性を使つて投げるとな。

とりあえず手を振る。宙に線が描かれ風が巻き起こる。

うーん、最大まで溜めるとみんな吹っ飛ぶんだけどな……

「先生、周囲への被害は？」

「そこらへんの考慮もテストの内だ。はよやれ」

あいあいさー。

ぐるぐると、ボクを中心に風を回す。

広がる線が観ている皆をすり抜け、グラウンドを埋め尽くす。

大体1分くらいかけて周囲に被害が出ない程度に広く太くした風の流れ、それを一気

に集束する！

突如グラウンドに現れた竜巻が砂を巻き込み、ボクを中心とした砂塵の竜巻が出来

た。映画のワンシーンみたいだ。

その竜巻を構成する100本余りの線でソフトボールを包み込み、グラウンドに風の

唸る音が響き渡る。

準備完了。

「じきまーす」

軽く地を蹴り勢いをつけて、投擲。

ボールに纏わせた風を使わずとも既に400mは超える感じだけでも……今だ！

ボールに纏わせた風を、放物線の頂点の位置で1方向に一瞬で束ねる。

小型台風のエネルギを一点に集中させた力がボールに加わり、空気を破るような音

と共に、ボールに白い雲が纏わりつくような現象が起きた。やったね音速超え！

しばらく待つてから、相澤先生の持つている端末が電子音を立てた。

そのディスプレイには8062mと表示されていた。

「まずは自分の『最大限』を知る。それがヒーローの素地を形成する合理的手段」

相澤先生の言葉に誰も反応を返さない。

皆の視線は非常識な数値をたたき出したボクへと向けられていた。

そんな雰囲気の中、相澤先生がほうと息を吐く。

「君ら、ちよつと非常識にぶち当たったらすぐに思考も動きも止めてしまうような、そんな情弱な覚悟でここに来てるのかい？」

ゆらり、振り返る。その目はボクらの覚悟を問うているかのように鋭かった。

なるほど、と繰り返すこと3度。まるで楽しい事でも思いついたかのように、うつすらと笑みを浮かべて相澤先生は言い放つ。

「よし、トータル成績最下位の者は見込み無しと判断し、除籍処分しよう」

「異議あり!!!」

バツと手を上げ叫ぶ。「遠藤さん?!」と出久くんも叫ぶ。

相澤先生の視線がゆつくりとこちらへ向いた。

「気のせいかな……? 今、異議があると云ったかい?」

「はい、言いました」

鋭いプレッシャーがボクを突き刺す。負けじと一歩前が出る。

「ああ、特待生になれたから勘違いしてるのかな。生徒の如何は先生の自由、例えば実技トップだとしても扱いは他の生徒と同じだ。俺の意見に反対の意思を見せるのなら除籍処分だよ?」

ああ、そういえばボク特待生だったっけ。普通に忘れてたのでスルーする。

「例え除籍処分されたとしても、根本的に間違っている事に頷くことはできません」

「根本的に? ……いいだろう、今回だけその挑発に乗せられてあげるよ。言ってみな」

笑う相澤先生。雰囲気からわかる、ここでボクが間違ったことを言えば除籍処分になるだろう。

けれど、ボクには秘策がある。

そう、個性『言霊』（洗脳）だ。

ー個性『言霊』発動

「相澤先生が生徒としてテストを受けるとします」

「……で？」

皆のイメージに若い相澤先生が体操服を着ている絵が刻み込まれる。

洗脳のお陰で相澤先生も、苦々しい顔をしながらも続きを促してくれた。

「そして、相澤先生以外の生徒は全員オールマイトとします」

ボクと出久くん以外の皆の脳内は地獄絵図と化した。

ボクと出久くんはオールマイト大好きだからノーダメージだ。

「……」

言葉もなく頭を押さえている相澤先生に、問いかける。

「その状態で、相澤先生は最下位を免れますか？」

「……いや、無理だな」

言いたいことを洗脳で強制的に理解させる。

当たり前の話だ。この個性把握テストでは現象系や強化系の個性が圧倒的有利。

逆に異形系や特殊な系統の個性の持ち主だと十全にその性能を発揮できない可能性もある。

それが普通のテストだったなら何も言わないが、直接除籍という形になるのならば一言申さなくてはいけない。

要するに、この内容のテストで『周囲と比べて見込みがあるかないか』を判断するのは不合理すぎるという話だ。

だというのに、まだ相澤先生は薄ら笑いを止めない。

「プロである相澤先生でも周囲の状況によつては見込み無しと判断されるテストを、生徒に実施するのは不合理です」

「ほう、つまり？」

何かを、期待するかのような問いかけ。

つまり……

「このテストの内容で、最下位を見込み無しと判断するのは間違つてー」

いる、と言葉にしようとして、自分の言葉に引つかかる。

無意識に引つかかった言葉は……

「見込み無し……?」

そうだ、相澤先生は『見込み無しとして除籍処分とする』と言っていた。『最下位を除籍処分とする』とは言っていない。ほぼ言っているようなものだとは思うけど。

ボクの呟きはしっかりと相澤先生の耳に届いていたらしく、笑みが深まる。うわあああ、マジかこれマジか。

「除籍処分になるのは、見込みのない生徒」

未だ『言霊』が乗っているボクの言葉が皆に届く。幾人かは気付いたのか、顔を引き攣らせた。

これは、言わなきやダメだ。知らずにテストに挑んでダメでしたーなんて冗談にもならないから。

ゆっくりと、息を吸う。

「順位に関係なく、見込み無しと判断された生徒は全員除籍処分……?」

「ー正解だ、遠藤。さっきの発言、今回だけは見逃してやるよ」

ゾツと、皆の血の気が引く音が聞こえてくるようだった。

あまりにも、あまりにも高い最初の壁。

その向こう側にいる先生が、髪を掻き上げ笑う。

「驚いたか？　これが、雄英だ。数多くのトップヒーローを輩出した学校だ。生半可な決意では登り切れない登竜門だ」

「放課後マックで談笑したかったならお生憎。これから三年間、雄英は全力で君たちに苦難を与え続ける」

『Plus Ultra』さ。己の想いを貫きたいなら、この程度の壁は全力で乗り越えて来い」

個性把握テストが、始まった。

テストが終わった。出久くんが大分やべえ感じになっててわろた。

語彙力が消失しかけたのを立て直す。

出久くんの記録を挙げると

50 m 走、3 秒 5 2

握力、130 kg w

立ち幅とび、822 cm

反復横とびは残念ながら強化が足を引っ張って38回。

ソフトボール投げ、538.3 m

上体起こしは、押さえていた金髪くんを吹っ飛ばしてしまつて計測不可。

長座体前屈は……うん、普通。

持久走は3位。

まず間違いないく、個性が使えるようになってから1か月ちよいの人間が出していい記録ではない。

相澤先生は個性を制御している出久くんを見て驚いていたので、もしかしたらこのテストは出久くんを落とすことが目的だったのかもしてない。まあ確証もなく確認できるわけもないけれども。

テストが終わり、成績が発表される段階になつても皆は緊張感を持つたままだつた。

それも当然だ。何故なら成績と除籍処分されるか否かは別問題となつているから。

「んじや、パパつと結果発表」



相澤先生がデバイスを操作すると、ゆっくりとホログラムが浮かび上がる。皆の視線が、浮かび上がる成績へと注がれる。

「ちなみに除籍はウソな」

皆の視線が、ホログラムの向こうの相澤先生に注がれる。当の本人は悪戯が成功した邪悪な子供のように笑っていた。

「君らの最大限を引き出す『合理的虚偽』」

嘘だ、見込みないと思ったなら絶対除籍処分にしてたでしょ！ 目が本気だったし！ 突っ込みを入れようか迷っていると、崩れ落ちるちっちゃい男の子の姿が目に入った。たしか実技試験の説明会場でボクを視姦してきたブドウ頭だ。

名前は……峰田実くん。成績一覧を見ると最下位は峰田くんだった。他人と比べると大体の成績はわかってしまうので、戦々恐々としていたのだろう。

ボクは……まあ、無事2位だった。1位の八百万さんの個性が流石に規格外過ぎましたね。万物を創造できる個性『創造』とかヤバ過ぎ。

握力測定で万力だしてくんのはダメでしょ、不正ではなかったけど！

ちなみに出久くんは5位、金髪くんにギリギリで負けた。いや、このテストで出久

くんには勝つのか金髪くん。凄いな。

波乱のテストが終わり、今日のカリキュラム（ボク達は参加していない）は終了らしい。

相澤先生の「気を付けて帰れよ」という言葉が終わると同時にボクは立ち上がり、皆に声を掛ける。

「ねえ、暇な人いたらこれからマック行かない?！」

幾人かが吹き出す音。その発生源に目を向けるより早く、白い布がボクに巻き付いてきた。なんだこれ硬っ！

ぐい、と引き寄せられた先には目つきを鋭くした相澤先生が居た。おこなの？

「なあ遠藤、お前は俺に喧嘩を売っているのかな？」

「違います！ これから切磋琢磨していく皆と交流したいと思っただけです！ プロヒーローはコミュニケーション能力も必要と聞き及んでますので！ つまりこれは修行の一環と言えるかと！」

本当はお腹減ったから声かけただけなんだけど、建前を前面に押し出す。

しばらくしかめっ面になっていた先生も、反論の余地がないと考えたのか布の締め付けを緩めてくれた。

「お前は、詭弁を弄するのがうまいな」

「ありがとうございます！」

「褒めてない」

呆れた様子の相澤先生が、溜息ひとつ。

「お前らが交流を深めるのは勝手だ。だが遠藤、お前はダメだ」

「なんで?!」

布の締め付けが強くなった。

髭面が近づいてくる。やだー!!

「なあ特待生、お前は施設を借りる為に色々と準備が必要だった筈だが、それを知っておかなくていいのか？」

ぎりぎりとして締め上げられる身体。歓声をあげる峰田くん。

せんせー、あの葡萄収穫してください！

あと、耳郎さんも締め上げられて強調されたボクの胸をガン見していた。ひ、貧乳い  
いと思えますよ？ 個人的にだけ。

「……とにかく、だ。書類の出し方と当日空いている先生の探し方教えるから、とりあえず来い」

「くっ、ハンバーガーが……」

ボケると締め付けが強くなった。ミイラの気持ちが少しだけわかった気がした。そんなボクと先生に、恐る恐るといったふうな女の子が近づいてきた。

ピンク色の肌に白黒が反転した目、額から生えた一對のツノ。異形型にも思えるが、確かテストでは溶解液みたいなのを出していた、発動型の個性の女の子だ。

「あのお、ちよつといいですか……?」

「どうした芦戸」

相澤先生の言葉で、彼女の名前を思い出す。そうだ、芦戸三奈さんだ。

芦戸さんはボクと先生の間で視線を彷徨わせ、少し躊躇いがちに口を開いた。

「えーっと、個性把握テストの時も言ってたと思うんですけど、遠藤? が特待生って、どういうことですか……? 一応入学前に色々調べたんですけど、確か特待生なんてなかったと思うんですけど……?」

芦戸さんの言葉に納得する。そりゃそうだ、自分の入学したいと思う学校の情報くらい普通は事前に調べる。

それなのにクラスメイトが自分の知らないシステムで入学したと聞いたら、事情を聞

きたくなるのも当たり前の話だ。

しかもクラスの人数は例年より1人増えて21人だというのも更に不信感を煽る。ボクらのやり取りを聞いていたクラスメイト達からの視線に、相澤先生は面倒くさそうに頭を掻いて口を開いた。

「そのまんまだ。特別待遇生徒、試験……実技試験で優秀な成績を修めた者に対する優遇措置。まあ俺の知る限りでは特待生制度の対象になったのは遠藤だけだな。芦戸が知らなくても無理はない」

えっ、特待生って該当者ほとんど居ないの？ それこそ初耳なんだけど。思わず動きを止めてしまうボクに、クラス中の視線が集まる。

えっ、この注目のされかた嫌なんですか……

「とにかく、お前は無理だ。諦めて後日交流しろ……まあ、そんな余裕があればの話だが」

縛り上げられた状態のままずりずりと引きずられてゆくボク。お尻が擦れてるんですか……

まるで売られてゆく仔牛を見るかのようなクラスメイト達の視線が非常につらい。つらい。

「扱い雑じゃないですかね？」

「初日でこの扱いをされるような行動を取る自分を省みる」

ぐう……

なんとかぐうの音だけは出したボクは、そつと金髪くんに視線を向ける。目が合った。

ボクが特待生だと知ってからの、強い視線と敵意。

教室から出て、職員室に着いて布を解かれてからもずっと、金髪くんの敵意を含んだ目だけが頭に残っていた。

あー、どう考えても突っかかってくるんだろうなあ……

憂鬱になったボクは、影を差したこれからの学校生活に思いを馳せながら相澤先生の話聞くのだった。